

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第51集

UCHIJOUATO

内 城 跡

一般国道219号道路改築事業（春田バイパス）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2002

宮崎県埋蔵文化財センター

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第51集

UCHIJOUATO

内 城 跡

一般国道219号道路改築事業（春田バイパス）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2002

宮崎県埋蔵文化財センター

序

宮崎県教育委員会では、平成10年度から同11年度にわたり宮崎県宮崎土木事務所の依頼を受け、一般国道219号道路改築事業（春田バイパス）に伴う内城跡の発掘調査を実施いたしました。本書はその発掘調査報告書です。

調査の結果、中世城郭の構成要素としての溝状遺構（空堀）や掘立柱建物跡などの遺構を検出するとともに土師器の坏や陶磁器なども出土しました。また、その他にも縄文時代早期を中心に様々な遺構や遺物が確認され、綿々と続いてきた人々の営みの跡を垣間見ることができました。

本書が学術資料として、あるいは学校教育や生涯教育の資料として広く活用され、埋蔵文化財に対する認識や理解を深めるための一助となることを期待します。

最後になりましたが、調査にあたってご協力いただいた関係諸機関をはじめ、ご指導ご助言をいただいた諸先生方、ならびに地元の皆様方に心より厚く御礼申し上げます。

平成14年3月

宮崎県埋蔵文化財センター
所長 矢野 剛

例 言

- 1 本書は、宮崎土木事務所が計画した一般国道219号道路改築事業（春田バイパス）に伴う事前調査として宮崎県教育委員会が実施した内城跡の発掘調査報告書である。調査は、宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
- 2 本書に使用した位置図は、国土地理院発行の2万5千分の1図『佐土原』をもとに作成した。
- 3 現地における実測図作成は主として鈴木健二、福田泰典、松本茂がおこない、青山尚友、石川悦雄、南正覚雅士、谷口武範、東憲章、久木田浩子、日高広人、甲斐貴充の助言・協力を得た。
- 4 地形測量、空中写真撮影、自然科学分析はそれぞれ業者に委託した。
- 5 遺物・図面の整理は宮崎県埋蔵文化財センターでおこない、遺物の実測・拓本・計測などについては、福田、松本のほか整理作業員の協力を得ておこなった。
- 6 本書で使用した写真は、現場での写真を鈴木、福田、松本が、遺物写真については福田が撮影した。
- 7 本書に使用した方位は主に座標北である。一部の図面で磁北を用いた場合には、『M. N.』と明記した。（内城跡付近では磁針方位西偏約 $5^{\circ} 40'$ である。）なおレベルは、海拔絶対高である。
- 8 土器の色調および土層の注記は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」に準拠した。
- 9 本書で使用した遺構略号は以下の通りである。

S A 竪穴住居跡	S B 掘立柱建物跡	S C 土坑
S E 溝状遺構	S I 集石遺構	S P 炉穴
- 10 本書では、第Ⅲ章第3節・第4節および第Ⅳ章の炉穴、土坑、石器関連の執筆を松本が、その他の執筆は福田が担当した。編集は、福田と松本がおこなった。
- 11 調査区として設定したG区（曲輪Ⅳ）内の腰曲輪等については全体の縄張り図（第7図）に示した曲輪番号との混同を避けるため、「曲輪1～5」の番号を使用する。しかし、その他のD区（曲輪Ⅶ）、E区（曲輪Ⅵ）については曲輪内を細分をしないので縄張り図との直接対比が可能である。
- 12 内城跡に関する遺物・実測図などは宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

第I章	はじめに	
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査の組織	1
第3節	遺跡の位置と環境	
第II章	調査の概要	2
第1節	調査の経過	5
第2節	基本層序	6
第III章	調査の記録	
第1節	中世の遺構と遺物	10
第2節	古代の遺構と遺物	23
第3節	縄文時代早期の遺構と遺物	25
第4節	縄文時代草創期および旧石器時代の遺物	56
第5節	その他の時代の遺物	59
第IV章	まとめ	65

挿図目次

第1図	内城跡の位置と周辺の遺跡 (S = 1 / 2,500)	3
第2図	内城跡周辺地形図 (S = 1 / 4,000)	4
第3図	内城跡基本層序模式図	7
第4図	内城跡におけるD・E・G区の層序比較 (S = 1 / 50)	7
第5図	A、B、D、E区グリッド配置図 (S = 1 / 800)	8
第6図	G区グリッド配置図 (S = 1 / 800)	9
第7図	内城跡縄張り図 (S = 1 / 4,000)	12
第8図	内城跡曲輪IV (G区) 遺構配置図 (S = 1 / 400)	13
第9図	G区1号、2号溝状遺構実測図 (S = 1 / 200)	15
第10図	G区3号溝状遺構実測図 (S = 1 / 200)	16
第11図	G区1～3号溝状遺構埋土断面図 (S = 1 / 60)	16
第12図	G区溝状遺構出土遺物実測図 (S = 1 / 3)	17
第13図	G区1号掘立柱建物跡実測図 (S = 1 / 60)	18
第14図	3号柱穴実測図 (S = 1 / 20)	18
第15図	3号柱穴出土遺物実測図 (S = 1 / 5)	18
第16図	内城跡出土土師器実測図1 (S = 1 / 3)	19
第17図	内城跡出土土師器実測図2 (S = 1 / 3)	20
第18図	内城跡出土瓦器・陶磁器実測図 (S = 1 / 3)	20

第19図	G区出土銭貨拓影1 (S = 1 / 1)	21
第20図	G区出土銭貨拓影2 (S = 1 / 1)	22
第21図	銭貨別出土枚数の比較	22
第22図	E区1号竪穴住居跡実測図 (S = 1 / 80)	23
第23図	E区1号竪穴住居跡出土遺物実測図 (S = 1 / 2)	24
第24図	D区縄文時代早期遺構・遺物分布図 (S = 1 / 200)	25
第25図	E区縄文時代早期遺構・遺物分布図 (S = 1 / 250)	26
第26図	G区縄文時代早期遺構分布図 (S = 1 / 400)	27
第27図	G区南西部縄文時代早期遺物分布図 (S = 1 / 200)	28
第28図	G区中央付近縄文時代早期遺物分布図 (S = 1 / 250)	29
第29図	D区、E区集石遺構実測図 (S = 1 / 30) S I 1 ~ 5 (D区)、S I 6 (E区)	32
第30図	E区、G区集石遺構実測図 (S = 1 / 30) S I 7 ~ 11 (E区)、S I 12 ~ 13 (G区)	33
第31図	G区集石遺構実測図 (S = 1 / 30) S I 14 (G区)	34
第32図	G区炉穴実測図1 (S = 1 / 40)	36
第33図	G区炉穴実測図2 (S = 1 / 40)	37
第34図	G区炉穴実測図3 (S = 1 / 40)	38
第35図	G区1号土壇実測図 (S = 1 / 20)	39
第36図	内城跡出土縄文時代早期土器実測図1 (S = 1 / 3)	44
第37図	内城跡出土縄文時代早期土器実測図2 (S = 1 / 3)	45
第38図	内城跡出土縄文時代早期土器実測図3 (S = 1 / 3)	46
第39図	内城跡出土縄文時代早期土器実測図4 (S = 1 / 3)	47
第40図	内城跡出土縄文時代早期土器実測図5 (S = 1 / 3)	47
第41図	内城跡出土縄文時代早期石器実測図1 (S = 2 / 3)	49
第42図	内城跡出土縄文時代早期石器実測図2 (S = 1 / 2)	51
第43図	内城跡出土縄文時代早期石器実測図3 (S = 1 / 2)	52
第44図	内城跡出土縄文時代早期石器実測図4 (S = 1 / 2)	53
第45図	内城跡出土縄文時代早期石器実測図5 (S = 1 / 2)	54
第46図	内城跡出土縄文時代早期石器実測図6 (S = 1 / 2)	55
第47図	内城跡出土縄文時代草創期および旧石器時代石器実測図1 (S = 2 / 3, 231と232はS = 1 / 2)	57
第48図	内城跡出土縄文時代草創期および旧石器時代石器実測図2 (S = 1 / 2)	58
第49図	E区出土磨製石鏃実測図 (S = 2 / 3)	59
第50図	G区出土耳環実測図 (S = 2 / 3)	59
第51図	G区表面採集近世陶磁器実測図 (S = 1 / 3)	59

表 目 次

第1表	錢貨別出土枚数一覧表	22
第2表	集石遺構一覧表	34
第3表	遺物観察表1	60
第4表	遺物観察表2	61
第5表	遺物観察表3	62
第6表	石器計測表1	63
第7表	石器計測表2	64
第8表	放射性炭素年代測定値一覧表	66

図 版 目 次

図版1	内城跡全景（南東上空から） G区全景（北上空から）	71
図版2	A区全景（E区から） B区全景（南から） C区全景（尾根部分） D区全景（E区から） E区全景（北上空から） F区全景（湧水により崩落するトレンチ） G区中世遺構検出面（垂直） G区縄文時代早期遺構検出面（垂直）	72
図版3	1号溝状遺構（SE1、G区） 1号溝状遺構埋土状況 2号溝状遺構（SE2、G区） 2号溝状遺構埋土状況 3号溝状遺構（SE3、G区） 3号溝状遺構埋土状況 1号掘立柱建物跡（SB1、G区） 3号柱穴根石検出状況 1号竪穴住居跡完掘状況（SA1、E区）	73
図版4	縄文時代早期遺構検出面（G区、I5・I6グリッド付近） 鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah）堆積状況（G区、T3付近） 礫群検出状況（G区、E10グリッド付近）	74

	礫群検出状況 (G区、I 5・I 6 グリッド付近)	
	1号集石遺構 (S I 1、D区)	
	2号集石遺構 (S I 2、D区)	
	3号集石遺構 (S I 3、D区)	
	5号集石遺構 (S I 5、D区)	
図版 5	75
	6号集石遺構 (S I 6、D区)	
	7号集石遺構 (S I 7、E区)	
	8号集石遺構 (S I 8、E区)	
	9号集石遺構 (S I 9、E区)	
	11号集石遺構 (S I 11、E区)	
	12号集石遺構 (S I 12、G区)	
	13号集石遺構 (S I 13、G区)	
	14号集石遺構 (S I 14、G区)	
図版 6	76
	2～9号炉穴完掘状況 (G区、H5グリッド)	
	I 6グリッド付近遺構分布状況	
	6号および7号炉穴内礫検出状況	
	16号炉穴完掘状況	
	17号、18号炉穴完掘状況 (左：南から、右：北から)	
図版 7	77
	10～12号炉穴完掘状況	
	1号炉穴完掘状況	
	2～4号炉穴完掘状況	
	9号炉穴完掘状況	
	10号炉穴完掘状況	
図版 8	78
	11～13号、15号炉穴完掘状況	
	14号炉穴完掘状況	
	15号炉穴完掘状況	
	19号炉穴埋土状況	
	19号炉穴完掘状況	
	20号炉穴埋土状況	
	1号土壙完掘状況	
	縄文時代早期の炭化材検出状況 (D10杭付近)	
図版 9	79
	G区溝状遺構出土遺物 (外面)	
	G区溝状遺構出土遺物 (内面)	
	内城跡出土土師器 (集合)	

	土師器の底部内面調整 内城跡出土土師器 1	
図版10	80
	内城跡出土土師器 2 G区1号掘立柱建物跡3号柱穴出土遺物 内城跡出土中世陶磁器 内城跡出土錢貨（拓影掲載分）	
図版11	81
	開元通寶（背文錢「洛」） 1号竪穴住居跡出土遺物 縄文時代早期土器 I類 縄文時代早期土器 II a・II b類 縄文時代早期土器 II c類 縄文時代早期土器 III類 縄文時代早期土器 IV a類	
図版12	82
	縄文時代早期土器 IV b類 縄文時代早期土器 V類 縄文時代早期土器 V類 縄文時代早期土器 VI類 縄文時代早期土器 VI類 縄文時代早期土器 VII類	
図版13	83
	縄文時代早期土器 VIII・IX類 縄文時代早期土器 X類 縄文時代早期石器（石鏃、尖頭状石器、尖頭器） 縄文時代早期石器（楔形石器、石核） 縄文時代早期石製品（有孔石製品） 縄文時代早期石器（石斧）	
図版14	84
	縄文時代早期石器（礫器） 縄文時代早期石器（磨石、石核、剥片） 縄文時代草創期および旧石器時代の石器 E区出土遺物 G区出土遺物 G区表面採集遺物	

第 I 章 はじめに

第 1 節 調査に至る経緯

内城跡は、宮崎県宮崎郡佐土原町大字東下那珂字内城に所在する。

この地は、旧石器時代からの遺物を包蔵する船野台地の東端に位置する。平成 9 年、一般国道 219 号道路改築事業（春田バイパス）の計画に伴い、宮崎土木事務所より県文化課に埋蔵文化財の有無の照会があった。同年、現地での踏査を行った結果、路線予定地内に中世城郭の遺構が遺存していることが確認され、道路改築工事により遺跡に影響が及ぶことが確実であったため、文化課と宮崎土木事務所による協議を行った結果、現状保存が困難な部分について記録保存のための発掘調査を行うことになった。

調査は宮崎土木事務所の依頼により、宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが平成 10 年 11 月 16 日から平成 11 年 11 月 2 日までの間実施した。

第 2 節 調査の組織

内城跡の調査組織は次の通りである。

調査主体	宮崎県教育委員会	(平成 10 年度)	(平成 11 年度)
	教 育 長	笹 山 竹 義	同 左
	教 育 次 長	川 崎 浩 康	新 垣 隆 正
	教 育 次 長	岩 切 正 憲	同 左
	文 化 課 長	仲 田 俊 彦	同 左
	課 長 補 佐	矢 野 剛	同 左
	主幹兼庶務係長	井 上 文 弘	同 左
	埋蔵文化財係長	北 郷 泰 道	同 左
	主 任 主 事 (調整担当)	重 山 郁 子	同 左

宮崎県埋蔵文化財センター

	所 長	田 中 守	同 左
	副 所 長	江 口 京 子	
	庶 務 係 長	児 玉 和 昭	同 左
	調 査 第 二 係 長	青 山 尚 友	同 左
	主 査 (調査担当)	鈴 木 健 二	
	主 査 (調査担当)	福 田 泰 典	同 左
	調 査 員 (調査担当)		松 本 茂

調査指導 鈴田由紀夫（九州陶磁文化館）

調査協力 宮崎県宮崎土木事務所 佐土原町教育委員会 佐土原町企画調整課兼土地開発公社

第3節 遺跡の位置と環境

佐土原町は、九州山地にその源を發し宮崎平野のほぼ中央を流れる一ツ瀬川下流の右岸に位置する。日向灘に面している町域の半分を占める沖積低地は、日向灘に面する海岸地帯から広がりはじめ、隣接する児湯郡新富町との境をなす一ツ瀬川と町内を東流する石崎川沿いを中心に展開している。一方、西に目を転じると開析により細長く伸びた台地や丘陵が広がっており、その縁辺部は往々にして舌状を呈する。また、この開析谷に低地が入り込んだ「迫」と呼ばれる地形が随所に見られ、字名にもしばしば散見される。今回の調査対象となった内城跡も海拔絶対高でおよそ85mの船野台地東端に位置し、その縁辺部からは尾根が放射状に張り出し蛸足状の地形を呈している。特に北側斜面は急崖で、裾部では水が湧き出し湿地帯となっているところが多い。

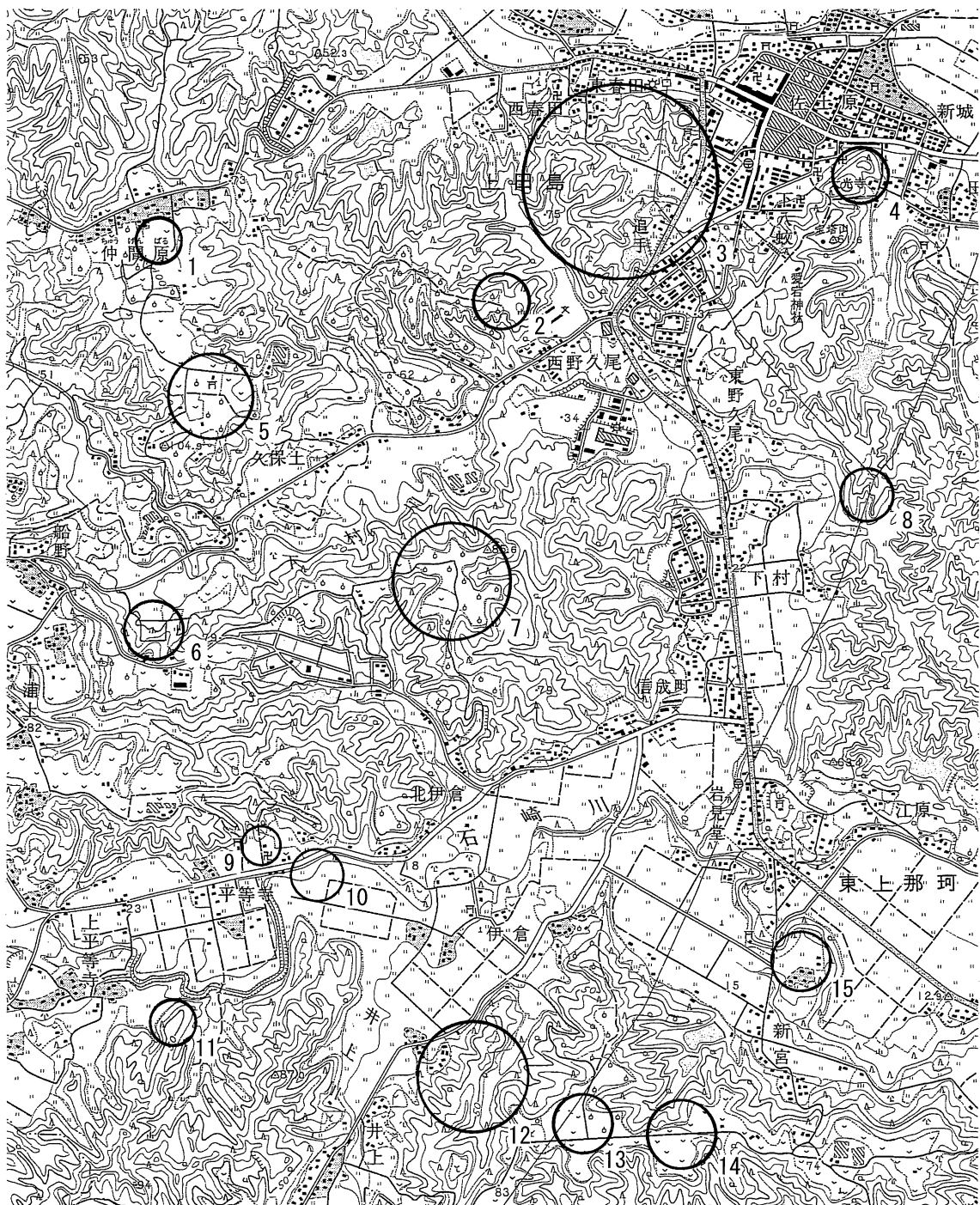
同町内では、詳細分布調査等により200を越える埋蔵文化財包蔵地や古墳などが確認されている。主な遺跡としては、旧石器時代の指標細石核である船野型細石核を出土したことで著名な船野遺跡、縄文時代早期の集石遺構や土坑が検出された隠山遺跡、飛鳥文の線刻絵画をもつ弥生後期の壺が表採された下那珂遺跡、線刻壁画を有する古墳時代の土器田横穴墓群などがある。また、当県内で検出例が少ない古代の生産遺跡である下村古窯群の存在はその中でも特筆されるものである。この遺跡は、内城跡が位置する台地の東側に対峙する丘陵裾部に位置し、奈良時代の終わりから平安時代の中頃までの須恵器や瓦を生産していたことが確認されており、県北延岡市の葎田窯跡などとともに古代の日向を知る上で重要な役割を果たしている。

次に、今回の調査対象となった内城跡を含む佐土原町の中世の城館跡について概観する。

当県が平成5年度から実施した中近世城館跡緊急分布調査では、同町内で13箇所の城館跡が確認されている。なかでも、内城跡の北側に隣接する丘陵に位置する佐土原城跡は、国の指定史跡である都とのこぼ郡城跡（西都市）と並んで伊東氏の版図拡大の拠点となったことで知られている。残存状況も良く踏査により城郭遺構をつぶさに確認できる代表的な中世城郭である。佐土原城の築城時期は詳らかでないが、その原型となるものは伊東氏の日向向後に徐々に整ったと考えられ、室町期に入ると文献にもその名を散見することができるようになる。以降、永禄11年頃のものと考えられる「分國中城主揃事」に見られる最大版図の時期を頂点に、天正5年のいわゆる「伊東崩れ」で一族が豊後落ちするまで、この城は伊東氏の日向支配の拠点としての役割を果たした。その後、佐土原は一時期徳川氏領となったこともあったが一貫して佐土原島津氏が知行し近世の佐土原を築いた。佐土原城は、寛永2年に島津忠興が居城を山下の低地に移したことにより、中世城郭が近世城郭へと推移する過程形態を知る上でも貴重であるとともに、寺院や町割りを巧みに配する近世城下町の形成過程を知る上でも興味深いものがある。

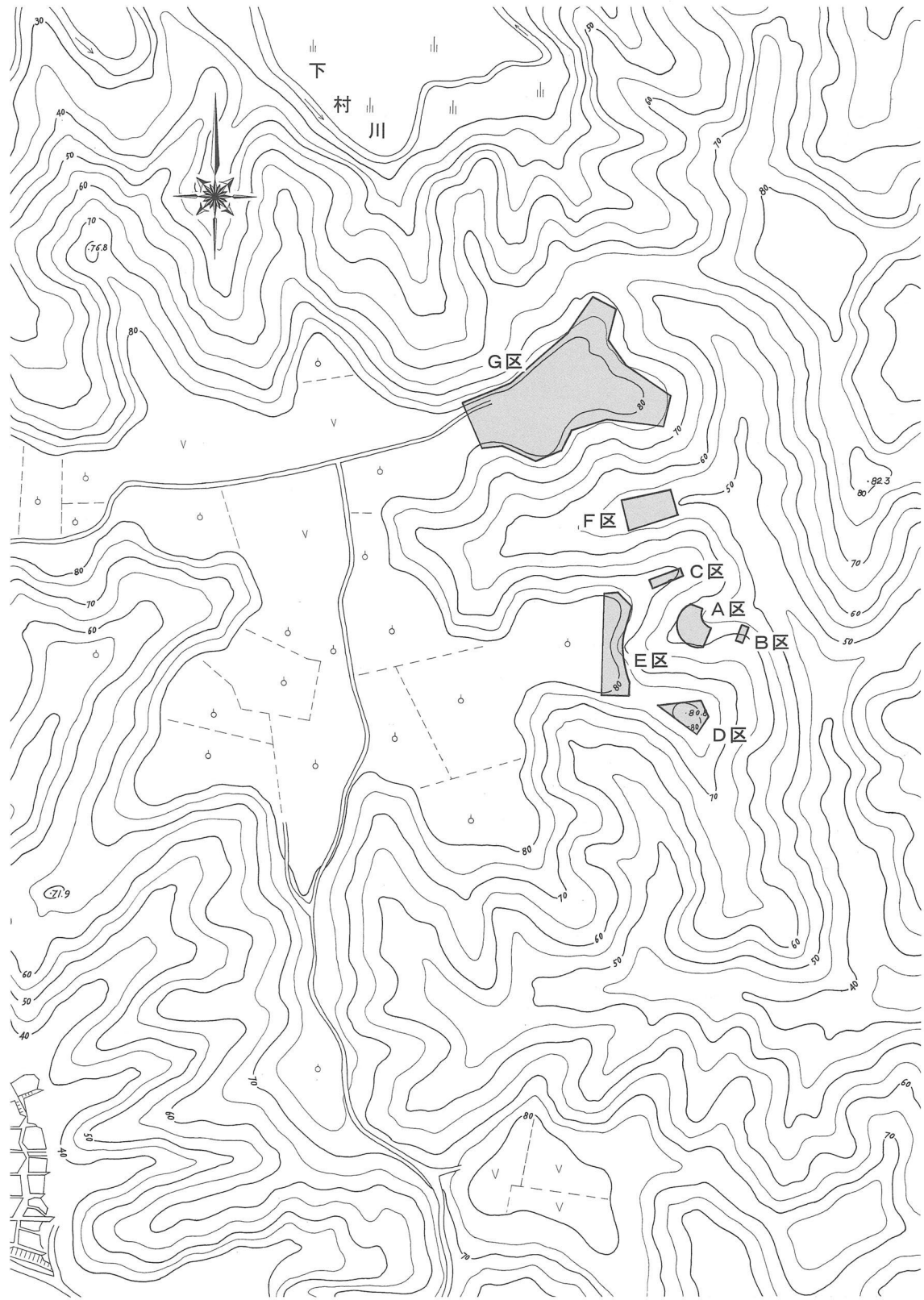
その他の主な中世城館跡としては、伊東氏の48壘（城）に数えられた那珂城があるが、現在その呼称をもつ城跡は存在しない。しかし、下那珂地区の鳥越に残る諏訪城跡には、独立丘陵を分断する大規模な空堀や「馬場」などの字名が残っておりその城跡に比定されている。同様に内城跡も、佐土原城を中核としてそれを取り巻くように点在する城郭の一つであるが、文献等にその名があらわれず遺構からその性格を推察することができるのみである。

参考文献 『佐土原町遺跡詳細分布調査報告書』佐土原町文化財調査報告書第5集 佐土原町教育委員会（1991）
『宮崎県史』通史編 中世 県史刊行会（1998）
『宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書Ⅰ・Ⅱ』 宮崎県教育委員会（1998）



- | | | | | |
|---------|--------------|----------|-----------|----------|
| 1 仲間原遺跡 | 2 野久尾遺跡 | 3 佐土原城跡 | 4 佛日山大光寺 | 5 佐野原遺跡 |
| 6 南学原城跡 | 7 内城跡 | 8 下村古窯群跡 | 9 日照山平等寺跡 | 10 上鳥巢遺跡 |
| 11 森園遺跡 | 12 内田城跡 (仮称) | 13 年居原遺跡 | 14 上講中遺跡 | 15 中島遺跡 |

第1図 内城跡の位置と周辺の遺跡 (S = 1 / 2,500)



第2図 内城跡周辺地形図 (S = 1 / 4, 000)

第Ⅱ章 調査の概要

第1節 調査の経過

遺跡は標高約85mの台地縁辺部に南北方向に広がっていた。調査着手の段階では大半が杉林と畑であったが、土取りのために包含層が部分的に失われている所もあった。そこで本調査では、現況の地形と踏査の結果に基づきA～G区の7調査区を設定し、A区から順次調査を進めた（第2図）。調査に際しては、表土除去作業後に10mグリッドを設定し、アルファベットと整数で杭の名称を表示した。

平成10年11月4日、現地での調査に着手。遺跡の現況を把握するために、まず最初に内城跡全体の遺構の残存状況とその広がりを確認するために全域の踏査を行った。その結果、一定の面積を有するD・E・G区は中世の土師器等の遺物が表面採集により確認されることから、曲輪の機能を有した可能性が高いと判断した。また、A・B・C・F区は谷や尾根の鞍部ではあるが、城郭全体としての機能配分を考えると堀切や柵列等が存在する可能性を指摘できることから調査区として設定するに至った。

A、B区の調査に着手。A区はD区とE区間の谷部であり、重機で表土を除去するとごく浅いレベルで礫層を確認する。トレンチを設定し堆積状況等を確認したが遺物包含層は存在せず上の台地に位置するD区およびE区からのものと思われる土師器の細片を数点確認できた。並行して調査を実施した尾根に位置するB区からは遺物等は出土しなかった。

D区の調査着手前に倒木の除去と斜面の雑木の伐採を行い曲輪の形状が明瞭になる。その後、D区の一面を覆っていた羊歯を除去すると鬼界アカホヤ火山灰の堆積層は確認できず、その下層の褐色土が面的な広がりを見せ、縄文時代早期の集石遺構が顔をのぞかせていた。調査の結果、中世の遺物は大半が羊歯の根に飲み込まれ原位置を保っていた遺物は少なかった。しかし、縄文時代早期の文化層で集石遺構5基を検出するとともに、土器片、石器類を約110点ほど確認することができた。その後、D区とE区間の痩せ尾根にトレンチを設定し堀切の有無を確認したが、段丘礫層をごく浅いレベルで検出し遺構は存在しなかった。

E区の調査はD区と並行して実施していたが、D区の調査が終了した1月中旬から本格的に掘り下げを始めた。同区の約3分の2は畑として利用されていたため遺物包含層への影響が懸念されたが、縄文時代早期の遺物包含層まではそれほど影響が及んでいなかった。調査の対象は縄文時代早期が中心になったが、北側の緩斜面で黒色土器や甕を伴う古代の竪穴住居跡1基が一部消失した形で検出されたことが特筆できる。また並行して、E区から北東方向に向かって延びる尾根が、やや緩斜面となる区域をC区として堀切の有無を確認したが、表土を除去するとすぐに段丘礫層となり遺構の検出には至らなかった。平成10年度の調査は3月29日まで行いE区の調査をほぼ終了した。

平成11年度は4月6日から調査を再開した。調査区の最も西に位置し最大面積を有するG区とその下の谷底に位置するF区が調査対象区となった。

F区はE区とG区間にある開析谷の谷底に当たり、主郭部を東西に横断する空堀の東側開放部の下に位置する（第2図）。一定の面積を有し、傾斜も極めて緩い場所であったが、表土を剥ぐと湧水がひどく、トレンチを入れても壁面がすぐに崩れ落ちる状態であったため、土層等を確認し調査を終了した。

G区では地表面観察の段階で虎口や腰曲輪を確認していたので、まず曲輪1に取り付く4つの曲輪か

ら調査に着手し個々に遺構の検出を進めた。柵列跡や建物跡は検出できなかったが、曲輪1へ連絡するためのV字に掘り込まれた虎口や曲輪間に設けられた2つの堀切を検出するとともにそれぞれの埋土中から遺物が出土した。

腰曲輪の調査終了後、最も広い曲輪1を東西2地区に分けて調査を開始する。

中世の遺構・遺物としては、埋土に陶器片や根石を伴うピットを含むピット群を検出したほか、北宋銭を中心とした72枚の銭貨が出土したことが特筆される。また、西側の調査区では曲輪拡張の際の普請と思われる造成面が確認されたほか、造成土中に古墳時代の銅芯銀貼の耳環が包含されていたことなどから、地形の改変を受ける以前に同時代の遺構が存在したことも考えられる。

縄文時代早期の遺構や遺物は、削平の対象とならず鬼界アカホヤ火山灰の残存状況が良好な調査区の縁辺部で集中して確認された。調査の結果、集石遺構3基、炉穴22基、土坑2基などが検出され、それらに伴い土器片や石器類が出土した。炉穴は切り合いが複雑であったが、炉部に人頭大の礫が詰め込まれた状況で検出されたものもあった。

平成11年11月2日、現地での調査を終了。

内城跡ではこれまでも旧石器時代の一定量の遺物が表面採集等で確認されている。今回の調査でも旧石器時代の遺物は後世の遺構の埋土中などから出土しているが、包含層は確認されず層位的に遺物を捉えることはできなかった。なお、旧石器時代の遺物については第Ⅲ章第5節で詳述しているので参照されたい。

第2節 基本層序

内城跡の基本層序を第3図に、調査区間の層序比較を第4図に示した。

第Ⅰ層から第Ⅲ層までは無遺物層である。本来ならば、中世および古代の遺物包含層が想定できる層位であるが、耕作による攪乱を受けそれらの包含層は失われている。第Ⅲ層はアカホヤ火山灰の二次堆積層であるが、D区では鬼界アカホヤ火山灰に起源をもつ堆積土は残存せず、確認することができたのはE区とG区のみである。しかし、G区の北東側の狭い範囲では一次堆積の鬼界アカホヤ火山灰の堆積層が残存し、その下層の第Ⅳ層（褐色土層）では縄文時代早期の遺構および遺物を確認することができた。この第Ⅳ層は各調査区とも比較的よく残り、縄文時代早期の遺物を良好な状態で包含していた。

第Ⅴ層は小林軽石の風成層である。10～40mm前後の小林軽石のブロックが散漫に混入する安定した堆積状況をみせる層であったが、遺物等の出土はなく文化層とは認められなかった。しかしながら、後述する旧石器時代の遺物等は、この層以下の堆積層を包含層とするものと考えられる。

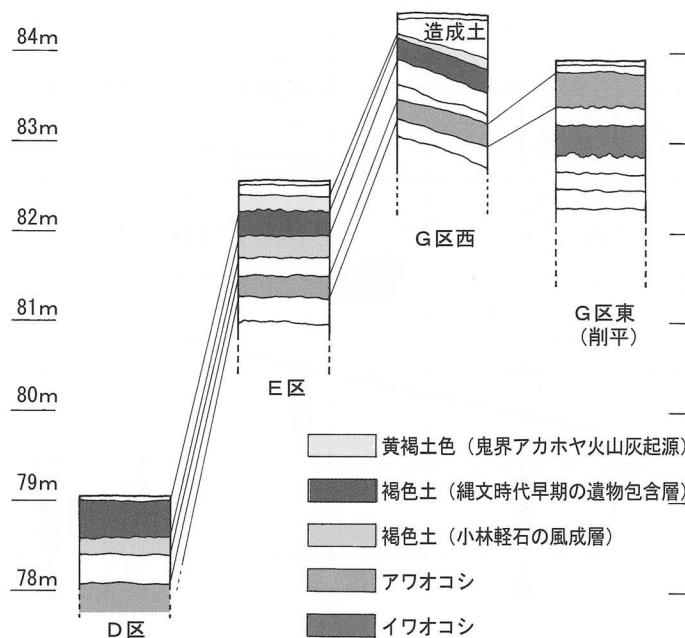
第Ⅵ層は始良T_n火山灰(AT)をわずかに含む層である。内城跡では、ATが確認できたのはG区のごく限られた範囲で明瞭な状態での堆積は確認できなかった。

第Ⅶ層のアワオコシと第Ⅸ層のイワオコシはG区に良好な状態で堆積していたが、同区の東半分は果樹園を作る際に削平を受けており表土直下でアワオコシが確認できる状態であった。

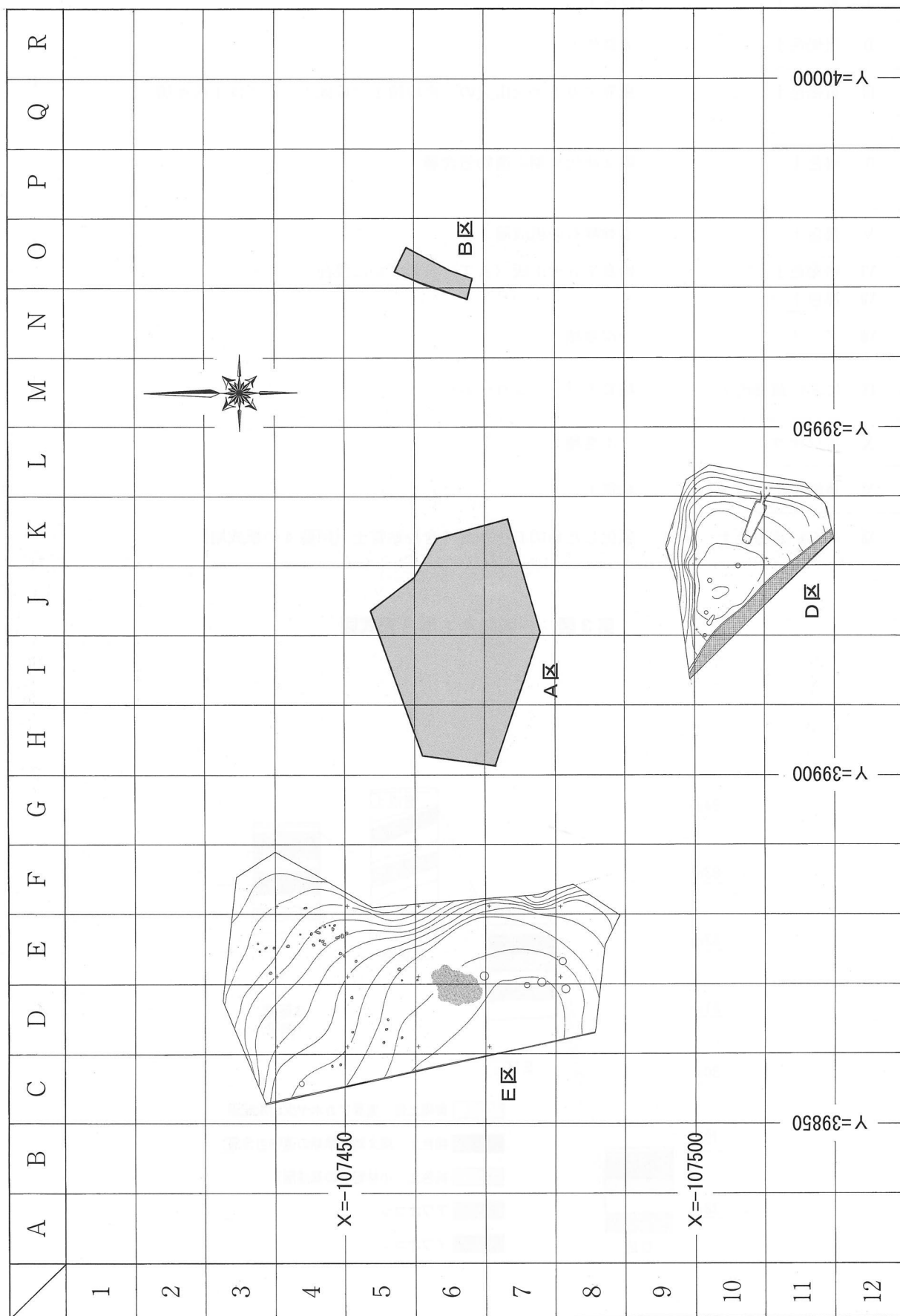
第ⅩⅠ層は阿蘇4火山灰に起因するにぶい黄橙色土である。風化した角閃石が多量に含まれていた。

I 表 土	耕作土
II 黒褐色土	旧耕作土
III 黄褐色土	鬼界アカホヤ火山灰の二次堆積土 (G区の一部では1次堆積)
IV 褐色土	縄文時代早期の遺物包含層
V 褐色土	小林軽石の風成層
VI 暗褐色土	始良Tn火山灰(AT)がわずかに混在
VII 黒色土	
VIII アワオコシ	一次堆積
IX にぶい黄褐色土	粘質土(オコシローム)
X イワオコシ	一次堆積
XI 黄褐色土	粘質土
XII にぶい黄橙色土	風化した角閃石を多量に含む粘質土(阿蘇4の風成層)

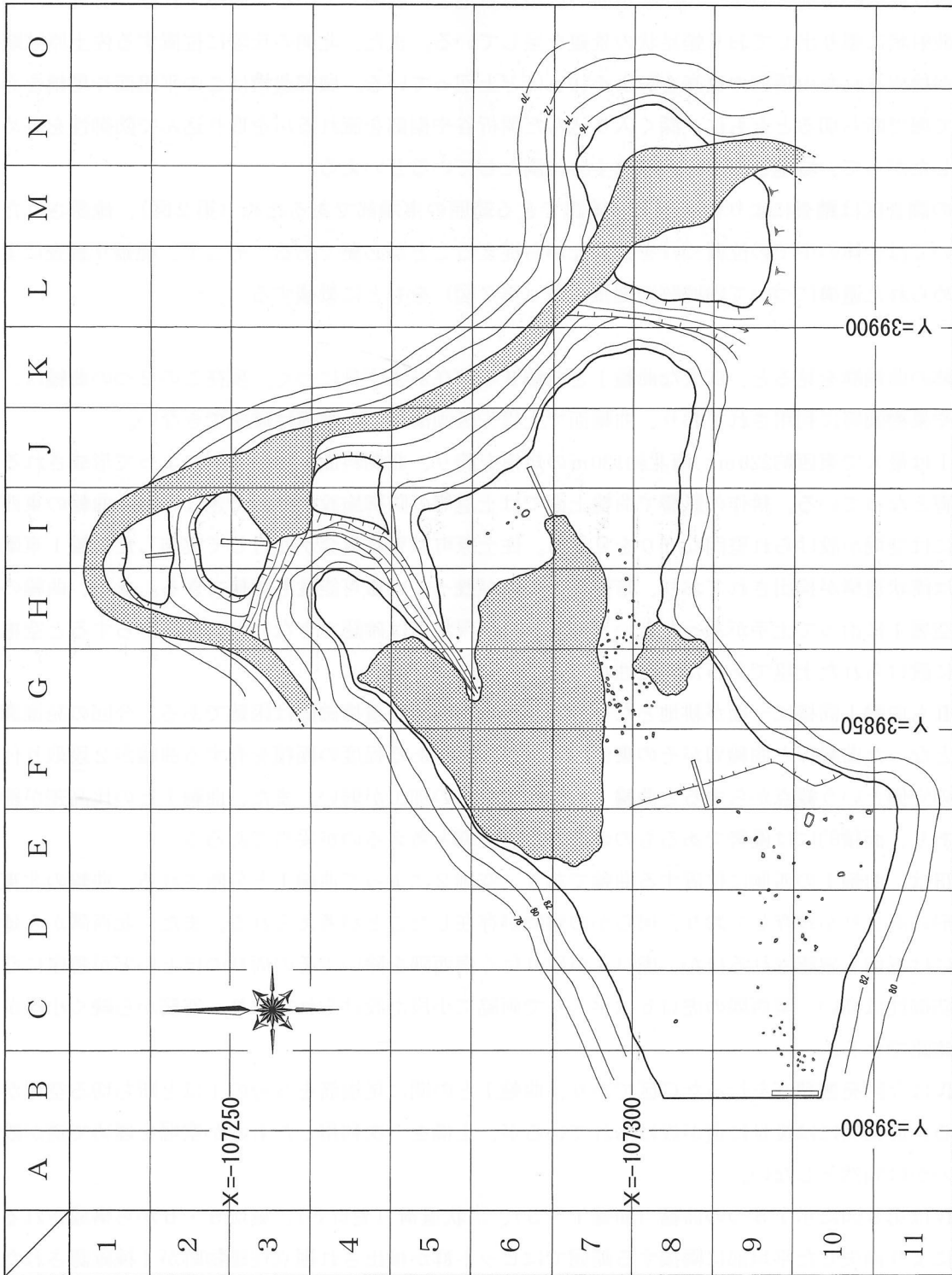
第3図 内城跡基本層序模式図



第4図 内城跡におけるD・E・G区の層序比較 (S=1/50)



第5図 内城跡A・B・D・E区のグリッド配置図 (S=1/800)



第6図 内城跡G区グリッド配置図 (S=1/800)

第三章 調査の記録

第1節 中世の遺構と遺物

1 内城跡の縄張り

内城跡は標高85m前後の緩やかな平坦面が広がる台地上に展開している。俯瞰すれば、台地上からは尾根が放射状に張り出しており蛸足状の景観を呈している。また、北側の丘陵に位置する佐土原城跡の天守台が検出された山頂部の標高をおよそ10mほど上回っている。城郭遺構はこの平坦面や尾根を必要に応じて堀で断ち切るとともに、深く入り込んだ開析谷や裾部を流れる川を取り込んで防御性を高めている。したがって、城地としての条件は十分に満たしているといえる。

今回の調査区は踏査により城郭遺構が確認できる範囲の東端部であるため（第2図）、確認された遺構については全体の中での位置づけを図りながら捉えることが必要である。そこで、縄張り調査によって確かめられた遺構について内城跡の縄張り図（第7図）をもとに概観する。

・曲輪

内城跡の曲輪群を見ると、広大な曲輪Ⅰと曲輪Ⅱの存在がまず目につく。現在この2つの曲輪は、一面が畑や果樹園等に利用されており、曲輪面で土塁や区画溝などの遺構は確認できない。

曲輪Ⅰは最大で東西約220m、南北約130mの規模を誇り、北側斜面は急崖と川によって形成される自然の要害となっている。耕作の影響で曲輪上面では土塁等の防御施設は確認できないが、曲輪の東西及び南側には空堀が設けられ堅固な守りを見せる。佐土原町教育委員会が並行して実施した曲輪Ⅰ東端の調査では溝状遺構が検出されており、暗渠等の遺構が残っている可能性も指摘できる。また、曲輪の南端には空堀Ⅰに沿って土手があったという話があり、現状では確認できないが、配置からすると空堀Ⅰの上端に設けられた土塁であった可能性が残る。

曲輪Ⅱも曲輪Ⅰ同様に一面が耕地となっており曲輪上面での遺構確認は困難である。今回の発掘調査の対象となった曲輪Ⅳと曲輪Ⅶがその東側に、南東部にもある程度の面積を有する曲輪が2段取り付くが、城の守備という観点からすると曲輪Ⅰに比べて端部の加工が弱い。また、曲輪Ⅰとの比高差が約3mほどあり、面積的には優勢であるものの曲輪Ⅰを主郭と考えるのが妥当であろう。

曲輪Ⅲは、曲輪Ⅰの西側に位置する曲輪であり、空堀Ⅱによって曲輪Ⅰと分断される。曲輪の北東隅角に方形の高まりが残存しており、何らかの建物が存在したことが考えられる。また、北西隅から延びる尾根には堀切も確認されるほか、虎口aが取り付く南西隅を除いてその周りのほとんどが急崖になっており防御性は高い。南西隅の虎口bは平入りで両脇に小段が設けられており、谷筋から続く小径が現状でも確認できる。

曲輪Ⅳは今回発掘調査を行ったG区であり、曲輪Ⅰとの間に尾根筋を3分の1ほど断ち切る空堀が確認できる。曲輪間には後世に道が設けられているが、土橋を二次利用したものか空堀を埋めて道が設けられたのかは判然としない。

曲輪Ⅳは第8図に示す5つの曲輪（曲輪1～5）、溝状遺構（虎口c）、堀切5・6から構成される。土取りにより消失した平坦部に隣接する範囲ではピット群が検出され掘立柱建物跡が1棟確認された。また、南西側では造成面も確認され、曲輪拡張に伴う痕跡と思われる。曲輪2は調査以前に地形の改変を受けており、本来は堀切5の東側端部を止めるか、もしくは堀の側壁となっていた可能性が残る。曲

輪3・4は急崖をなす内城跡の北側斜面の中で最も緩やかに裾部に向かって延びる場所であり、段構築の曲輪により防御性を高めようとする所作であると考えられる。

曲輪Vの一部が調査区のE区、曲輪VIはD区にあたる。E区、D区では掘立柱建物跡等の遺構は検出できなかったが、D区は谷筋を向うことができる最東端に位置することから櫓等の施設が存在した可能性が指摘できる。

曲輪Xと曲輪XIの間は、現在は道路が設けられているが、本来は自然の要害である谷によって隔てられていたようである。曲輪Xの上から2段目までは現状では果樹園となっているが、さらにその下の段まで周囲を帯曲輪状の遺構が巡る。また、南側には虎口らしき遺構があり、部分的に崩落し判然としないうが、縄張り図中では虎口として表現してある。曲輪XIは現状では畑となっており一面が耕作されている。屋敷があり人が住んでいたという話があり、19世紀後半の近世陶磁器等も表面採集できる。曲輪上面の遺構は確認できないが、北東端部に取り付いた曲輪と谷を挟んで北側に位置する曲輪VIIIが対峙する位置関係となり谷筋に対する守りを固めている。

・空堀・堀切

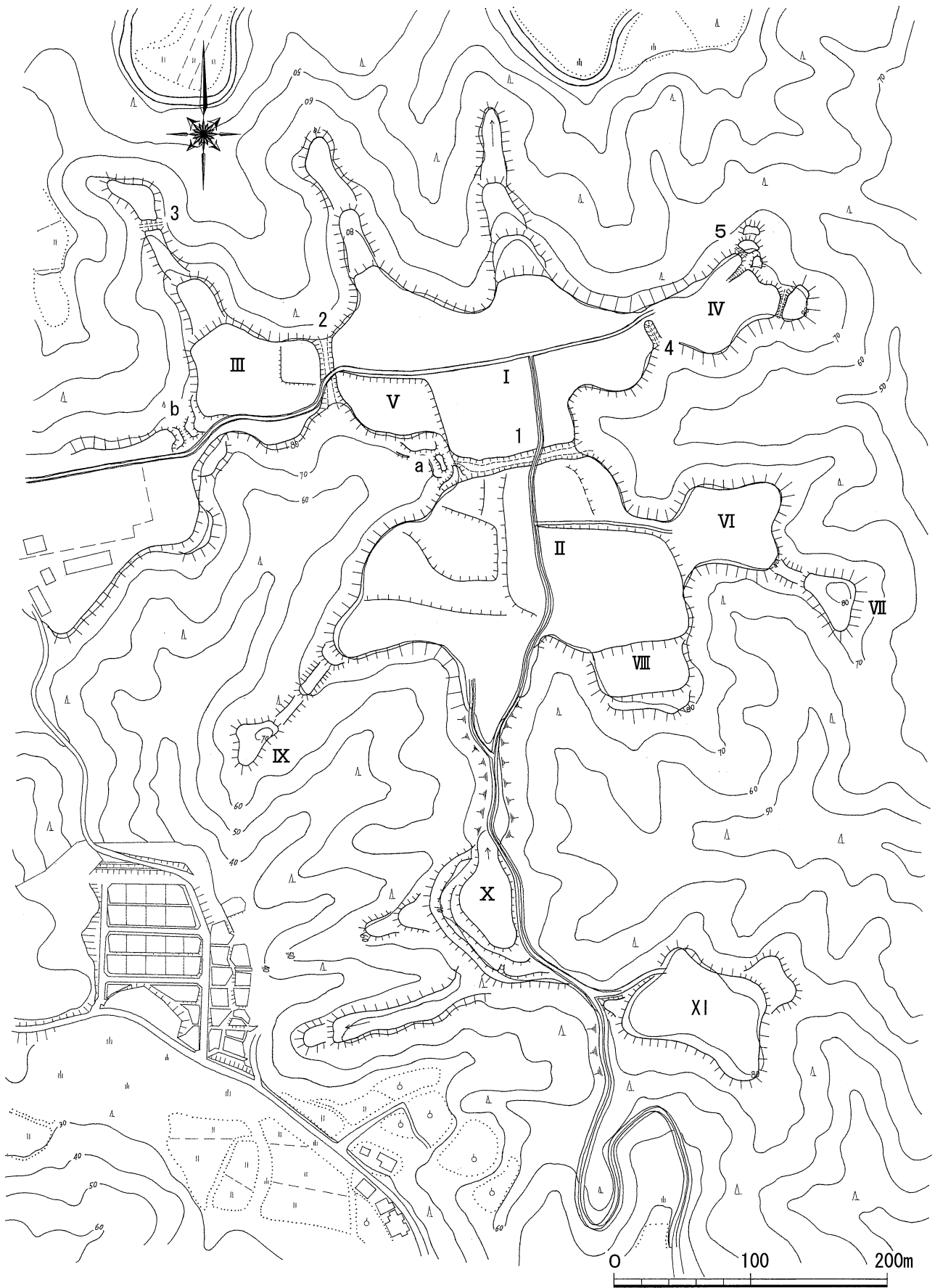
内城跡では踏査と発掘調査の結果、6条の空堀・堀切が確認できた。特に主郭である曲輪Iを隣接する3つの曲輪から分断させるために設けられた空堀1は規模が大きい。

空堀1は長さ約85mで箱堀の形状を呈する。曲輪Iと曲輪IIの上端間が約10～14m、深さが堀底から曲輪Iの上端まで約4～9mを計る。曲輪Iと曲輪IIを明確に二分するとともに、堀底は曲輪へと連絡する主要な堀底道として機能していたと考えられる。

また、堀が谷へと開放する西端部には虎口aがあり谷筋から堀底への進入を妨げており、堀の開放部に設けられた土塁と曲輪II側の隅角からの張り出し部により屈曲した経路を生み出している。同様に曲輪I南西隅の一段下がる曲輪Vへの進入経路も、土塁と曲輪Vに取り付く下段の腰曲輪によって狭隘なものとなっている。反対側の東端部には顕著な加工は認められずF区を設定した谷へと開放する。しかし、曲輪IVから土取りされた土で空堀の4分の1程度が埋め戻され耕地化されてしまい全体像を見ることができなくなってしまったことは残念である。

空堀2は曲輪I・Vと曲輪IIIの間に設けられており、曲輪Iの西端に位置する。地表面観察では空堀1と同じ形状の箱堀で、長さ約50mを計る。幅約7m、堀底からの最大比高差約8mで両側の谷に向かって開放し、北側の谷底からはその位置を確認できるほど明瞭である。堀切4は曲輪Iの東端に位置し、曲輪IVとの間に設けられている。現状では南半分のみ確認でき、本来の規模がどの程度であったかは不明である。堀の形状は地表面観察では箱堀状であるが、倒木があったり、竹が密集して生えていたりして判然としないう。端部の様子を観察したところでは、薬研堀の形状にも見えるが、ここでは断定することは避けたい。

堀切3は曲輪IIIから北西に向かって延びる尾根を断ち切る。城郭を構成する遺構はこの尾根より西側では確認できないことから、虎口bとこの堀切を結ぶ線が最西端の防御ラインとして設定できる。その他、曲輪IVで発掘により確認された虎口cと堀切5、堀切6については次項で詳述する。



第7図 内城跡縄張り図 (S = 1/4,000)



第8図 内城跡曲輪IV (G区) 遺構配置図 (S = 1 / 400)

2 遺 構

(1) 溝状遺構

・ 1号溝状遺構（第9図、SE1）

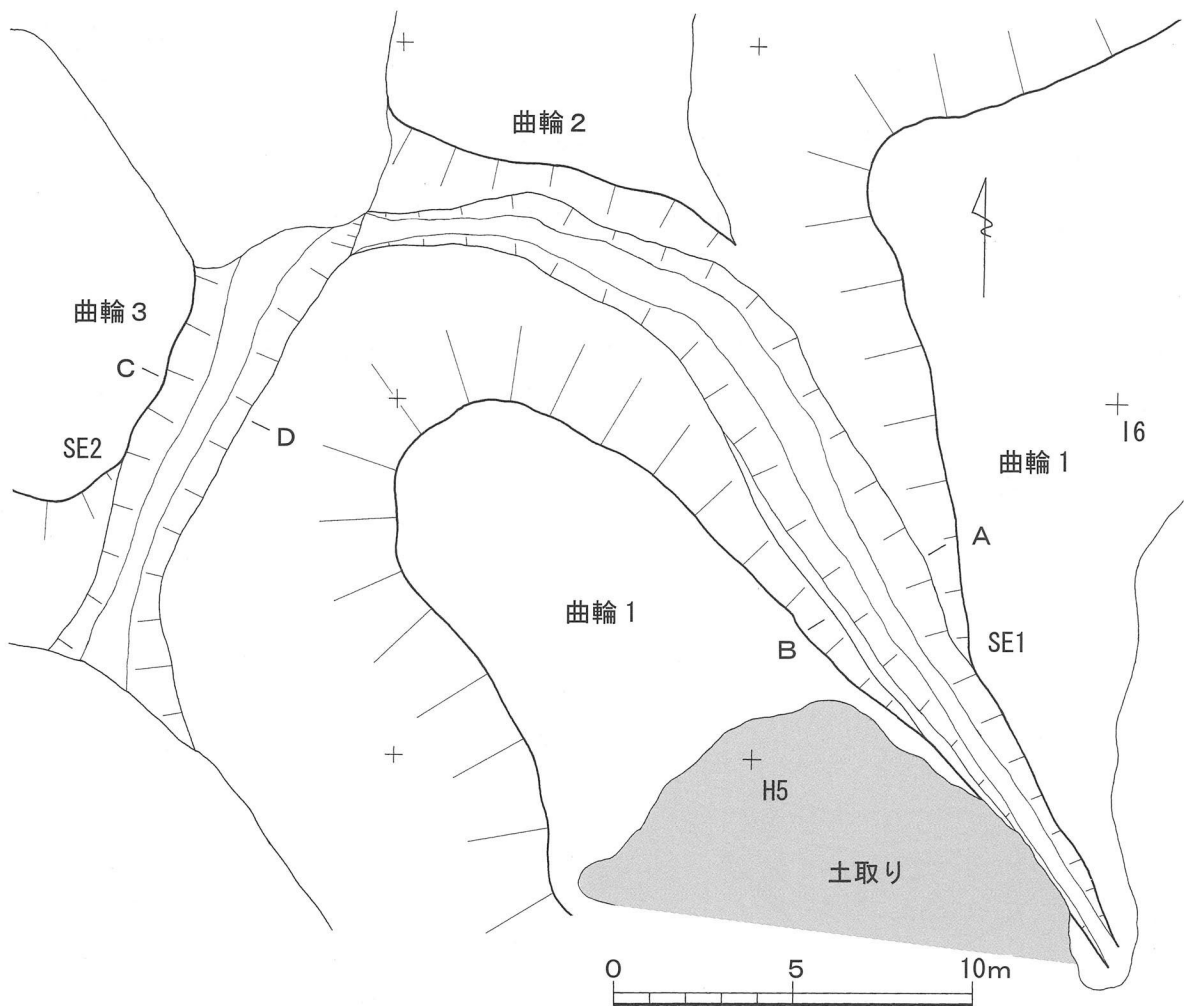
G区の曲輪1（第8図）北端で検出された。2号溝状遺構（SE2、堀切5）から曲輪2の横を通り曲輪1への経路に当たる。断面は菓研状を呈し、曲輪1の上面に近づくにつれて上端間の幅が狭くなる。西側面の一部には小段が設けられ、底部では硬化面を確認できた。虎口を構成する遺構と考えられる。

・ 2号溝状遺構（第9図、SE2）

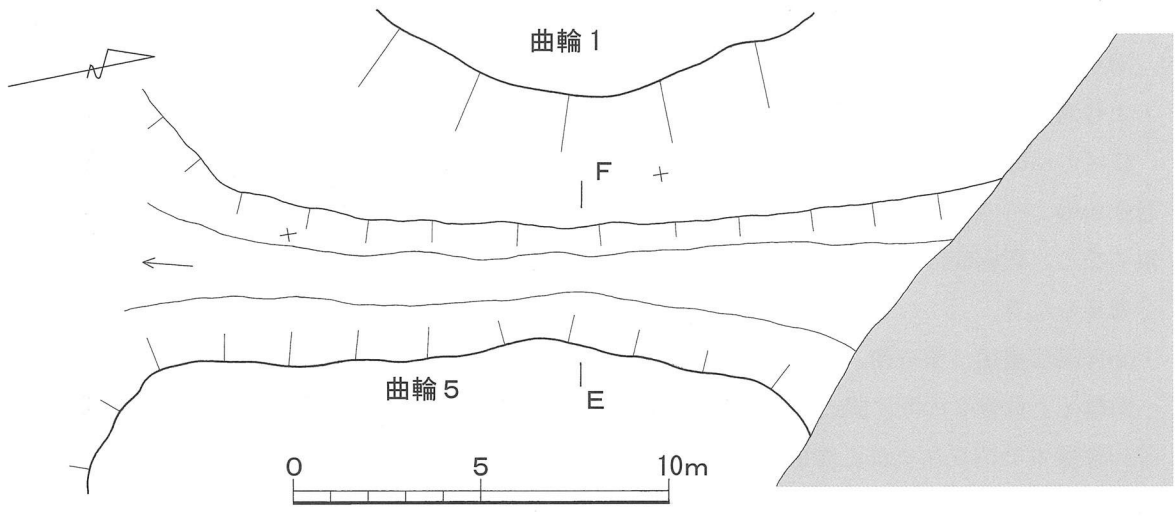
曲輪1と曲輪3の間に設けられた堀切で箱堀の形状を呈する。縄張り図中の堀切5に相当する。段丘礫層まで掘り込まれ、堀底と曲輪1の上端との比高差は約6.9mを計る。埋土の第17層の上面に硬化面が形成されており、その時点では堀底道として機能していたものと考えられる。

・ 3号溝状遺構（第10図、SE3）

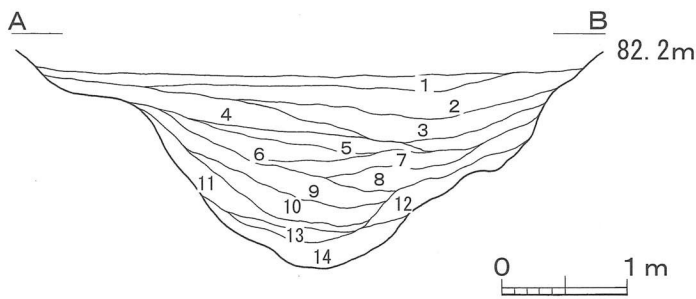
曲輪1と曲輪5の間に設けられた堀切で形状は曖昧な菓研堀を呈する。堀底と曲輪1の上端との比高差は約6.5mを計る。埋土の土層断面の観察結果、硬化面は確認されず通路として機能していた可能性は低く、南北に走るこの堀切はこの尾根を完全に断ち切っていたものと考えられる。



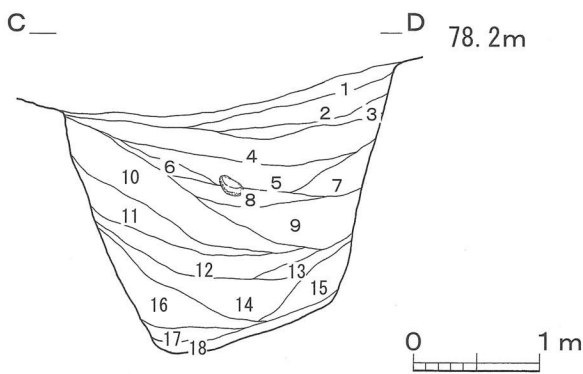
第9図 G区1号、2号溝状遺構実測図（S = 1 / 200）



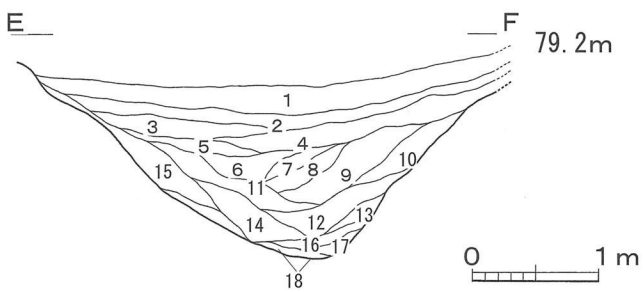
第10図 G区3号溝状遺構実測図 (S = 1/200)



- | | | |
|----|---------|----------------------|
| 1 | 黒褐色土 | 表土 (植物腐敗土) |
| 2 | 灰黄褐色土 | ガラス成分を多く含む。 |
| 3 | 灰黄褐色土 | 明赤褐色の10mm前後のブロックを含む。 |
| 4 | にぶい黄褐色土 | 明褐色のしまりのないブロックを含む。 |
| 5 | 黒褐色土 | 4と同じブロックをごくわずかに含む。 |
| 6 | にぶい褐色土 | 混濁層。炭化物を含む。 |
| 7 | 褐色土 | 黄褐色の砂質土が混入する。 |
| 8 | にぶい黄褐色土 | 明褐色の小ブロックを40%ほど含む。 |
| 9 | 暗褐色土 | 炭化物を少量含む。粗砂。 |
| 10 | 暗褐色土 | 小礫と黄褐色の粘性ブロックを含む。 |
| 11 | 暗褐色土 | 炭化物を多く含む。 |
| 12 | にぶい黄褐色土 | ややしまりがなく、ガラス成分を含む。 |
| 13 | 灰黄褐色土 | 淡赤褐色土 (阿蘇4起源) が混濁する。 |
| 14 | 明赤褐色土 | 堅くしまっている。阿蘇4が混入する。 |



- | | | |
|----|---------|---------------------|
| 1 | にぶい黄褐色土 | 表土 (法面からの崩落土) |
| 2 | 黄褐色土 | ガラス成分を多く含む。 |
| 3 | 灰黄褐色土 | やや粘性がある。 |
| 4 | 暗褐色土 | 小礫をわずかに含む。粘性がある。 |
| 5 | 灰黄褐色土 | ガラス成分をわずかに含む。 |
| 6 | にぶい黄褐色土 | 小礫を多量に含む。崩落土。 |
| 7 | 灰黄褐色土 | 明赤褐色の粒子を含む。粗砂。 |
| 8 | にぶい黄色土 | 30mm前後の黄褐色のブロックを含む。 |
| 9 | 褐色土 | 黒褐色ブロック (小林軽石) を含む。 |
| 10 | 褐色土 | 10と同じブロックを散漫に含む。 |
| 11 | 褐色土 | 10と同じブロックを散漫に含む。 |
| 12 | にぶい黄褐色土 | 10と同じブロックをごくわずかに含む。 |
| 13 | にぶい黄褐色土 | 13と近似するが、土色がやや明るい。 |
| 14 | 暗褐色土 | 黒褐色ブロックを散漫に含む。 |
| 15 | 褐色土 | 崩落によると思われる礫を多く含む。 |
| 16 | にぶい褐色土 | アカホヤのブロックを少量含む。 |
| 17 | にぶい黄褐色土 | 16と近似するがややしまりが強い。 |
| 18 | にぶい橙色土 | 阿蘇4起源。しまりが強い。 |



- | | | |
|----|---------|--------------------|
| 1 | 褐色土 | 表土1 (しまりが弱い。粗砂。) |
| 2 | にぶい黄褐色土 | 表土2 (1よりやや濁りが強い。) |
| 3 | 暗褐色土 | ややしまりが強い。粗砂。 |
| 4 | 暗褐色土 | 3よりやや明るい。土師皿片が混入。 |
| 5 | 灰黄褐色土 | ガラス成分を含み、ややしまりが強い。 |
| 6 | 褐色土 | 白色鉱物粒をわずかに含む。 |
| 7 | 褐色土 | A T下の黒色土ブロックを含む。 |
| 8 | 褐色土 | アワオコシのブロックを含む。粘質土。 |
| 9 | 褐色土 | アワオコシのブロックをわずかに含む。 |
| 10 | 褐色土 | 黄褐色のブロックをわずかに含む。 |
| 11 | にぶい黄褐色土 | 10と同じブロックを含む。 |
| 12 | にぶい黄褐色土 | 粘質土で、しまっている。 |
| 13 | 暗褐色土 | 小礫をわずかに含む。 |
| 14 | 暗褐色土 | しまりが強い。砂質の細砂粒を含む。 |
| 15 | 褐色土 | しまりがやや弱い。 |
| 16 | にぶい黄褐色土 | 赤褐色土のブロックを含む。 |
| 17 | 暗褐色土 | 赤褐色土のブロックをわずかに含む。 |
| 18 | 褐色土 | しまりが弱い。 |

第11図 G区1~3号溝状遺構埋土断面図 (S = 1/60)

1～3号溝状遺構の埋土中から出土した遺物を第12図に示した。

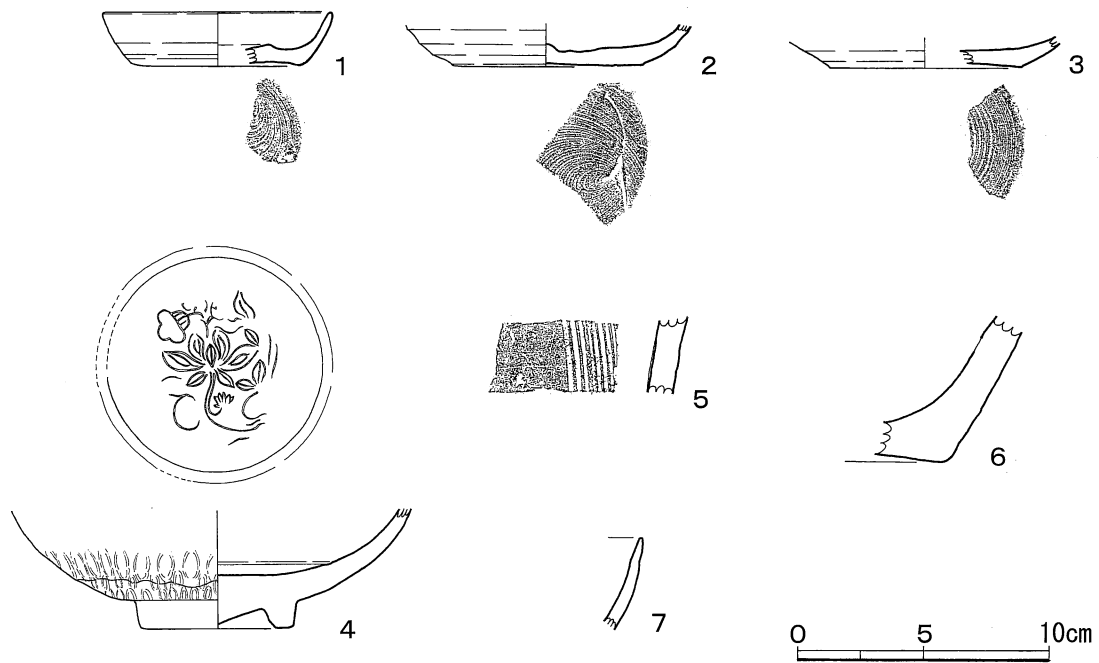
土師器（第12図 1～3）

1～3はSE2から出土した土師器の坏である。埋土中から出土した遺物は土師器の細片が大半を占める。1は小型の坏である。内外器面とも丁寧な回転ナデが施され、底部内面はドーナツ状に盛り上がる。2は体部に明瞭な稜をもつ。底部内面には回転ナデによる調整痕が残り、中心には乳頭状の突起が見られる。1・3は2と比べて稜がやや曖昧になっている。

陶磁器類（第12図 4～7）

4はSE3の埋土中から出土した白磁の碗である。見込みには草花文の印花が施され、その周りを1条の圈線がめぐる。体部の内面と外面の体部下位まで施釉しそれ以下が露胎となる。直立する削り出し高台をもち、体部外面の下位には削りによる器面の調整痕が見られる。

5・6・7はSE1から出土した。5・6は備前焼の陶器である。5は播鉢の胴部で、内面に1単位が8条以上の掻き目を施す。6は甕の底部で内外面に粗いハケ目調整が見られる。7は瀬戸美濃系の天目茶碗である。口縁部は口銹となる。

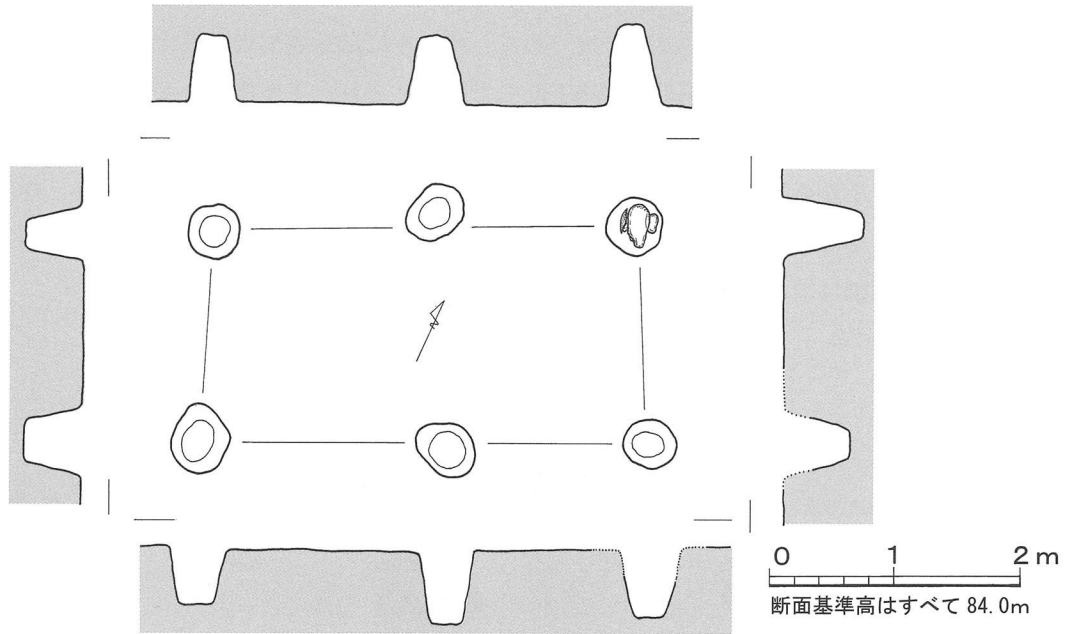


第12図 G区溝状遺構出土遺物実測図（S=1/3）

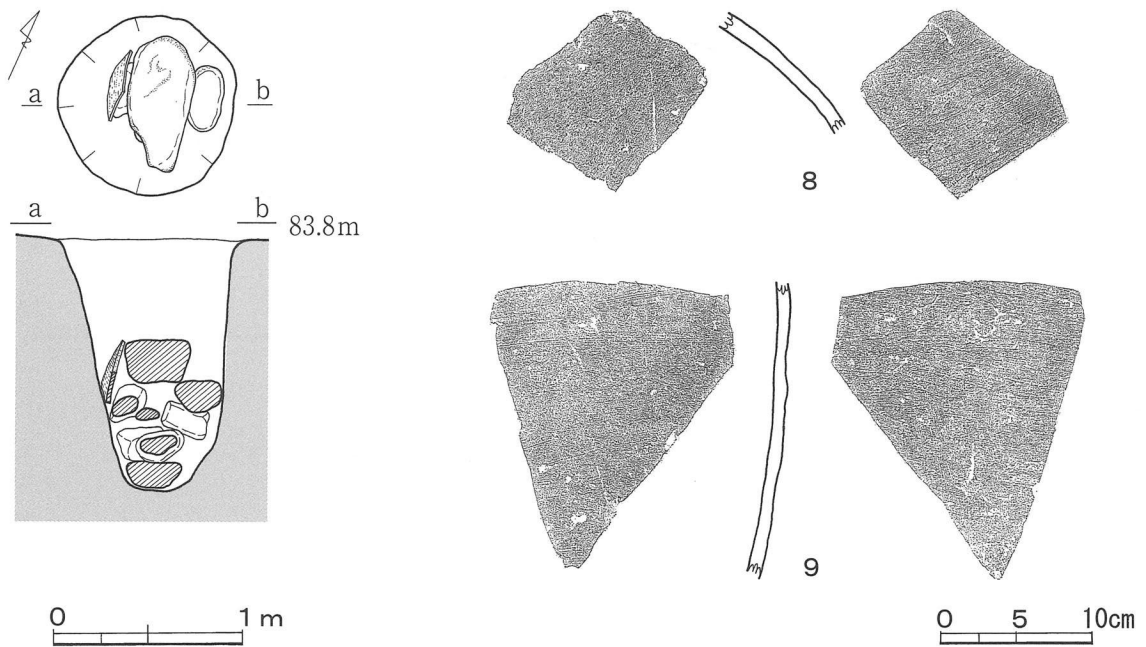
(2) 掘立柱建物跡 (第13図、SB1)

G区のG7・G8グリッド (第6図) で検出された1間×2間の掘立柱建物跡である。土取りにより遺構・遺物の包含層が失われており、北西側に延長していた可能性が残る。主軸をN-65°-Eにとり、桁行平均約3.51m、梁行平均約1.73m、平均柱間は約1.75mである。

同遺構の3号柱穴 (第14図) から根固め石とともに出土した遺物を第15図に示した。8と9は同一個体であり備前焼の瓶の胴部片である。



第13図 G区1号掘立柱建物跡実測図 (S=1/60)



第14図 3号柱穴実測図 (S=1/20)

第15図 3号柱穴出土遺物実測図 (S=1/5)

3 遺物

遺構に伴わない遺物を第16図から第20図に示した。

(1) 土師器坏 (第16、17図 10~28)

a 類 (第16図 10~15)

いずれも小型で口径が10cm以下である。体部・底部の調整および形態などから2類に分ける。

a 1 類 (10~13)

糸切り底をもち体部が直線的に立ち上がるが、口縁部がわずかに肥厚するもの。

a 2 類 (14・15)

糸切り底をもち体部が直線的に立ち上がるが、口縁部が肥厚しないもの。

b 類 (第16、17図 16~18)

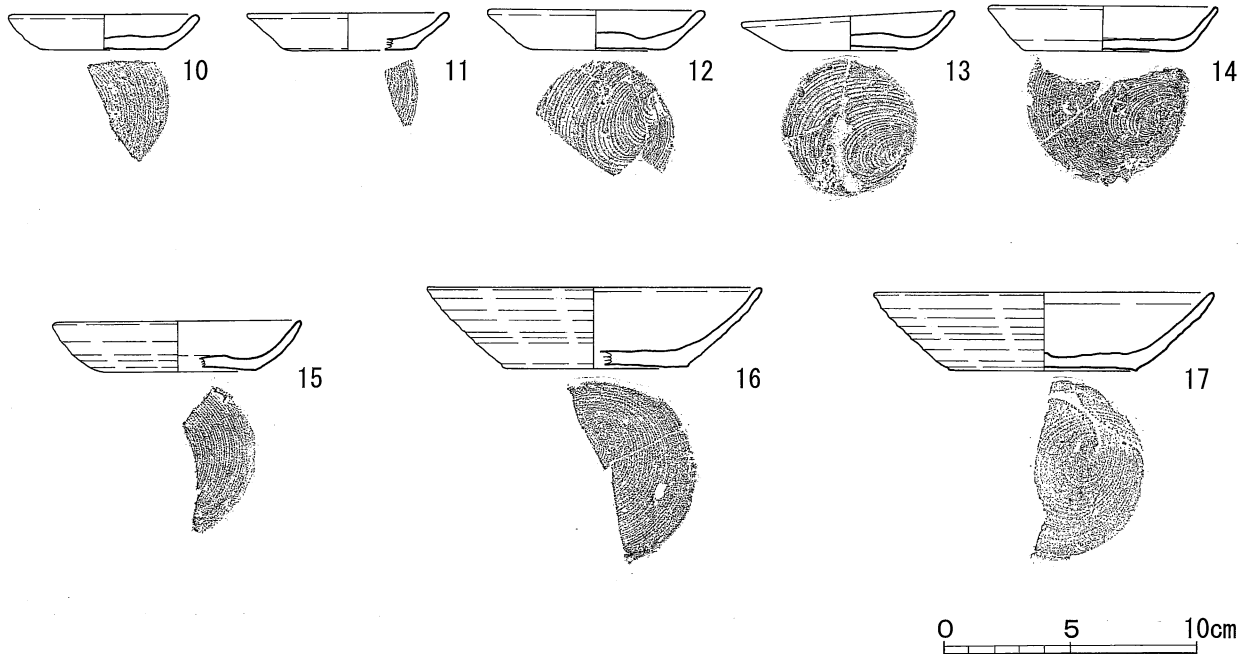
糸切り底をもち、体部にわずかにふくらみ明瞭な稜が見られるもの。

c 類 (第17図 19~21)

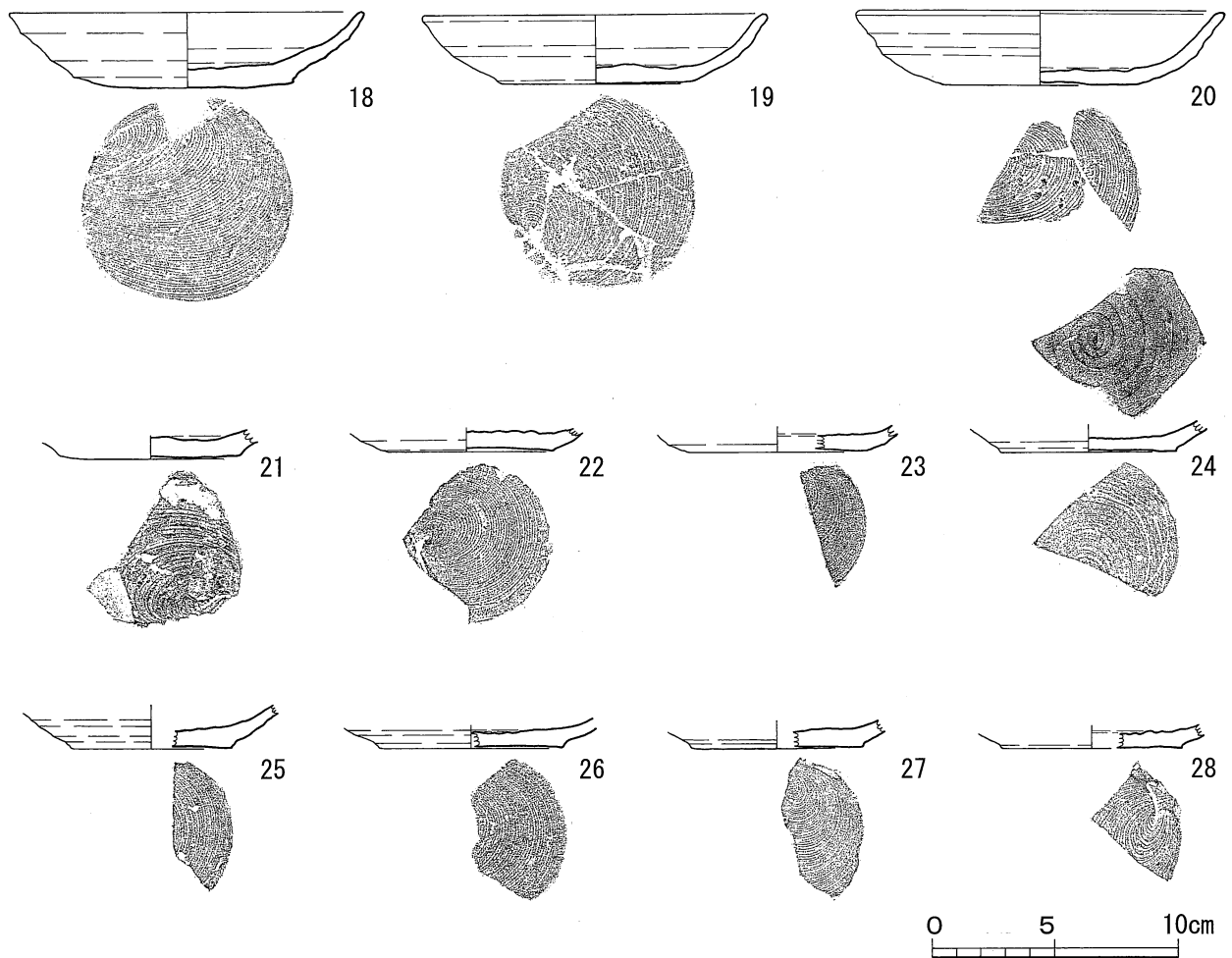
糸切り底で底部内面にくぼみをもつ。明瞭な稜をもたず、口径に対して器高が低い。21は底部のみであるが、底部内面にくぼみをもつ特徴からこの類に入れた。

d 類 (第17図 22~28)

糸切り底の底部片内面に回転ナデによる渦巻き状の調整痕をもつもの。



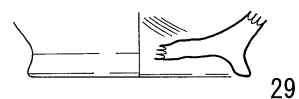
第16図 内城跡出土土師器実測図1 (S=1/3)



第17図 内城跡出土土師器実測図2 (S=1/3)

(2) 瓦器 (第18図 29)

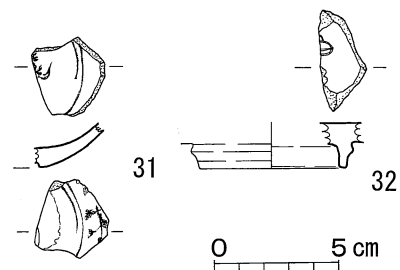
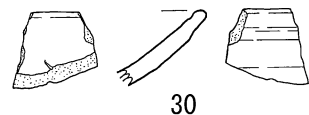
29は瓦器である。高台は外方に開き、その端部は内側からのナデもしくはケズリにより先端がにぶく尖る。見込み中央には指頭圧痕が見られる。



(3) 陶磁器 (第18図 30~32)

30・31・32はG区で表面採集された遺物である。

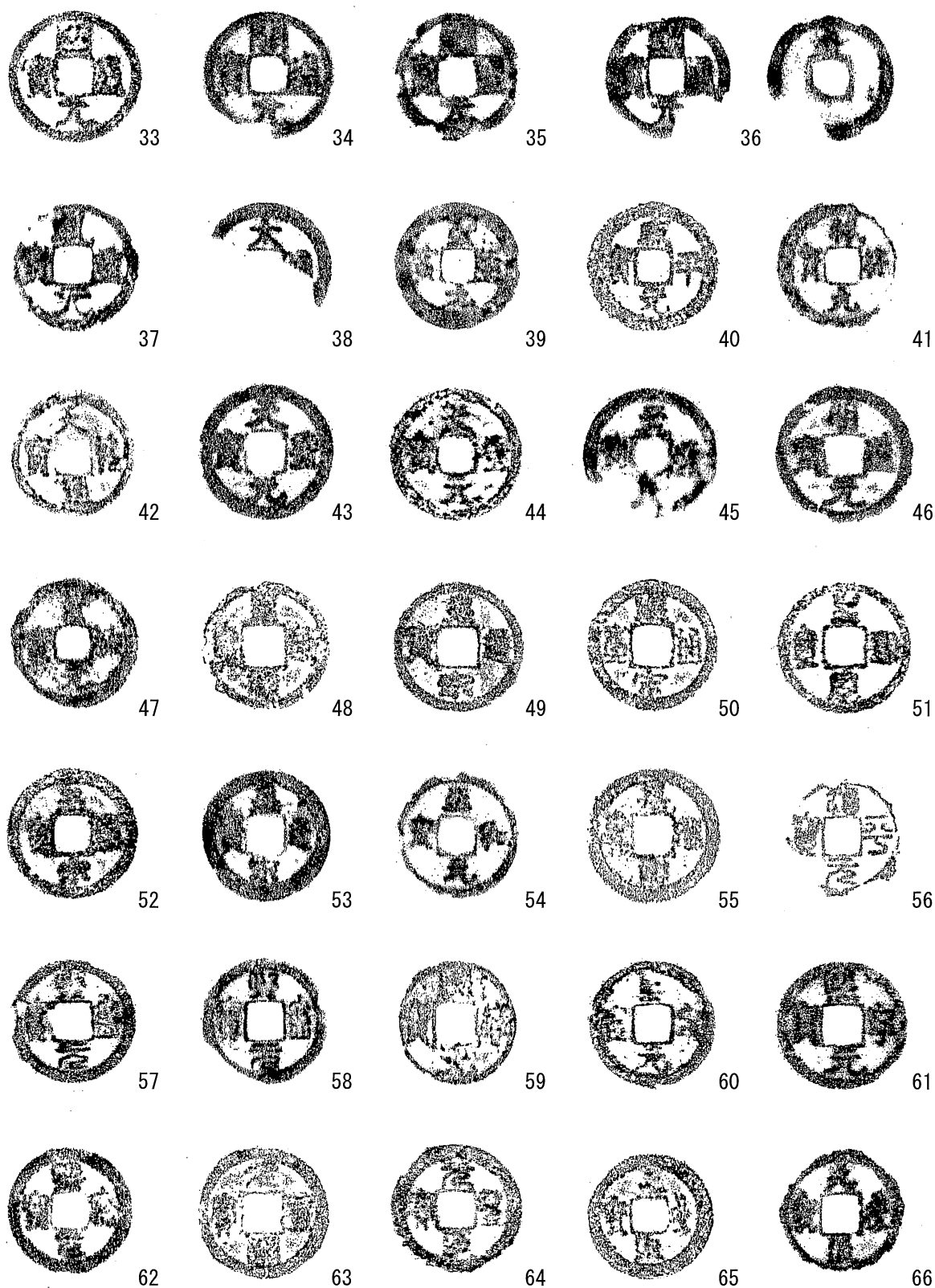
30は瀬戸系のおろし皿の口縁部である。内面に施釉と搔き目が確認できる。31は中国産青花である。見込みに圏線と文様の一部が確認できる。外面は底部近くまで施釉され基筒底となる。32は青磁の底部である。見込みに花卉もしくは植物の葉のような印花文が確認できるが判然としない。



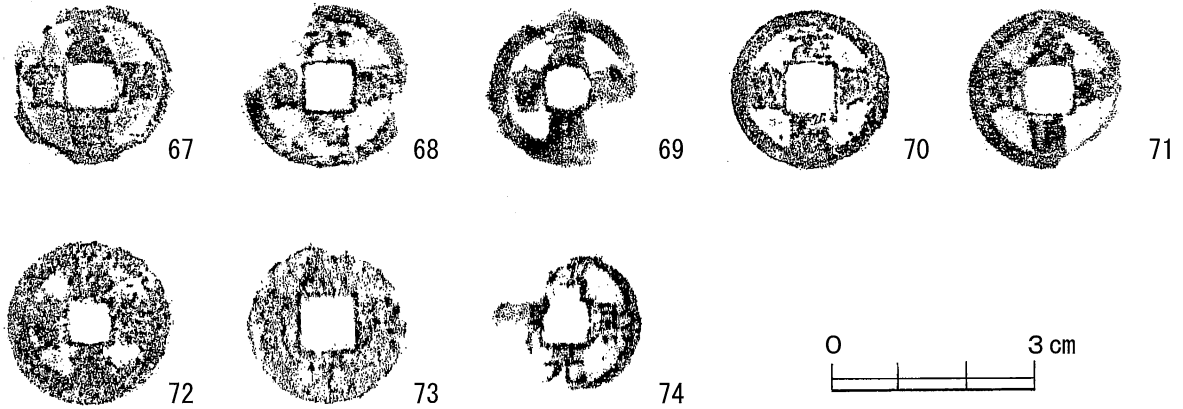
(4) 銭貨 (第19、20図 33~74)

銭貨はG区のI 5グリッドで遺構に伴わない状態で集中して出土した。出土銭貨総数は72枚である。

第18図 内城跡出土瓦器陶磁器実測図 (S=1/3)



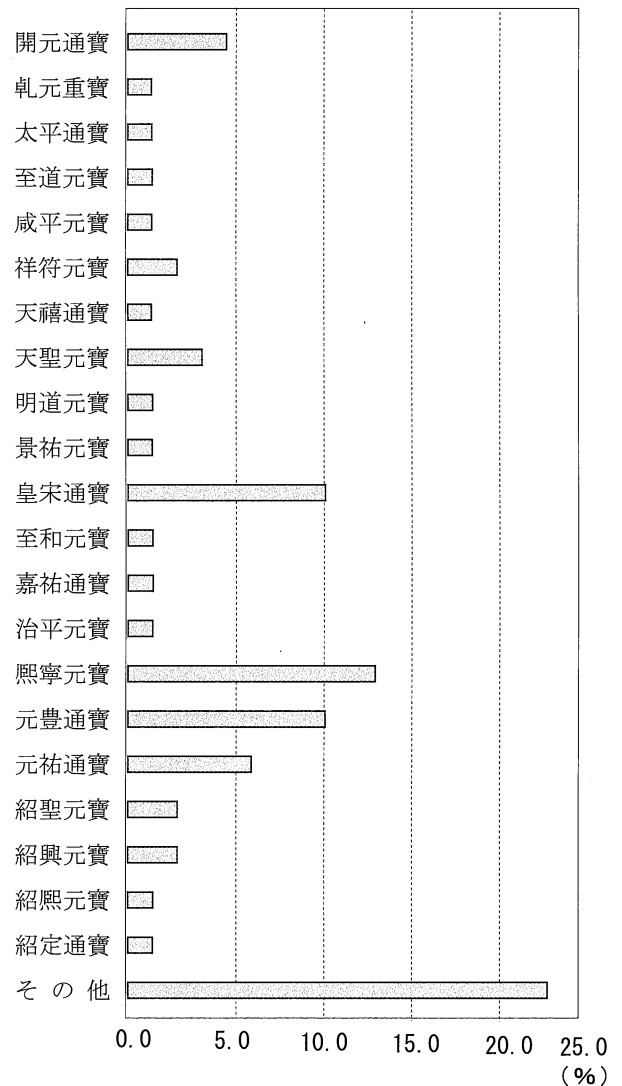
第19圖 G区出土錢貨拓影1 (S = 1 / 1)



第20図 G区出土銭貨拓影2 (S=1/1)

第1表 銭貨別出土枚数一覧表

遺物番号	銭貨名	王朝	初鑄年	出土枚数
33 ~ 35	開元通寶	唐	621	3
36	開元通寶	唐	845	1
37	軋元重寶	唐	758	1
38	太平通寶	北宋	976	1
39	至道元寶	北宋	995	1
40	咸平元寶	北宋	998	1
41	祥符元寶	北宋	1009	2
42	天禧通寶	北宋	1017	1
43 ~ 45	天聖元寶	北宋	1023	3
46	明道元寶	北宋	1032	1
47	景祐元寶	北宋	1034	1
48 ~ 53	皇宋通寶	北宋	1038	8
54	至和元寶	北宋	1054	1
55	嘉祐通寶	北宋	1056	1
56	治平元寶	北宋	1064	1
57 ~ 62	熙寧元寶	北宋	1068	10
63 ~ 66	元豐通寶	北宋	1078	8
67 ~ 71	元祐通寶	北宋	1086	5
72	紹聖元寶	北宋	1094	2
73	紹興元寶	南宋	1131	2
74	紹熙元寶	南宋	1190	1
—	紹定通寶	南宋	1228	1
	その他			17
その他	文字が確認できるが判読不能			2
	文字がないもの及び小片			14
合計				72



第21図 銭貨別出土枚数の比較

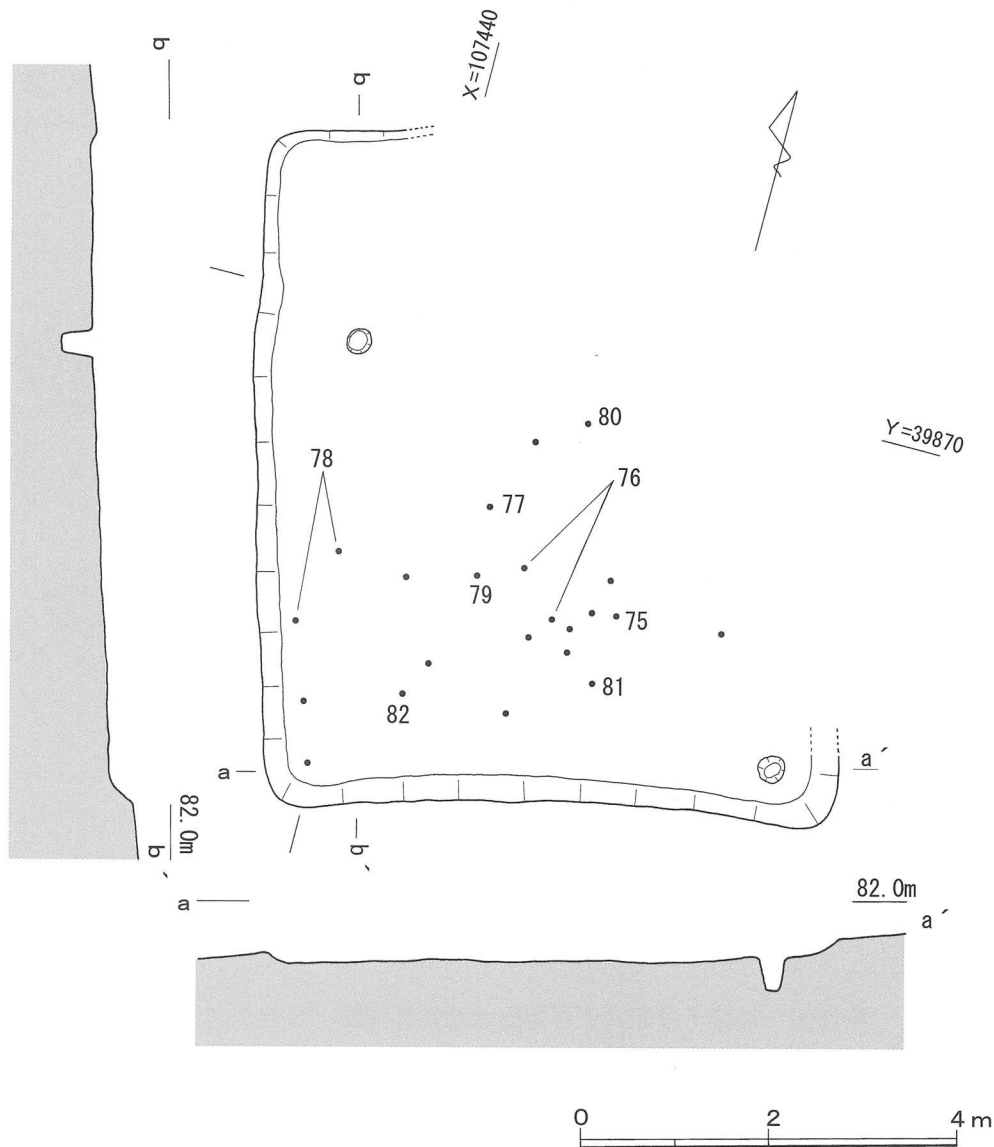
第2節 古代の遺構と遺物

1 遺構

1号竪穴住居跡（第22図、E区、SA1）

E区のE4グリッド付近で検出された一辺が約6.5mの隅丸方形プランの竪穴住居跡である。耕作の影響を受けたことや、台地縁辺部の緩斜面に位置していたこともあって半分ほどがすでに消失しており、床面と浅い立ち上がりを確認するにとどまった。

遺構は検出面の上端からの床面の最深部で約25.6cmを計るが本来の深さは不明である。また、住居跡の内部で複数のピットを検出したが、上から掘り込まれたものがほとんどであり、床面で検出できたピットは2基のみであった。

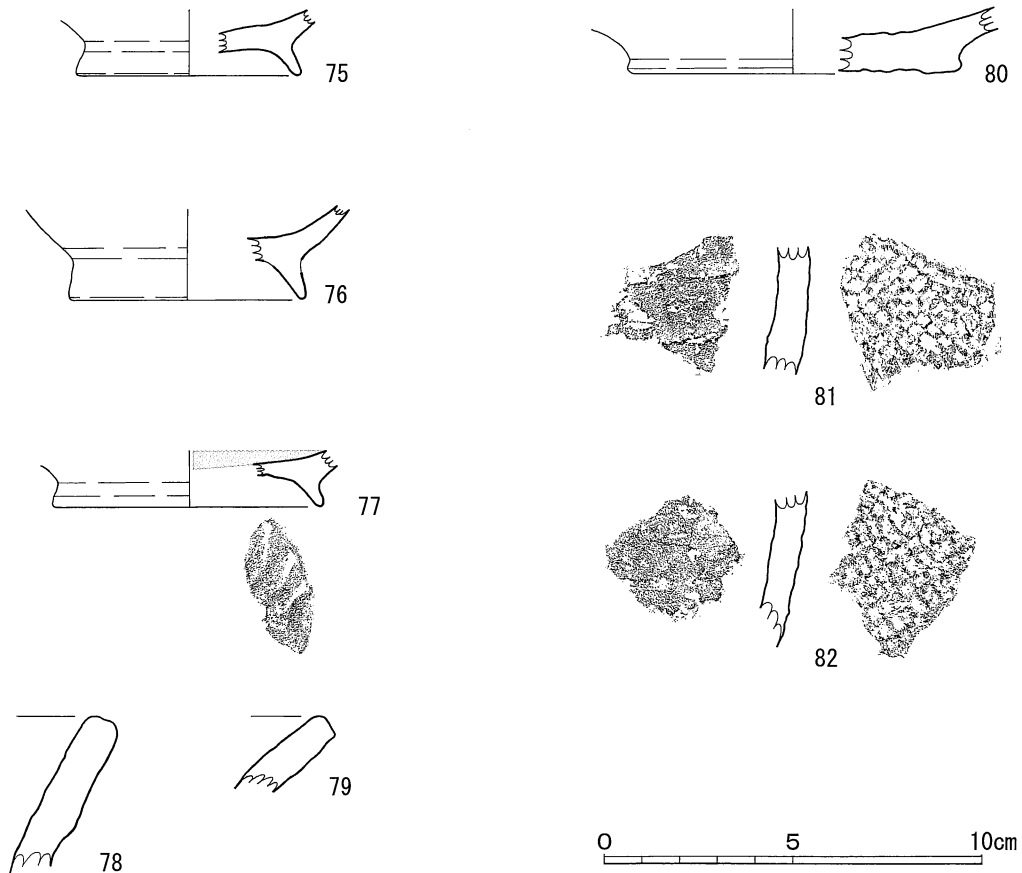


第22図 E区1号竪穴住居跡実測図（S=1/80）

遺構に伴う遺物を第23図に、またその出土位置を第22図中に示した。

75・76・77は外側に向かって開く高台をもつ碗の底部で、いずれも全面に回転ナデによる調整が見られる。77は内面に顕著な黒化処理が見られる黒色土器であるが、高台外面も黒色を呈することから、外器面も体部は黒化処理が施されていた可能性もある。高台内には指頭もしくはへら状の工具による圧痕が見られる。

78・79は甕の口縁部である。直線的に外反し、口唇部を平坦に作り出している。全体に丁寧な横ナデが見られる。78は口縁部下位に明瞭な稜を有する。80は甕の底部である。外器面の調整は横ナデであるが、内器面はやや風化しており判然としない。78と80には胎土に赤褐色の3mm前後の鉱物粒が特徴的に含まれており、同一個体の可能性を指摘しておきたい。81・82は外器面に格子状の工具によるタタキ痕をもつ。甕の胴部片であると思われる。



第23図 E区1号竪穴住居跡出土遺物実測図 (S = 1 / 2)

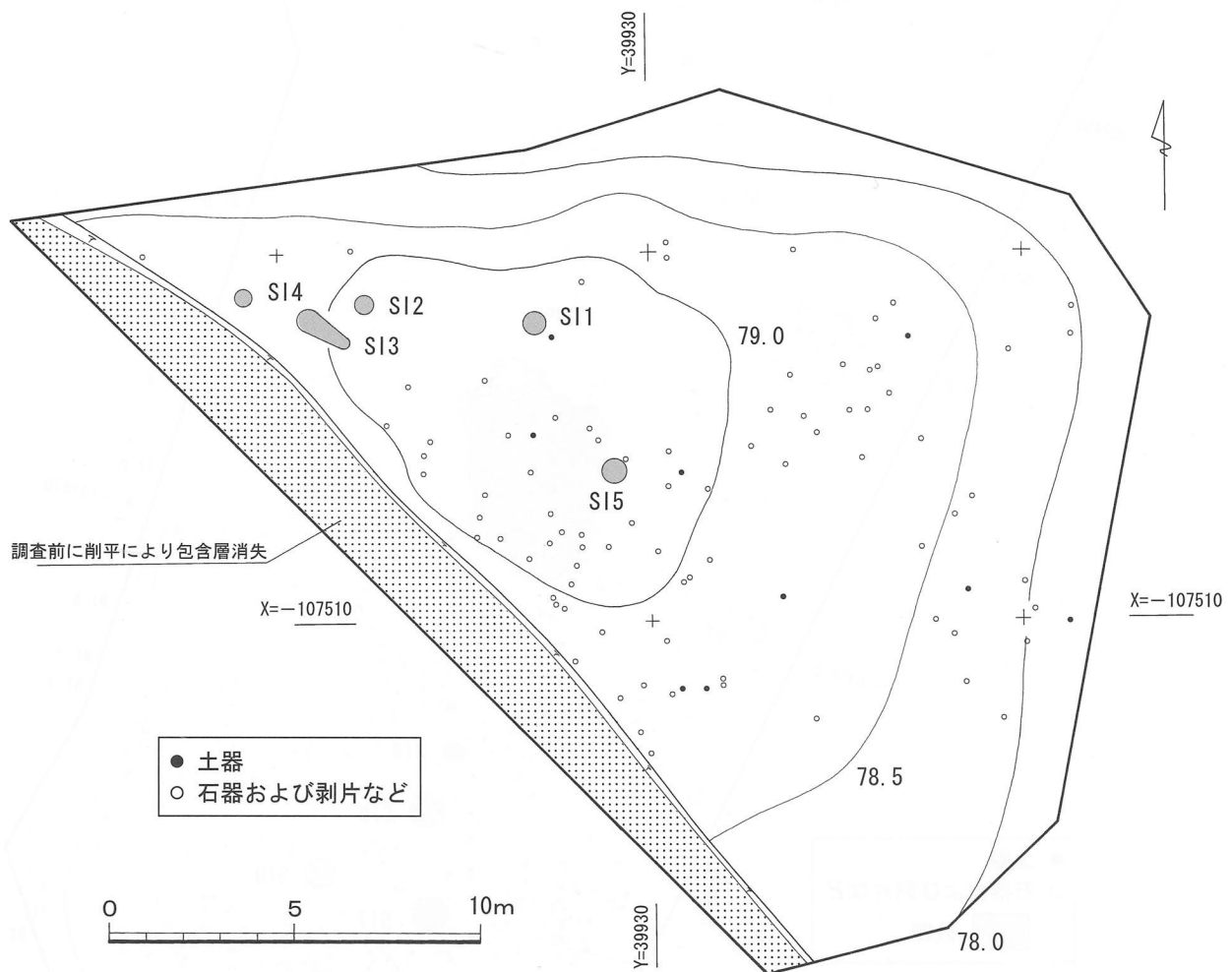
第3節 縄文時代早期の遺構と遺物

縄文時代早期の遺構・遺物をD区、E区、G区で確認した。

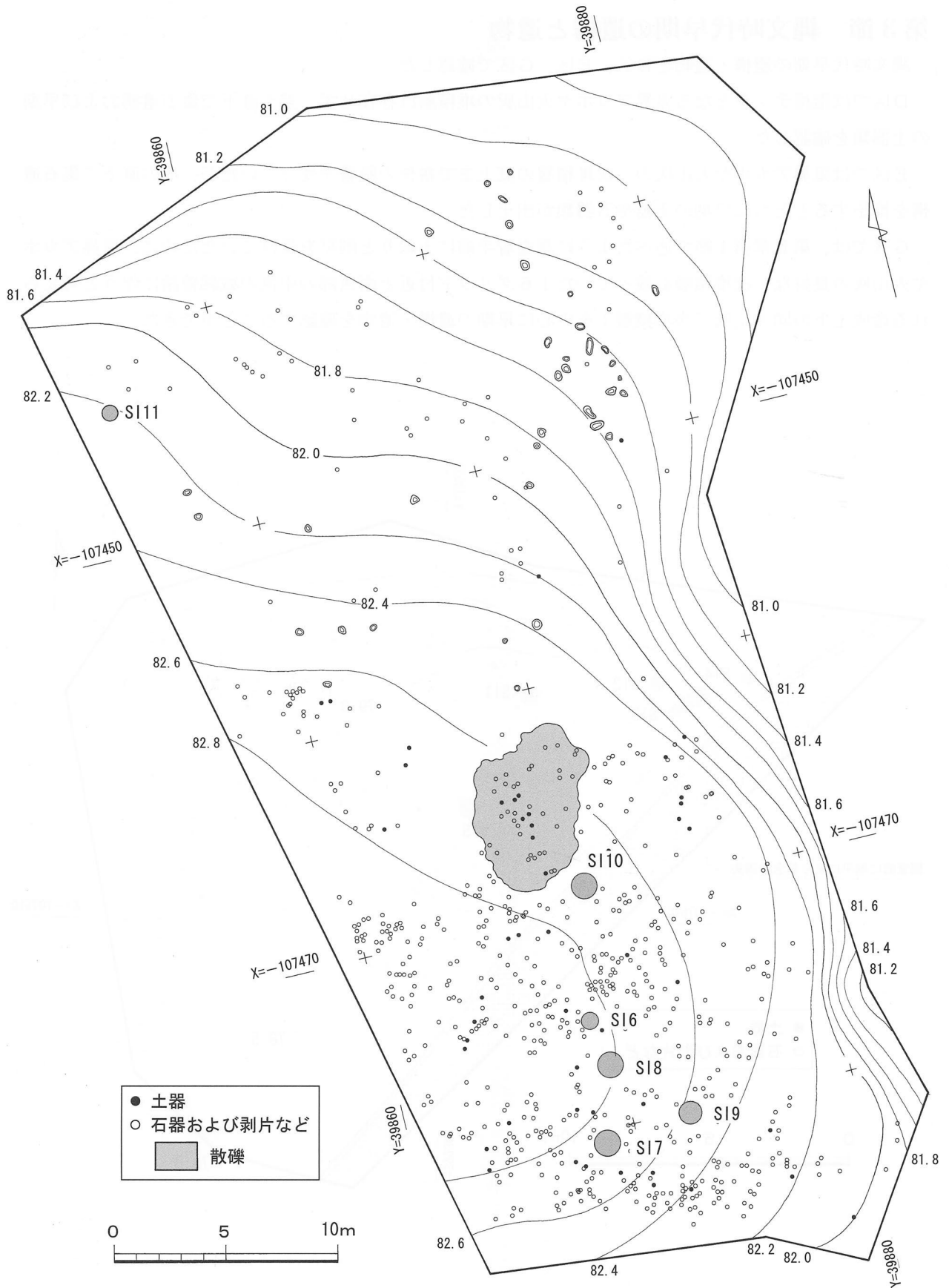
D区では指標テフラとなる鬼界アカホヤ火山灰の堆積層は存在せず、表土直下で集石遺構および早期の土器類を確認した。

E区では鬼界アカホヤ火山灰の二次堆積層の直上まで耕作の影響を受けていたが、その直下で集石遺構を検出するとともに早期の土器や石器類が出土した。

G区では、第II章第1節で述べたように調査着手前に土取りと削平を受けていたために、鬼界アカホヤ火山灰の良好な一次堆積層が残っていたI6グリッド付近と南西部の中世の城郭普請に伴うと考えられる造成土下の同火山灰二次堆積層下を中心に早期の遺構・遺物を確認することができた。



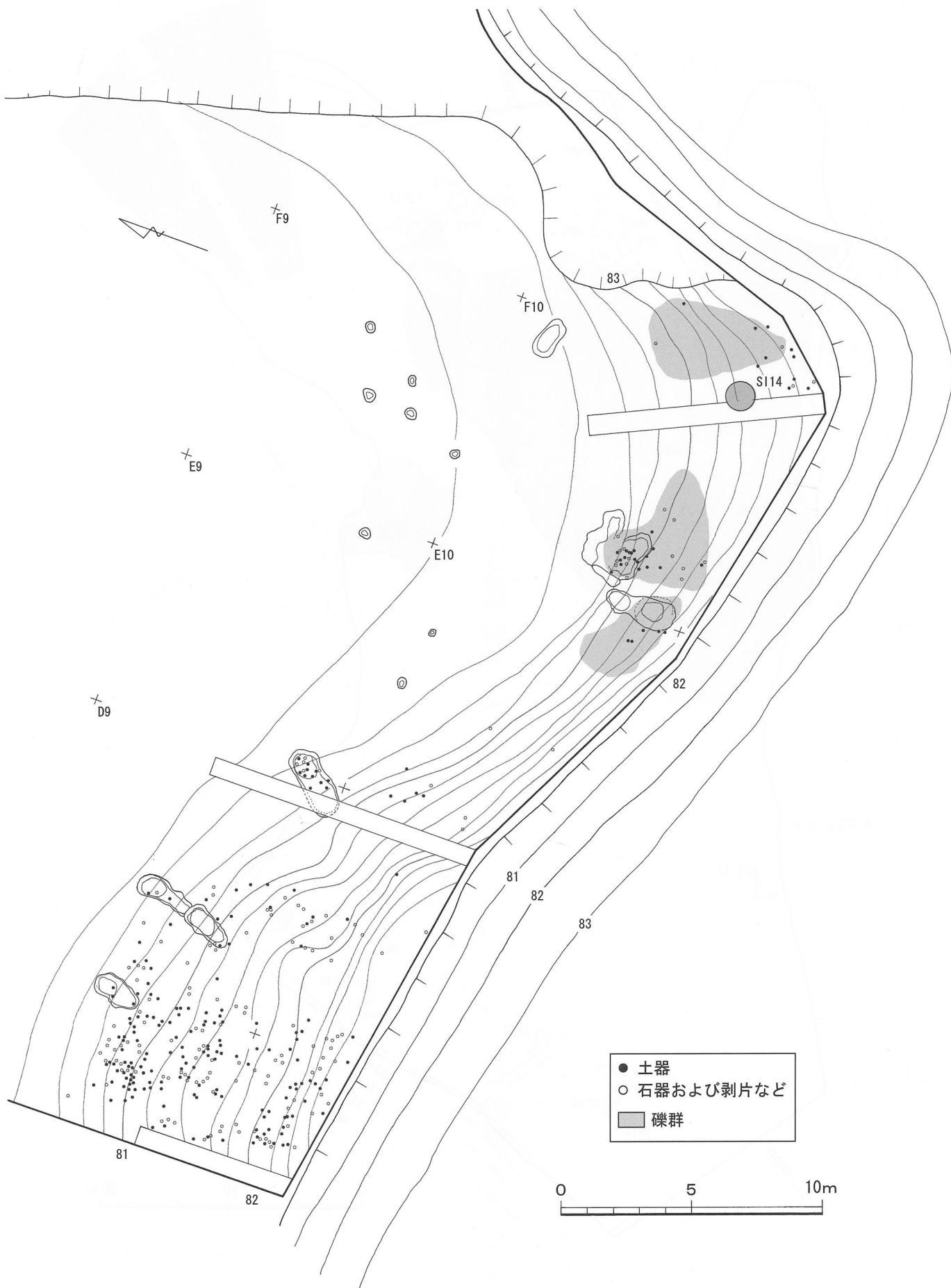
第24図 D区縄文時代早期遺構・遺物分布図 (S = 1 / 200)



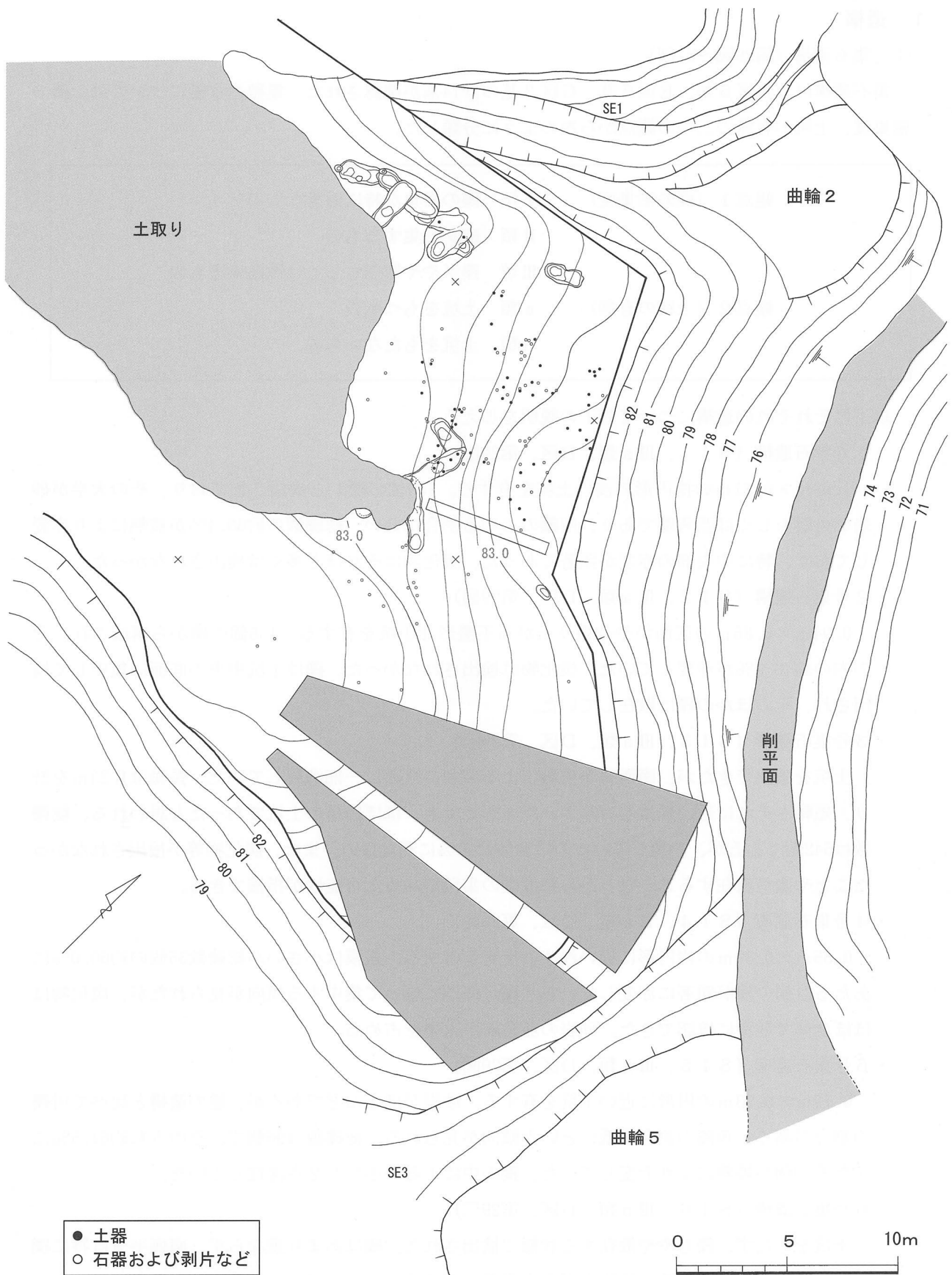
第25図 E区縄文時代早期遺構・遺物分布図 (1/250)



第26図 G区縄文時代早期遺構分布図 (1/400)



第27図 G区南西部縄文時代早期遺構・遺物分布図 (S = 1/200)



第28図 G区中央付近縄文時代早期遺構・遺物分布図 (S = 1 / 250)

1 遺構

(1) 集石遺構 (第29図～31図)

集石遺構は、D区5基、E区6基、G区3基の計14基が確認された。集積の状態については、礫の密集度、土坑の有無の二つの観点から次のように分類した。

観点1 (礫の密集度)	I類	礫の密集が特に顕著なもの
	II類	礫が密集するもの
	III類	礫がやや散在もしくは散在するもの
観点2 (土坑の有無)	a類	土坑をもつもの
	b類	土坑をもたないもの

以下にそれぞれの遺構について若干の説明を加える。

・ 1号集石遺構 (S I 1、III a類、D区、第29図)

1.08m×0.81mの楕円形の浅い土坑を有する。159個の礫から構成されており、その大半が砂岩の角礫もしくは亜角礫であり、円礫の占める割合は低い。総礫数の約60.4%が被熱により赤変しており、特に中央部の赤変が顕著であった。炭化物はそれほど多くは検出されなかった。

・ 2号集石遺構 (S I 2、III a類、D区、第29図)

0.94m×0.85mの底面がやや盛り上がる不整形な土坑を有する。136個の礫から構成され、その内の約46.3%が赤変していた。炭化物は検出されなかった。礫は土坑中央の底面に集中して検出され、そのほかの礫は散在していた。

・ 3号集石遺構 (S I 3、III a類、D区、第29図)

土坑を確認できたが、南西隅が重機による開削のために一部消失していた。長軸は1.23mを計り、短軸もそれに近い規模を有していたと想定でき、ほぼ円形の土坑であったと思われる。総礫数は542個であるが、赤変していたのは全体の1%に満たない。また、炭化物等が検出されなかったことや礫が散在することなどから準備礫の集積であった可能性が指摘できる。

・ 4号集石遺構 (S I 4、II a類、D区、第29図)

0.55m×0.39mの楕円形に近い浅めの土坑を有する。規模は小さいが総礫数35個の約60.0%にあたる21個の礫が顕著に赤変していた。礫が南側に偏って集中する傾向が見られたが、炭化物はほぼ全体で散漫に確認できた。砂岩の亜角礫が大半を占める。

・ 5号集石遺構 (S I 5、III a類、D区、第29図)

0.79m×0.73mの円形に近い土坑を有する。砂岩がほとんどであるが、他の遺構と比べて円礫の割合が高く、角礫の割合が低いという傾向が見られる。総礫数は96個で、そのうち約61.5%にあたる59個が被熱により赤変していた。礫の中に土器の小片が2点混在していた。

・ 6号集石遺構 (S I 6、III b類、D区、第29図)

土坑をもたず、礫もやや散在する状態で検出された。礫はあまり重ならず、南側半分は特に礫の数も少なく散漫である。検出面が表土直下のごく浅いレベルで、一部はすでに露出していたことから、集積されていた礫が失われたことも考えられる。総礫数は93個で、その内赤変していた

礫は約22.6%にあたる21個であった。砂岩の亜角礫が大半を占める。

・ 7号集石遺構 (S I 7、I a類、E区、第30図)

1. 17m×1.01mの楕円形の土坑を有する。215個の礫から構成されていたが、使用されている礫は長軸が10～15cmの比較的大きな砂岩が中心で、大半が被熱により赤変し割れているものが多かった。直径約40cmの土坑底面には炭化物混じりの黒色土が確認され、土器片も2点出土した。

・ 8号集石遺構 (S I 8、I a類、E区、第30図)

1. 39m×1.14mのしっかりした掘込みをもつ土坑を有する。礫の密集度がきわめて高く総礫数は570個を数え、約83.5%にあたる476個が赤変していた。土坑底面の土は、炭化物混じりで強い黒色を呈し固くしまっていた。土坑の上端付近から土器片が3点出土している。

・ 9号集石遺構 (S I 9、I a類、E区、第30図)

1. 13m×1.02mの楕円形の土坑を有する。総礫数252個の構成を見ると、亜円礫(143)と亜角礫(107)が大半を占め、残りは円礫(2)であった。また、赤変している礫が12個と全体の0.5%にも満たず炭化物等も確認できなかったことから、未使用もしくは準備礫の集積と考えられる。

・ 10号集石遺構 (S I 10、I a類、E区、第30図)

0.99m×0.87mのほぼ円形土坑で、263個の礫が散在せず土坑の形状に合わせてほぼ円形に集積されていた。中央部付近に集まっていた大礫のほとんどが赤変しており、その付近からは炭化物も検出されたが、それらを取り囲む中礫や小礫はほとんど赤変していなかった。

・ 11号集石遺構 (S I 11、II a類、E区、第30図)

0.68m×0.59mで底面がやや不明瞭な浅い土坑を有する。礫の密集度も低く散漫な集積である。総礫数は67個であるが、その内赤変していたものは約16.4%の11個で炭化物も確認できなかった。

・ 12号集石遺構 (S I 12、II a類、G区、第30図)

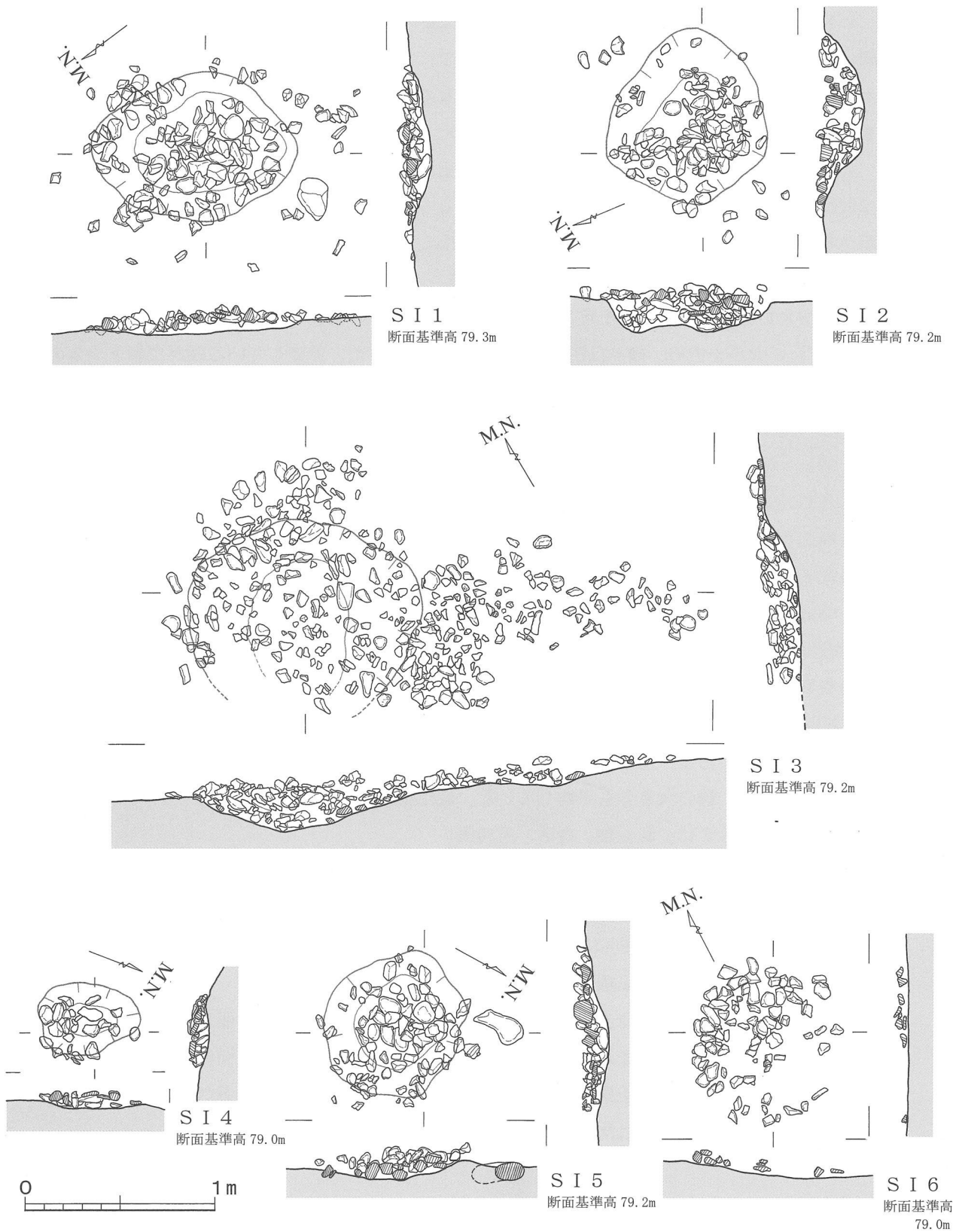
0.69m×0.58mの規模の小さな土坑であるが、掘込みはしっかりしており礫も比較的まとまりのある集積状況である。遺構を構成する41個の礫の大半は円礫と亜円礫で、全体の約63.4%が赤変するとともに、礫の大きさも平均していた。炭化物はわずかではあるが認められた。

・ 13号集石遺構 (S I 13、II a類、G区、第30図)

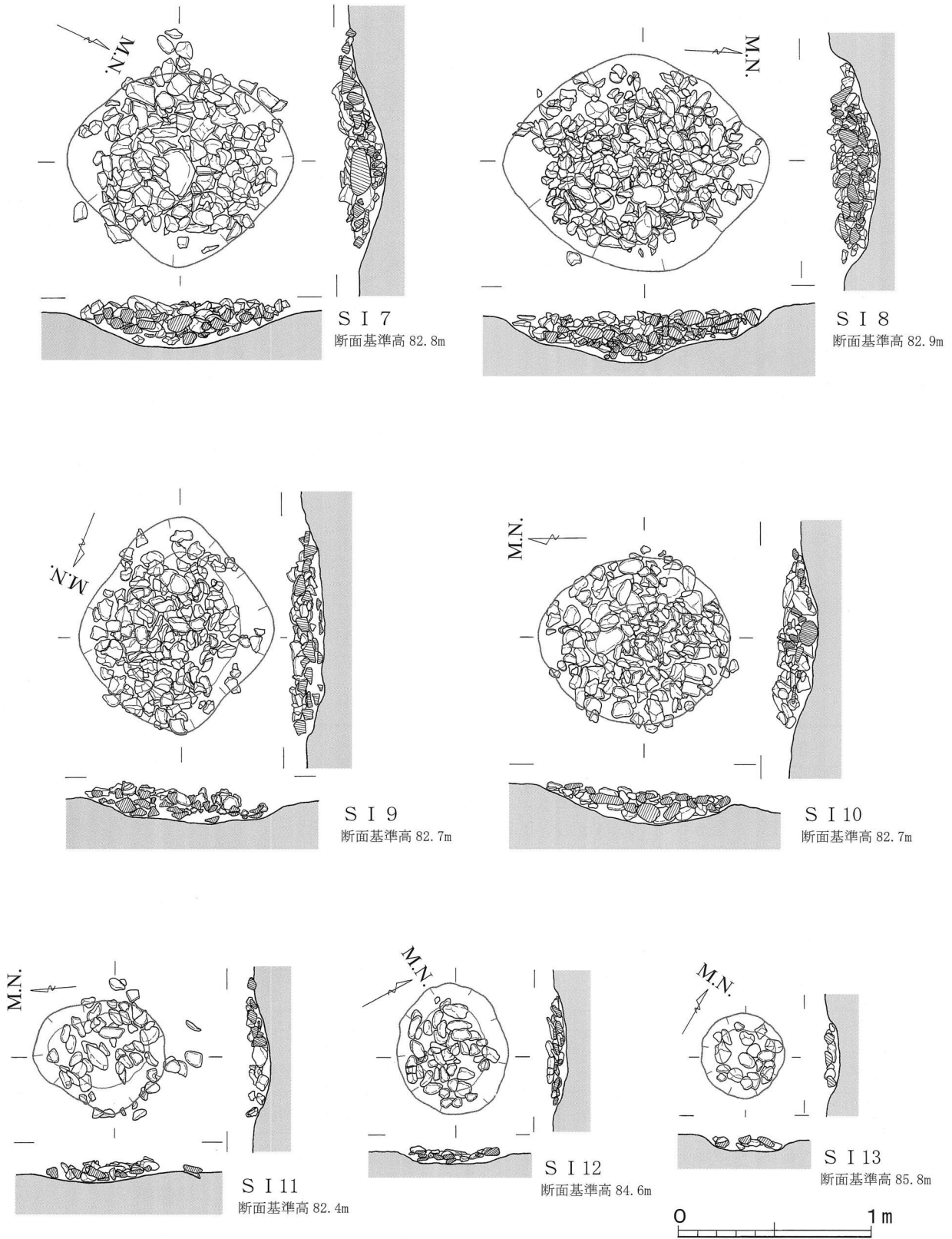
0.43m×0.44mの土坑は、検出した集石遺構の中で最小規模である。遺構を構成していた礫は長軸が10cm以下のものがほとんどであるが、12号集石遺構と同様に平均した大きさの砂岩を用いていた。総礫数は19個で57.9%にあたる11個の礫が赤変していたが、炭化物は確認できなかった。

・ 14号集石遺構 (S I 14、II a類、G区、第31図)

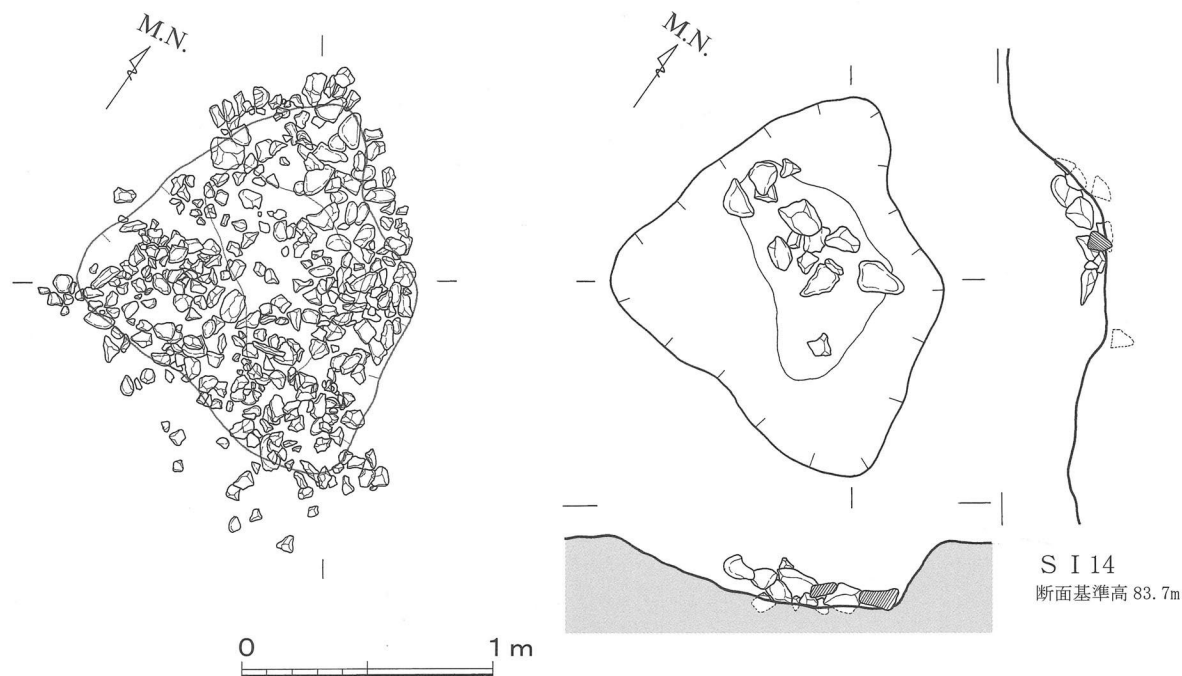
1.51m×1.34mの不整形な土坑を有する。礫は赤変した砂岩の角礫と亜角礫がほとんどで円礫が少なかった。やや散在しまとまりを欠く集積状況であったが、土坑底面には長軸が15～20cm弱の礫が配してあった。遺構を構成する礫の中に粗質のチャート円礫が1個だけ混入していた。そのほかに土器片が2点出土したが、炭化物は検出できなかった。



第29図 D区、E区集石遺構実測図 (S=1/30) SI 1~5 (D区)、SI 6 (E区)



第30図 E区、G区集石遺構実測図 (S=1/30) S I 7~11 (E区)、S I 12~13 (G区)



第31図 G区集石遺構実測図 (S = 1/30) S I 14 (G区)

第2表 集石遺構一覧表

遺構番号	検出区	分類	土坑の規模 (長軸×短軸)	備 考
S I 1	D区	III a	1.08m × 0.81m	炭化物微量検出
S I 2	D区	III a	0.94m × 0.85m	炭化物未検出
S I 3	D区	III a	1.23m × — m	一部破壊 炭化物未検出 準備礫?
S I 4	D区	II a	0.55m × 0.39m	炭化物検出
S I 5	D区	III a	0.79m × 0.73m	炭化物検出 土器片 2点
S I 6	E区	III b	————	土坑を有せず 炭化物未検出
S I 7	E区	I a	1.17m × 1.01m	礫密集度高 炭化物多量検出 土器片 2点出土
S I 8	E区	I a	1.39m × 1.14m	礫密集度高 炭化物検出 土器片 3点出土
S I 9	E区	I a	1.13m × 1.02m	礫密集度高 準備礫?
S I 10	E区	I a	0.99m × 0.87m	礫密集度高 大礫のみが赤変 炭化物検出
S I 11	E区	II a	0.68m × 0.59m	小規模 炭化物未検出 準備礫?
S I 12	G区	II a	0.69m × 0.58m	小規模 炭化物微量検出
S I 13	G区	II a	0.43m × 0.44m	小規模 炭化物未検出
S I 14	G区	II a	1.51m × 1.34m	炭化物未検出 土坑底面に配石 土器片 2点出土

(2) 炉穴（第32図～34図）

炉穴はG区においてのみ検出された。総計で22基が確認され、3基以上の切り合い関係が認められるⅠ群・Ⅱ群、2基の炉穴が切り合うⅢ群・Ⅳ群、その他の単独で検出されたものを一括したⅤ群というようにグルーピングをおこなった。

以下設定した群毎に解説を加える。なお、「炉穴」という呼称の採用は、明確なトンネル部を有する遺構が未確認であることによっている。

Ⅰ群（第32図 2～9号炉穴）

曲輪1の東縁辺に展開し、計8基の炉穴が切り合って構成される。その構築順序については断面観察や埋土中に含まれる礫のレベル差などの所見から、次のような変遷を指摘することができる。

2号 → 3号 → 4号 → 5号 → 6号 → 8号 → 9号・7号

8号と9号の先後関係は土層断面の観察からは確定に至らなかったが、8号以前の展開から9号が後行するものと思われる。7号より南側は大規模な土取りにより削平されており、こちら側にさらなる展開がなされた可能性は否定できない。

なお、7号炉穴の埋土中より第36図に示した貝殻文円筒形土器の破片（96）を、9号炉穴の埋土中からは第46図の磨石（221）を検出している。

Ⅱ群（第33図 10～15号炉穴）

Ⅰ群の南西側に近接して、計6基の展開が確認された。攪乱坑に切られており、本来の全容は不明である。主に断面観察の結果から、次のような構築順序が想定される。

10号 → 11号 → 12号 → 13号 → 14号（15号は少なくとも12号・13号に後出）

なお、12号の埋土中より第40図に示した底部片（141）を、14号炉穴の埋土中から石核（220）を検出している。

Ⅲ群（第34図 17号・18号）

17号の足場をわずかに切るかたちで18号が構築されている。

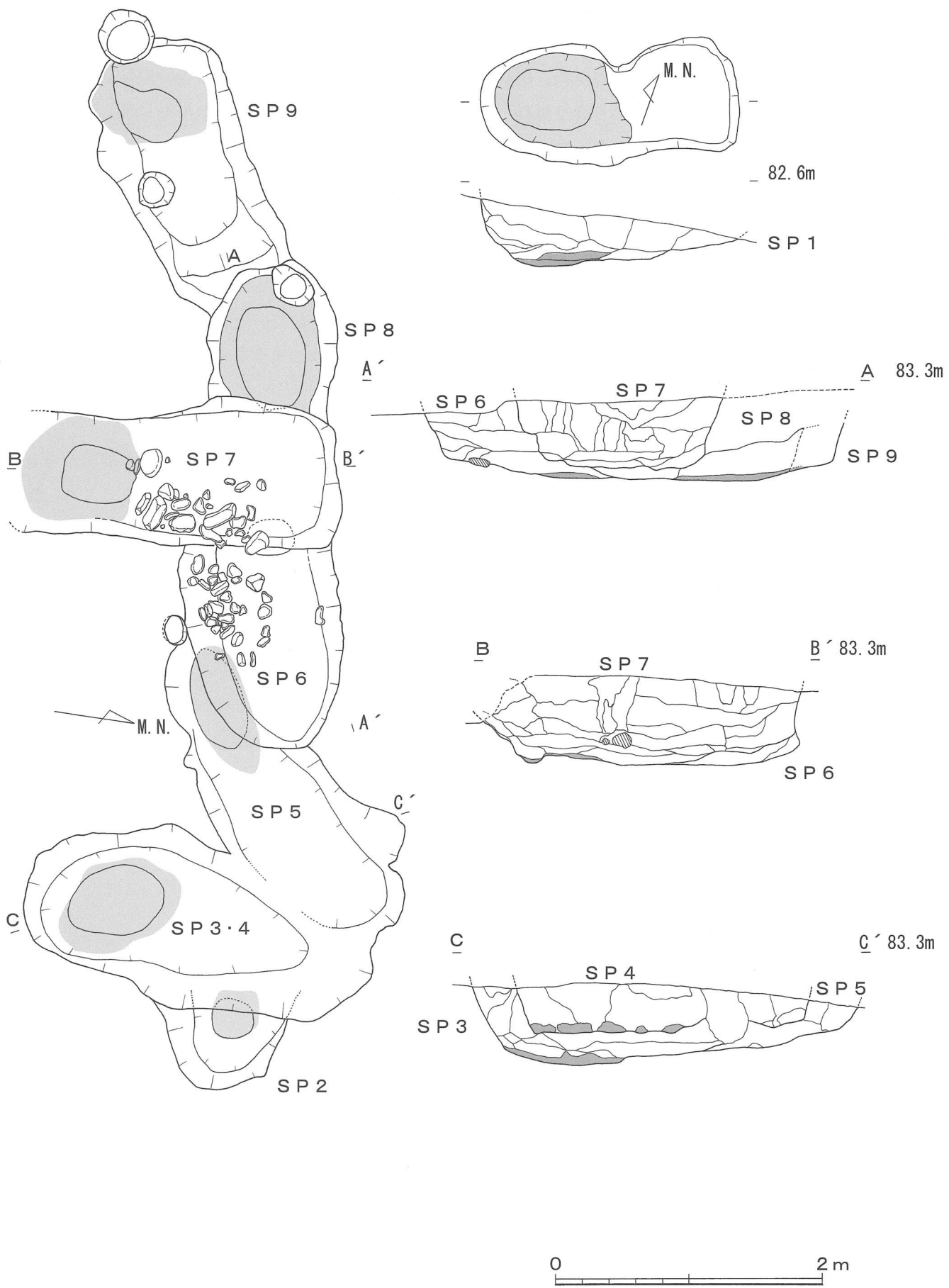
Ⅳ群（第34図 21号・22号）

21号のみにわずかに焼土の分布範囲がみられ、そのプランもあわせ、炉穴と認定した。断面観察により切り合い関係の把握に努めたが、新古の確定には至らなかった。Ⅲ群とは異なるパターンの切り合い関係を有する可能性が指摘される。

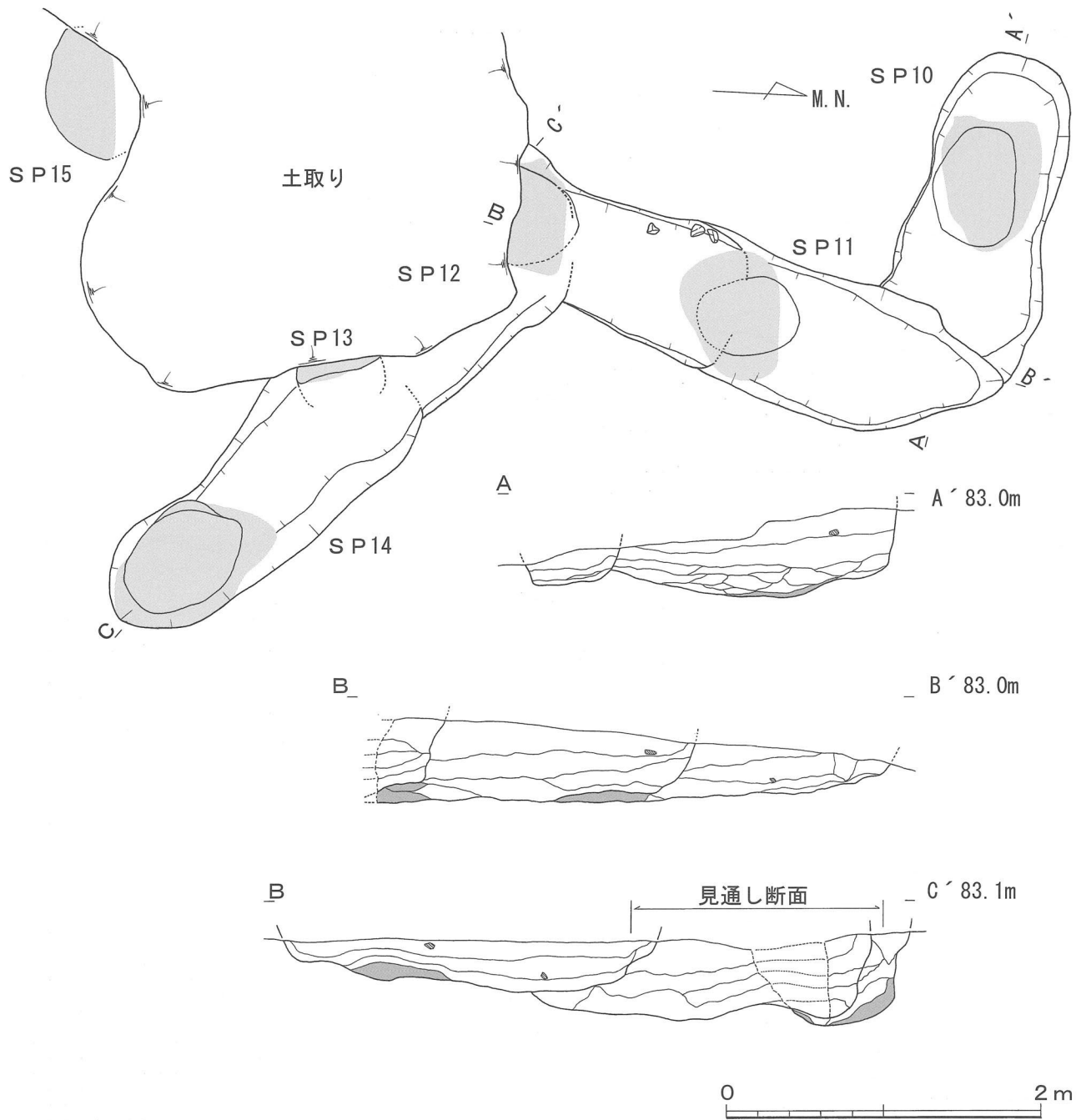
Ⅴ群（第32図 1号、第34図 16号・19号・20号）

- ・1号炉穴はⅠ群の東側に単独で検出された。
- ・16号炉穴は17号、18号炉穴と軸を同じくして隣接する。
- ・19号はトレンチ掘削の際には埋土を認識できず、焼土混じりの土層を確認した時点で遺構の存在が明らかとなった。
- ・20号は21号、22号炉穴に近接し、礫をまばらに包含する土坑に切られている。

以上の炉穴の検出面については、台地縁辺の斜面上という立地条件から必ずしも一様ではない。Ⅰ



第32图 G区炉穴实测图1 (S=1/40)

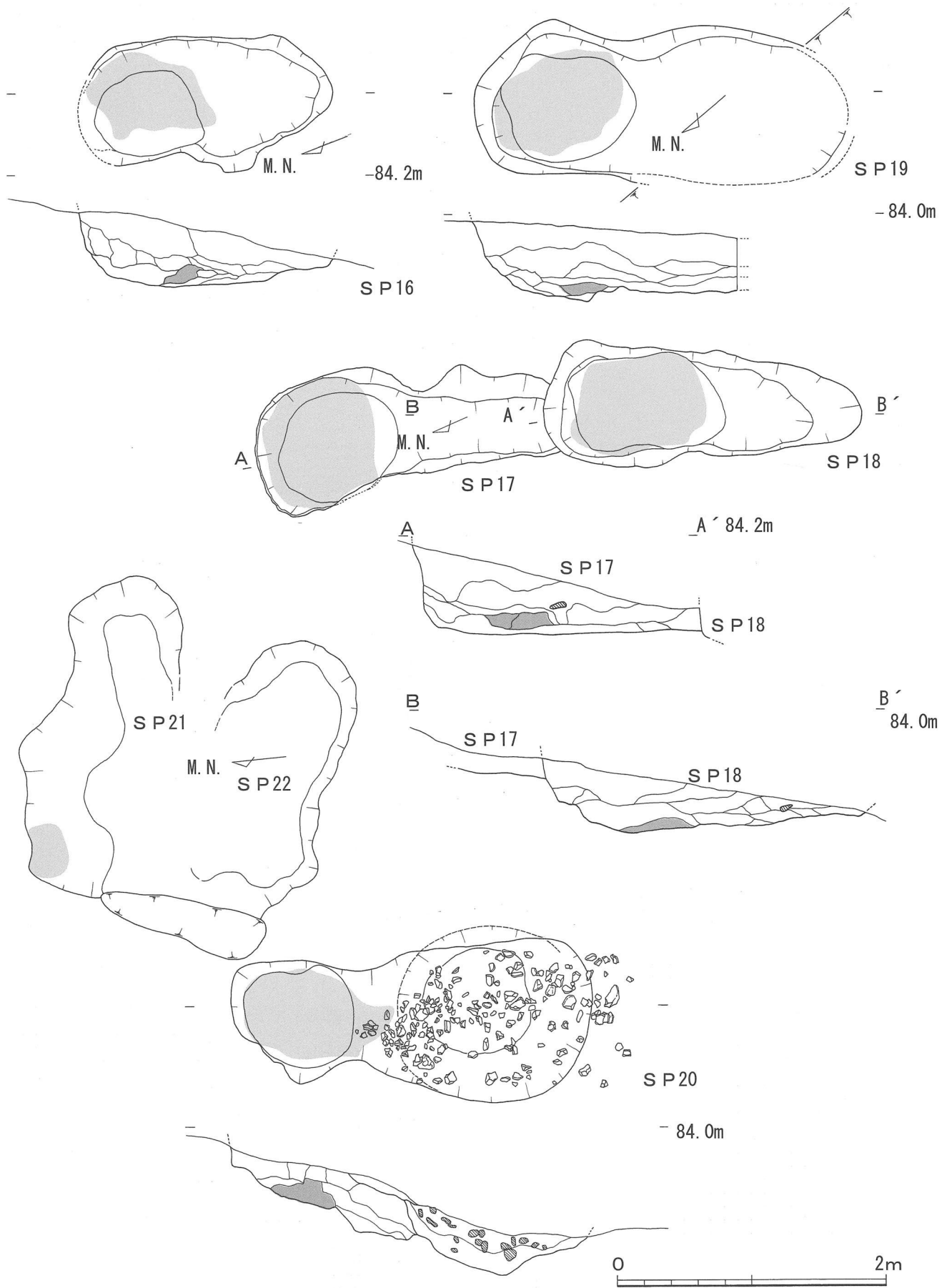


第33図 G区炉穴実測図2 (S=1/40)

群、II群については、検出面からおよそ10cm前後のレベルに霧島イワオコシの堆積層が観察され、調査区西側に展開する他の炉穴群については霧島アワオコシを地山としている。また、通常ブリッジが想定される足場と炉部の中間部であるが、その存在を顕著に表すような土層堆積は確認できなかった。

焼土の分布に関しては、炉部に明瞭な赤褐色のそれが認められ、炭化物を伴うことが多く、足場には炭化物をまばらに含む黒褐色土層が観察されるという共通したパターンが認められた。

また、埋土中に礫が観察される6・7号炉穴は、6号炉穴は床面よりやや浮いたレベルで、7号炉穴では、およそ床面直上に近い状態で検出され、その先後関係判断の一材料となった。多くの礫には被熱の痕跡が認められた。



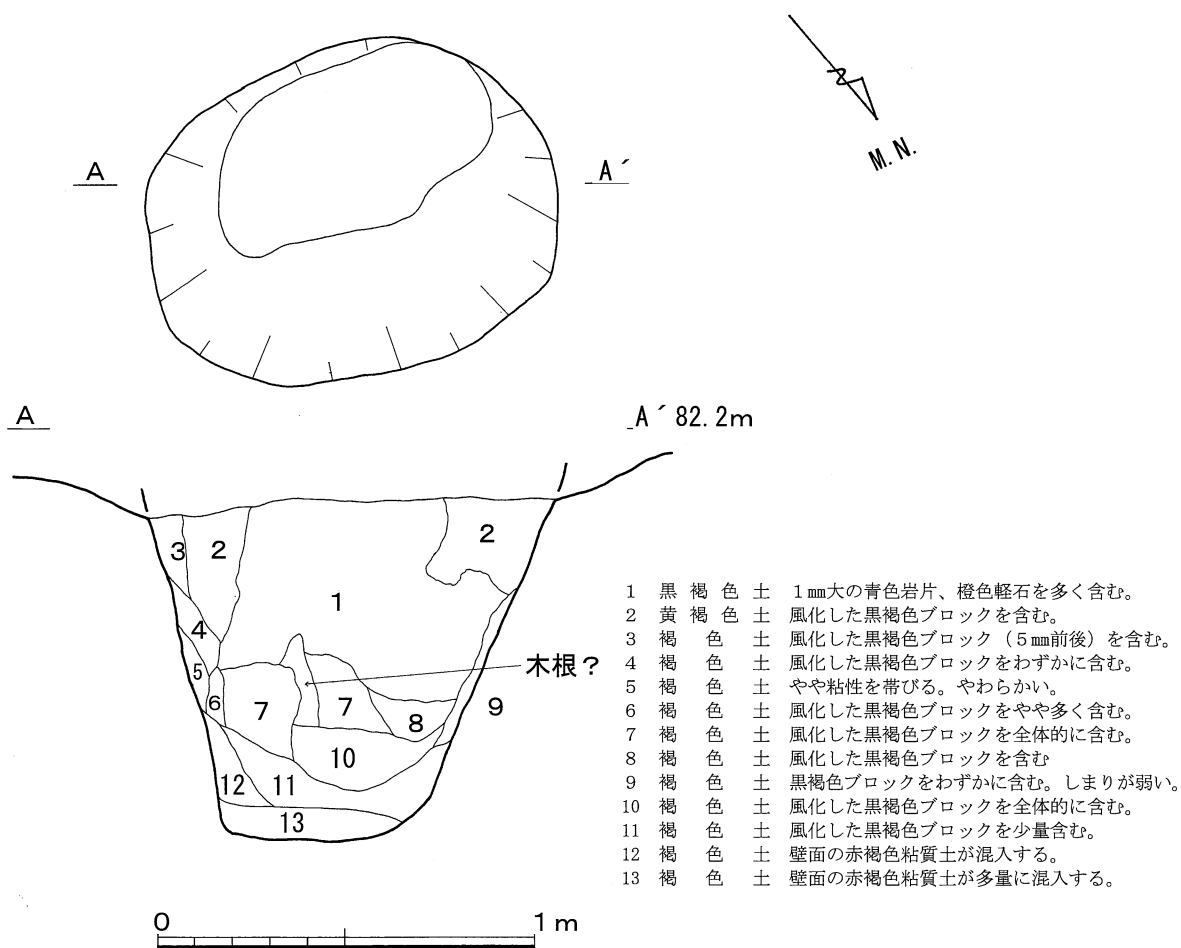
第34图 G区炉穴实测图3 (S=1/40)

(3) 土坑 (第35図)

土坑は、調査時には計6基をG区において認識したが、1基をのぞいては、不定型なプランを有し、かつ明確な掘り方を認定するに至らず、報告はここに掲載する1号土坑のみにとどめる。これ以外の遺構の大半については風倒木痕などの可能性が考えられた。

1号土坑 (SC1)

G区の曲輪1の東縁辺部の斜面で検出された。長軸約1.1m、短軸約0.9mの楕円形のプランを呈する。検出面からの深さはおよそ1mを測り、その形態的特徴から陥し穴の可能性が考えられるが、底面に逆茂木などの痕跡は見出せなかった。



第35図 G区1号土坑実測図 (S = 1/20)

2 遺物

(1) 土器

縄文時代早期に位置づけられる土器をその文様や器形をもとにⅠ類からⅩ類に分類した。以下その分類にしたがって説明を加える。なお、詳細は遺物観察表を参照されたい。

Ⅰ類土器 (第36図 83)

83は内湾気味の口縁部をもち、口唇部外側から押圧刻みを、口唇部内面には横方向にナデを施し山形に尖る口唇部を作り出している。外器面には横方向に貝殻腹縁条痕文を施したあと、口縁部付近のみナデを施す。いわゆる「岩本式土器」である。

Ⅱ類土器 (第36図 84~94)

直立あるいはわずかに外反する口縁部をもつ。外器面全体には横位あるいは斜位の貝殻腹縁条痕文を施し、口縁端部には貝殻腹縁およびへら状施文具により縦位あるいは斜位の連続押圧文または刺突文を施す。施文には1段のものと2段のものがある。口唇部にはミガキ、内器面には丁寧なナデを施す。いわゆる「前平式土器」と呼ばれる一群であり、口縁端部の文様や胴部の貝殻腹縁条痕文の相違から3類に分ける。

a類 (84)

84はほぼ直立する口縁部をもち、口唇部外側に押圧刻みを施す。さらに、その直下に連続刺突文を一段のみ施す。口唇部外側からの押圧刻みはⅠ類と同様であるが、口唇部は平縁に整形されており相違が見られる。

b類 (85・86)

口縁端部に縦位あるいは斜位の貝殻腹縁連続押圧文を施し、外器面にやや幅広の貝殻腹縁条痕文を横方向に施す土器である。

85は口縁端部に縦位の連続押圧文を施した後、やや幅広の貝殻腹縁条痕文を横方向に外器面全体に施す。口唇部には刻み目を施す。器形はバケツ型の円筒形で平底となるタイプである。86は口縁部に斜位の貝殻腹縁連続押圧文を施す。内器面調整はともにナデである。

c類 (87~94)

口縁端部に縦位あるいは斜位の貝殻腹縁連続刺突文を1段ないしは2段施し、外器面全体には横方向あるいは斜方向の貝殻腹縁条痕文を施す土器である。

87~90は斜位、91~94は縦位の貝殻腹縁連続刺突文を口縁端部に施すが、外器面全体に見られる斜方向の貝殻腹縁条痕文、口唇部のミガキ、内器面のナデによる調整は共通している。90・93には外器面からの円形の穿孔(補修孔)が見られる。

Ⅲ類土器 (第36図、37図 95~101)

直立あるいはやや外反する口縁部をもち、底部近くまで斜方向の貝殻腹縁条痕文を施す。Ⅱ類と異なり口縁端部の施文は見られない。器形と口縁部の特徴から3類に分ける。

a 類 (95)

95は胴部から口縁部に向かって直線的に外に向かってのびる器形をもつ土器である。丸みを帯びた口唇部から内器面にかけてミガキを施す。

b 類 (96~98)

やや外反する口縁部で丸みを帯びた口唇部をもつ。わずかに膨らみをもつ胴部から底部に向かって緩やかにそばまっていく形状をもつ土器である。

96と97は口唇部に横方向の丁寧なミガキが、内器面にはナデが施される。98は口唇部から内器面にかけて丁寧なミガキが見られる。

c 類 (99~101)

直立する口縁部と平坦な口唇部をもち、器壁が比較的薄手の土器である。

99は器形としてはb類に近似しているが、口唇部が平坦であることからc類とした。口唇部から内器面にかけてミガキを施す。100・101はほぼ直立する口縁部をもつ。

IV類土器 (第37図 102~111)

直立あるいはやや外反気味の口縁で、外器面には明瞭な横方向の貝殻腹縁条痕文を確認できる円筒形の土器である。口縁部や丸みを帯びた口唇部は共通するが、貝殻腹縁条痕文による施文の相違から2類に分ける。

a 類 (102~107)

横方向の貝殻腹縁条痕文を外器面に施し、口唇部から内器面にかけてミガキを施す土器である。

102・103は口縁部がやや外反、104・105・106・107は口縁部が直立するタイプである。102は口縁部付近に円形の穿孔(補修孔)が見られる。

b 類 (108~111)

横方向の貝殻腹縁条痕文による地文の上に縦方向の条痕文を間隔をおいて組み合わせた格子状の施文をもつ土器である。

108と109は同一個体と思われる。横方向の貝殻腹縁条痕文は底部までは及ばず、縦方向の条痕文のみが胴部下位まで施される。口唇部はミガキ、内器面にはミガキと丁寧なナデを施す。

V類土器 (第37図 112~119)

底部から直線的にのびる筒状の器形で、直立気味の口縁部をもつ。平坦な口唇部に縦位の刻み目を、外器面には縦位の貝殻腹縁刺突文を施す。口縁部外面の楔形貼付突帯と底部側面の縦位の刻線が特徴的であり、いわゆる「知覧式土器」である。

112は円形をなす口縁部である。口縁端部には貝殻腹縁による横位の刺突文が3段施され、それ以下には縦位に同じ刺突文を密に施す。楔形貼付突帯は2段以上で口唇部は平坦で刻み目を施す。内器面はナデによる調整である。113~117は円筒形の胴部片であり、内器面には113・114は斜方向、117は横方向の貝殻腹縁条痕文を地文として施したあとに縦位の貝殻腹縁による刺突文をさらに施す2重施文となっている。117は刺突文がやや平行性を欠くことから途中で交差するタイプの文様であると思われる。113~117の内器面には縦方向のナデによる調整痕が見られる。118は胴部が角

筒となるタイプである。斜方向の貝殻腹縁条痕文を施した後に、縦位の貝殻腹縁刺突文を施す。角部には稜に沿って対象に並ぶ刺突文が確認できる。119は118と同じ角筒タイプの底部である。底部外周面に細い刻み目を施す。底部外面には板状の工具によると思われるナデ調整が見られる。

VI類土器（第38図 120～128）

いわゆる「下剥峰式土器」と呼ばれる土器の一群である。器形や文様の相違から4類に分ける。

a類（120）

119はほぼ直立する口縁部をもつが、胴部に比べてやや肥厚し内湾気味である。また、口唇部が平坦でわずかに内側に向かって傾いている。口縁端部には羽状に貝殻腹縁刺突文を施す。

b類（121～123）

平坦な口唇部のすぐ下に貝殻腹縁による横位の刺突文がめぐるタイプの土器である。121には口縁部の刺突文のすぐ下に縦位に細い刻み目が見られる。また、122には綾杉文を数段施した後に同様の施文が見られるのが特徴である。

c類（124）

口縁部の近くに最大幅をもち、底部に向かって緩やかにしまっていく器形をもつ。外器面には口唇部のすぐ下からヘラ状工具により7段から8段の綾杉文を施す。その下に横位を意識した鋸歯状の沈線文、さらにその下に縦位を意識した鋸歯状の沈線文が続く。平坦に仕上げられた口唇部から内器面にかけては横方向のナデによる調整が見られる。

d類（125～128）

125～128は貝殻腹縁による鋸歯状の刺突文をもつ胴部片である。127は基本的には鋸歯状の施文であるが横位を意識した施文である。また、胎土に金雲母を特徴的に多く含む。

VII類土器（第38図 129～135）

沈線文、列点文などによる文様構成が特徴的な土器で、やや膨らんだ胴部から頸部でわずかにくびれ、肥厚した口縁部が外に向かってのびる器形をもつ。いわゆる「平椀式土器」と呼ばれる土器である。文様構成の特徴から4類に分けた。

a類（129）

129は幅広の口縁部文様帯に竹管状の施文具による羽状の沈線文を、口唇部にはナデのあとに内外面から押圧刻みを施す。頸部には二条の刻み目突帯がめぐり、文様帯と刻み目突帯の間、内器面にはナデによる調整が見られる。胴部のすぐ上の頸部から外反し波状口縁となる。

b類（130～132）

沈線文とその間の列点文により構成される波状口縁の文様帯をもつ土器である。口唇部は内外面からの調整で先細り丸みを帯び、押圧刻みを施す。文様構成から2つに細分した。

b₁類（130・131）

130はナデによる器面調整後、2～3本の沈線文と列点文により構成される文様を施す。131は1～3本の沈線による波状もしくは渦状の文様を施し、その間に丸竹管による列点文を施す。

b₂類 (132)

132は壺の頸部である。3条ないしは4条の沈線文と2条の押し引き文により構成される複合鋸歯文と刻み目突帯が施される。刻み目突帯付近で推定復元した内径は約15cmである。

c類 (133~135)

133~135はいずれも胴部片で、緩やかな膨らみをもち、単節縄文による撚糸文を施す。133は刺突文のある突帯が見られる頸部のすぐ下の胴部片である。斜方向に原体を転がしたあと、2箇所結節を作った原体を転がした結節回転文が見られる。134も基本的には133と同様の施文であるが、羽状文を施した原体の結束の有無は判別しがたい。結節回転文を施した原体にも結節の仕方に相違が見られる。135には焼成前に施された工具もしくは指先によると考えられる内外面からの穿孔の跡が残る。器表には撚糸の原体による施文が見られるが、回転ではなく器表に押し付けることによる撚糸圧痕文と思われる。

VIII類土器 (第39図 136~139)

136~139は「押し型文土器」である。施文具の相違により2類に分ける。

a類 (136~138)

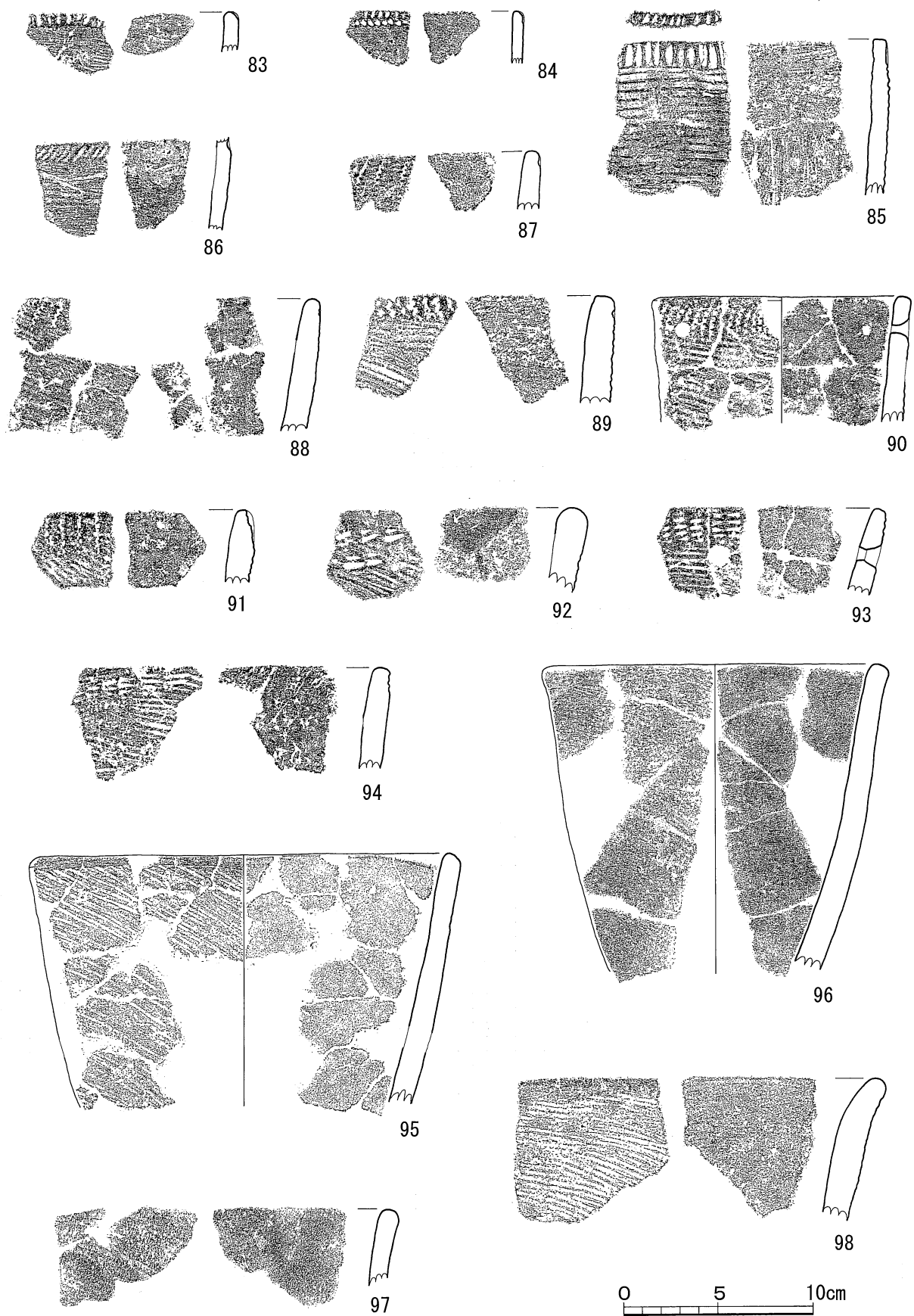
136~138は連続する鋸歯状の彫り込みをもつ原体を回転させ施文した山形押し型文をもつ土器である。136はやや外反する口縁部をもち、外器面には口縁端部まで横位に押し型施文を施す。内器面の口縁部付近にも約3cm幅の押し型施文帯を有する。口唇部は外方向に尖るシャープな形状で内面に丁寧に連続押し型文を施している。137・138は胴部片であり、136には縦位、138には横位の押し型施文が見られる。

b類 (139)

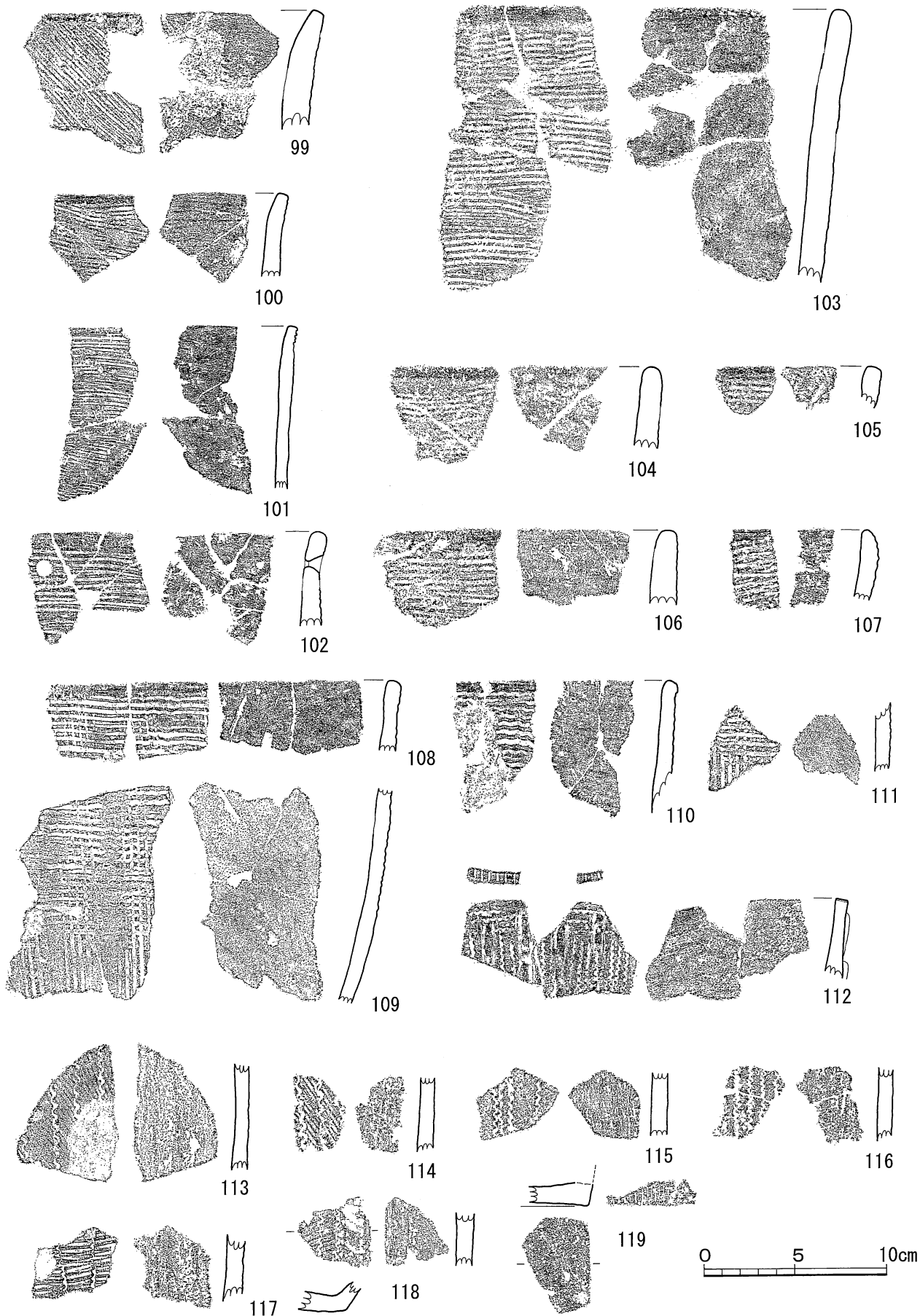
139は楕円形の彫り込みをもつ原体を回転させ施文した楕円押し型文をもつ土器である。口縁部がわずかに外反し、口唇部は丸みを帯びる。外器面はナデ、内器面の口縁部付近には丁寧なナデ、それ以下は横方向のナデによる調整である。外器面には斜方向の押し型施文が見られる。

IX類土器 (第39図 140)

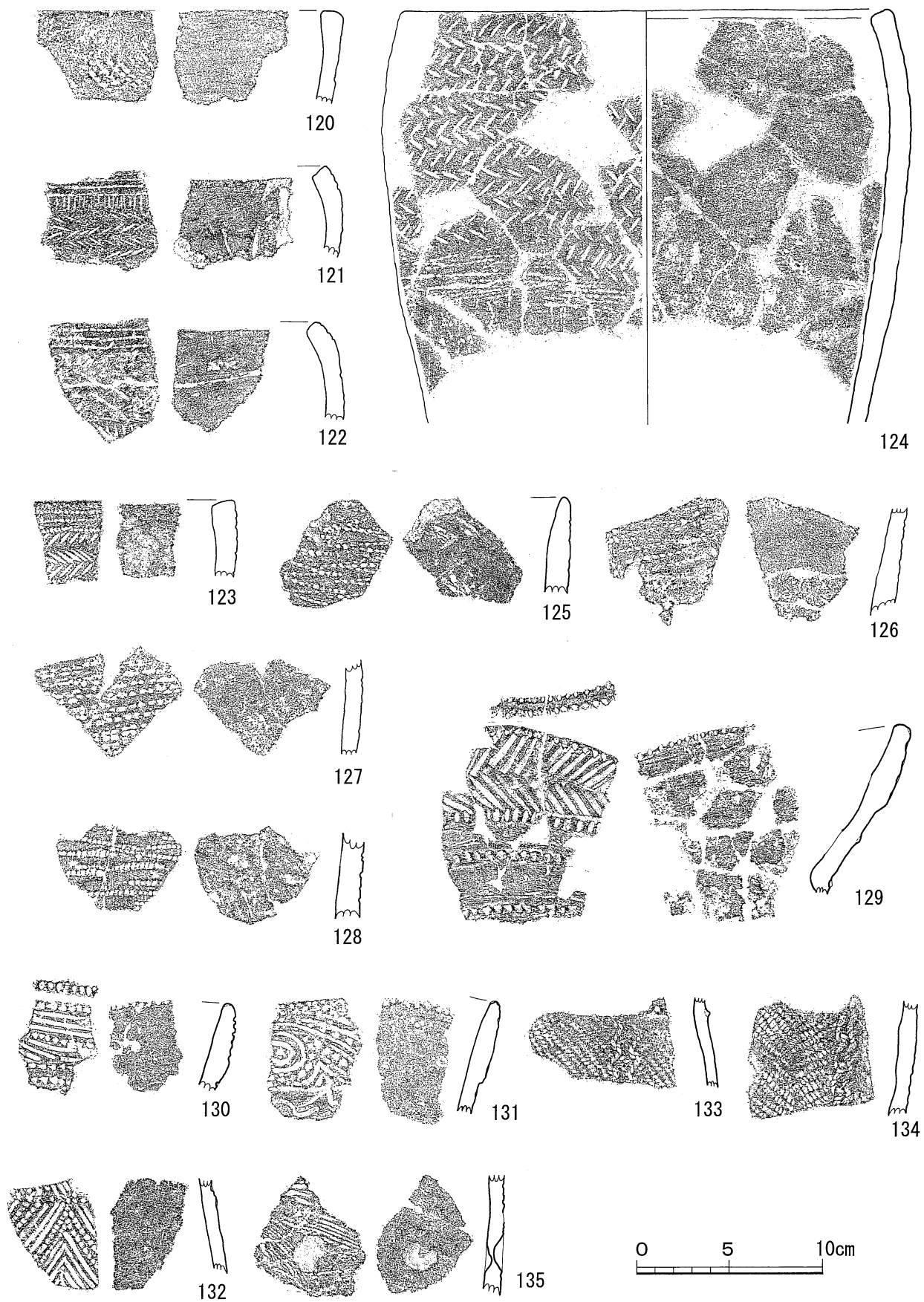
140は無文土器である。口縁端部では内側に向かって先細りとなり、細くなった口唇部はナデによる調整でわずかに丸みを残す。内器面、外器面ともにナデによる調整が見られる。



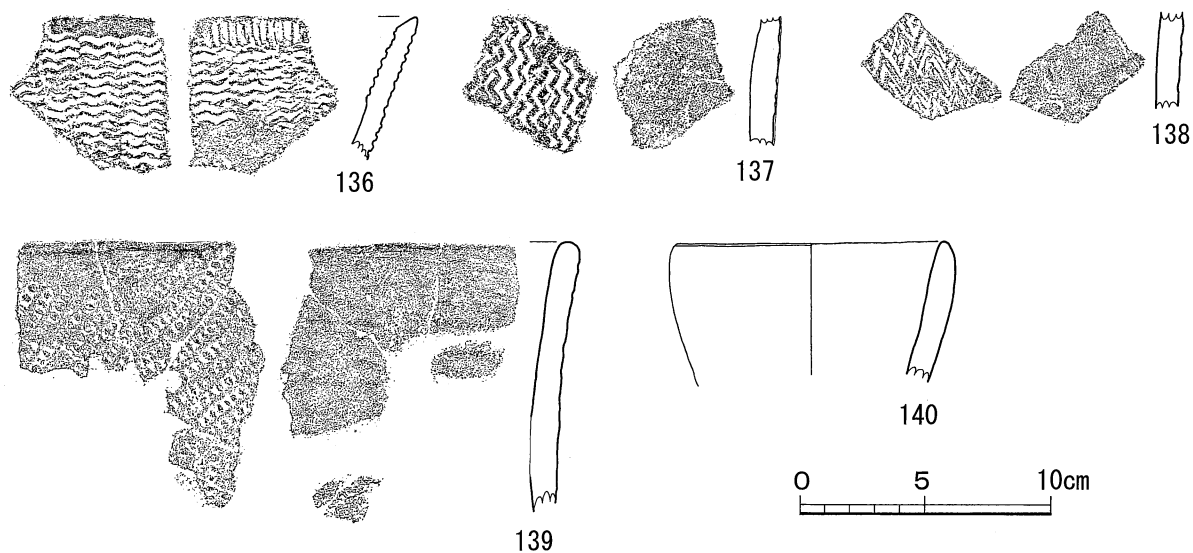
第36図 内城跡出土縄文時代早期土器実測図1 (S=1/3)



第37図 内城跡出土縄文時代早期土器実測図2 (S=1/3)



第38図 内城跡出土縄文時代早期土器実測図3 (S=1/3)

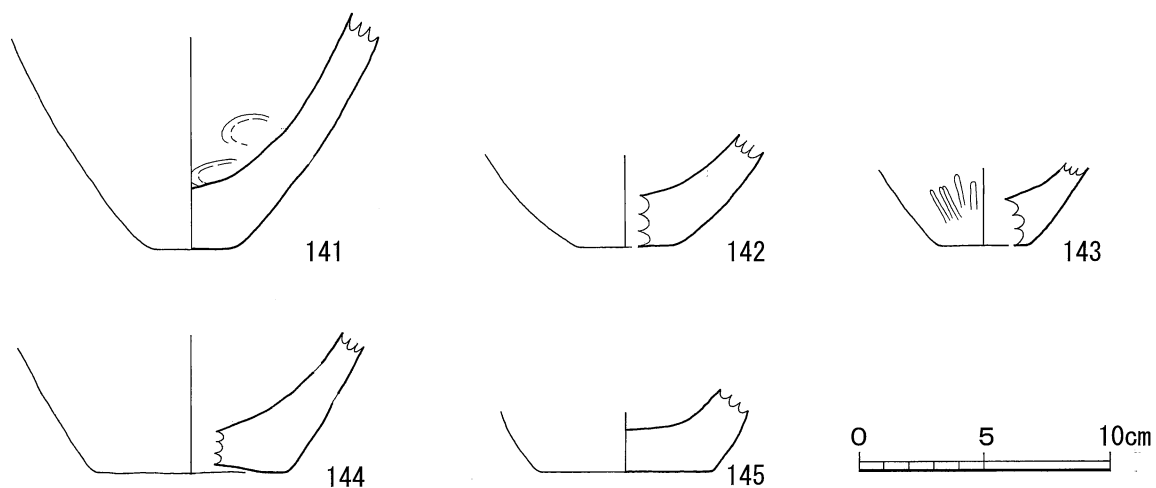


第39図 内城跡出土縄文時代早期土器実測図4 (S=1/3)

X類土器 (第40図 141~145)

形式不明の底部をここに一括する。

141~143は胴部下位から底部にかけてすぼまる器形を呈する。141は外器面にミガキ、内器面にミガキと丁寧なナデによる調整が見られる。142は内外器面ともナデ調整である。143は内器面の調整は不明であるが外器面には141と同様に底部外面までミガキが施される。144・145は底部に向かって緩やかにすぼまり、バケツ型の底部となる器形を呈する。144は外器面にミガキが見られるが、内面の調整は不明である。145は内外面ともに風化が著しい。貝殻文円筒形土器の底部と思われる。



第40図 内城跡出土縄文時代早期土器実測図5 (S=1/3)

(2) 石器

縄文時代早期に帰属する石器は、D・E・Gの各地区において検出されている。以下、器種毎にいくつかの資料を取り挙げて説明を加えたい。なお、使用石材、計測値、出土位置等の詳細については、石器計測表を参照されたい。

石鏃（第41図 146～171）

主として平面形態の差異から、打製石鏃5類と局部磨製石鏃1類に大別することができる。Ⅰ類は平面形が正三角形に近似する平基の打製石鏃で、概して小型である（146～148、169）。石材に黒曜石を用いる点も特徴としてあげられる。Ⅱ類は短身、深い抉りを施す凹基の打製石鏃である（149、150）。Ⅲ類は平面形が二等辺三角形に近似する平基の打製石鏃である（151～155、170）。Ⅳ類は凹基の打製石鏃のうち、先細りの脚部を有するものである（157～165）。Ⅴ類は凹基の打製石鏃であり、円みをおびる脚部を有する（166～168、171）。いわゆる「鏃形石鏃」の範疇に属する資料についてもこれに含める（166、167）。156は剥離面の稜線上にも研磨痕が観察されることから、打製による整形の後の研磨加工という工程が推定される局部磨製石鏃である。これらの石鏃の素材としては、通常の剥片、両極打法による剥片、楔形石器などが考えられ、整形・調整についても素材の形状をあまり変化させることなく利用する例（155、169、170）が観察されることから、その多様な生産の在り方が窺われる。

尖頭状石器（第41図 172）

172は剥片を素材とし、これに両面加工を施して整形がなされている。姫島産黒曜石を用いる点は171の石鏃と共通しており、両者のサイズを考慮すれば、この種の石鏃の未製品である可能性が指摘できる。

楔形石器（第41図 173～180）

大型品（173～176）と小型品（177～179）の2類に大別できる。173をのぞく大型品はいずれも折断面を有し、両極打法の実行途中の破損である可能性が高い。180は楔形石器が形成される過程において生産された剥片と考えられる。これらの資料の性格については、石鏃などの小型の剥片石器の素材獲得を目的としたものである可能性を第一に指摘できる。

二次加工有る剥片（第41図 181）

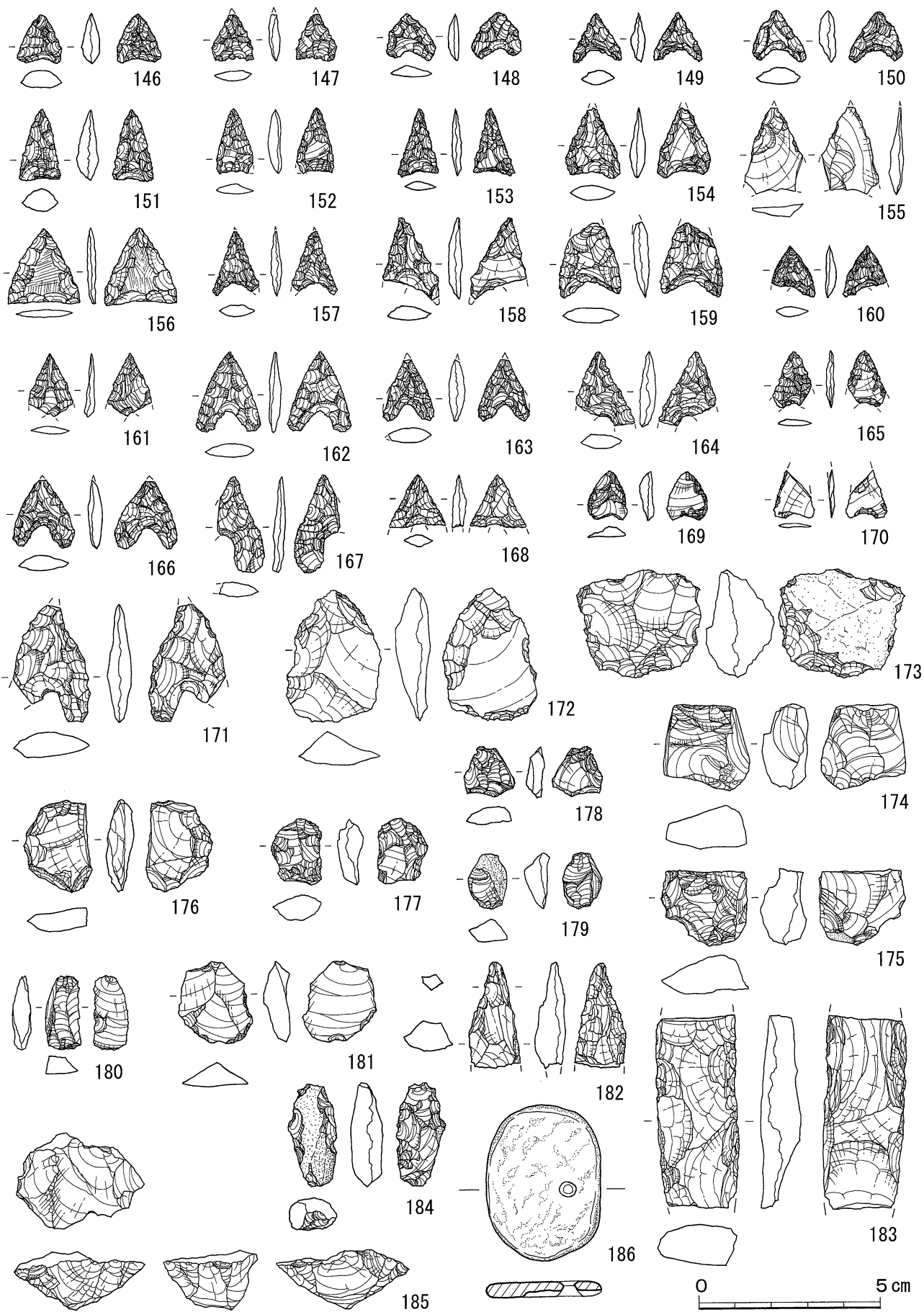
寸詰まりの小型剥片の末端部に連続するスクレイパーエッジ状の急斜度調整が観察される。搔器的な機能が想定されよう。

尖頭器（第41図 182、183）

182は両面加工を施すが、最終的な整形のための剥離は片面に集中しており、調整角は比較的急斜度を呈する。安山岩質の石材を用いるが、本地域では通常あまりみられない石質であることは注目される。器体下半部を欠損する。183は両面加工を施すが、その剥離痕の大半は階段状を呈する。石斧の範疇に含めることも可能であるが、他に出土している石斧との技術・形態的差異からここでは尖頭器と判断した。両端を欠損する。

有孔石製品（第41図 186）

風化の進行した堆積岩系の石材を用いており、その層理面からの剥落が著しい。中央よりややズレた位置に表裏両面から穿孔がなされている。こうした諸特徴から、玦状耳飾の未製品である可能性が指摘できる。



第41圖 内城跡出土縄文時代早期石器実測圖1 (S=2/3)

石斧（第42図 187～193、第43図 194～198）

資料の大半は、打剥および敲打による整形の後、部分的な研磨加工を施した局部磨製石斧である。188は表裏外面に部分的に摩滅光沢が観察される。擦痕の有無が不明瞭である為、着柄など他の研磨加工とは異なる形成要因が想定される。大型剥片を素材とする。資料の多くは器体表面に礫面を残し、大型剥片もしくは分割礫を素材とするが、円礫の形状を大きく変更することなく、刃部を作り出している資料が一定量確認される（189、190、196、198）。189は刃部に観察される研磨とは区別される摩滅が自然面部分に認められ、磨石を石斧の素材に転用した資料であると判断される。198は円礫にほとんど打剥を加えず、刃部が形成されている。197～198の小型品は刃部の狭小な点からも、他の資料との機能的差異を推定できよう。199は局部磨製石斧の製作ないし使用過程での破損に伴うものと思われる。

礫器（第43図 200～203、第44図 204～211、第45図 212、213、216～218）

いわゆるチョッパー（209、213）・チョッピングツール（216、218）のほか、多様な形態が認められる。200、201は円礫の形状を活かした整形が施されるものである。その技術・形態的特徴から、石斧との親縁性を考慮する必要があり、未製品またはリダクションの可能性が指摘される。刃部角が比較的鈍角であることも、これを裏付けよう。202～206、208は一方に礫面を残し、その礫面を打面とした剥離がほぼ全周するという特徴によりまとめられる。縁辺にツブレが観察される資料も散見される。203は部分的に研磨加工がみられる。これらの資料の多くは特定の刃部を認定しにくい、205は尖頭部を有する。209、210はやはり、礫面からの剥離により刃部が作出されるが、比較的大ぶりの剥離により鋸歯縁状のシルエットを有するものである。

石核（第41図 184、185、第46図 219、220）

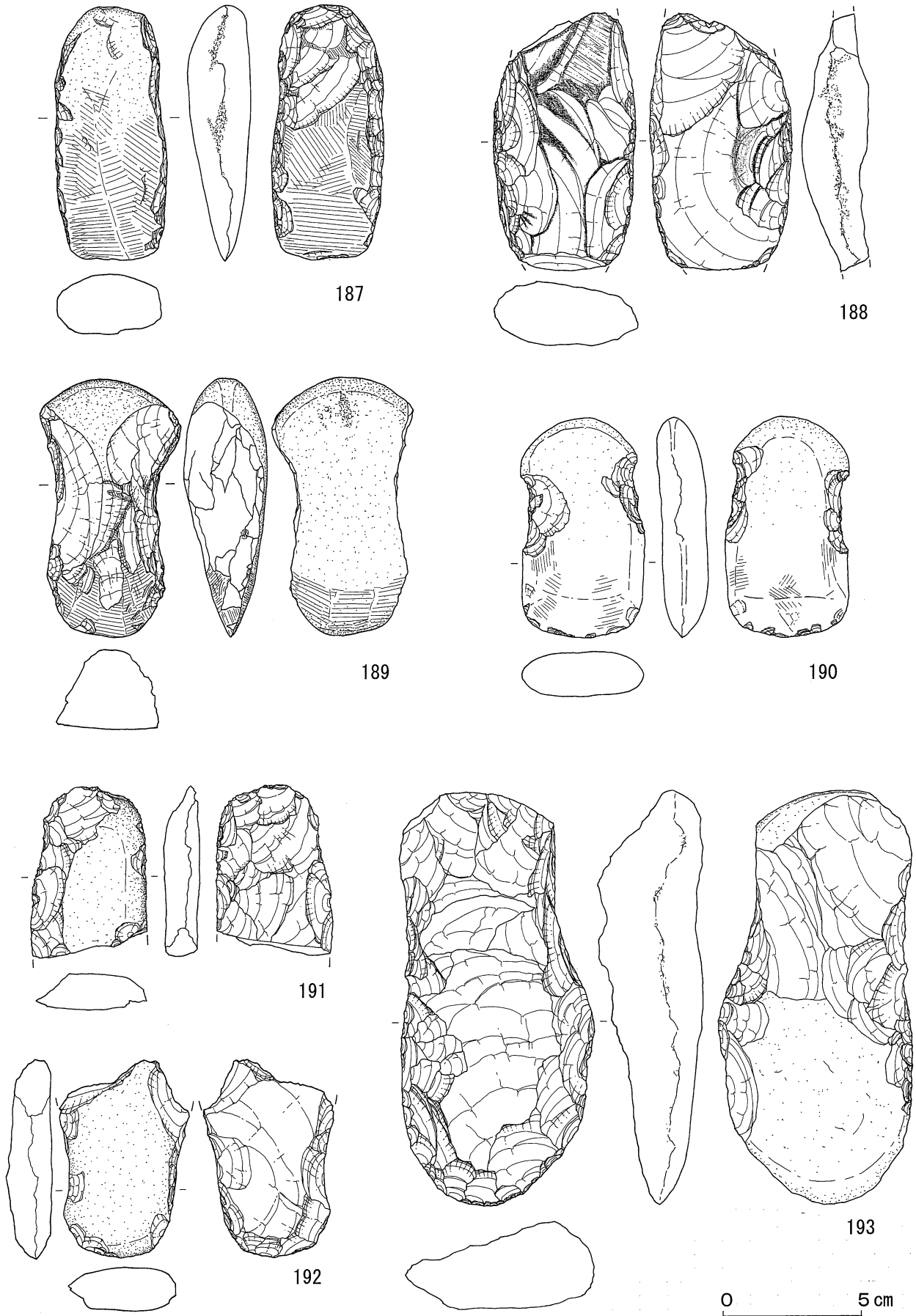
小型品（184、185）と中型品（219、220）に大別される。184は小型の剥片を素材とし、さらに小型の剥片を剥離している。獲得された剥片の用途については不明とせざるをえないが、ここでは一応石核と認定しておく。185は剥片を素材とし、その主要剥離面を打面として小型の剥片を剥離している。打面調整はおこなわれていない。獲得された剥片の供給先としてはやはり石鏃などの小型剥片石器が考えられよう。219はおよそ拳大の分割礫を素材とする。当初は分割面を打面とし、その後180°の打面転移がなされ、小型の不定形剥片が生産されたものと推定される。220は、やはり拳大程度の円礫を素材とし、219と類似した剥片剥離の行使が推定される。炉穴埋土より出土した。これらの石核から剥取された剥片類の用途については、一部は石鏃などに供給された可能性を考えることができる。

剥片（第45図 214、215）

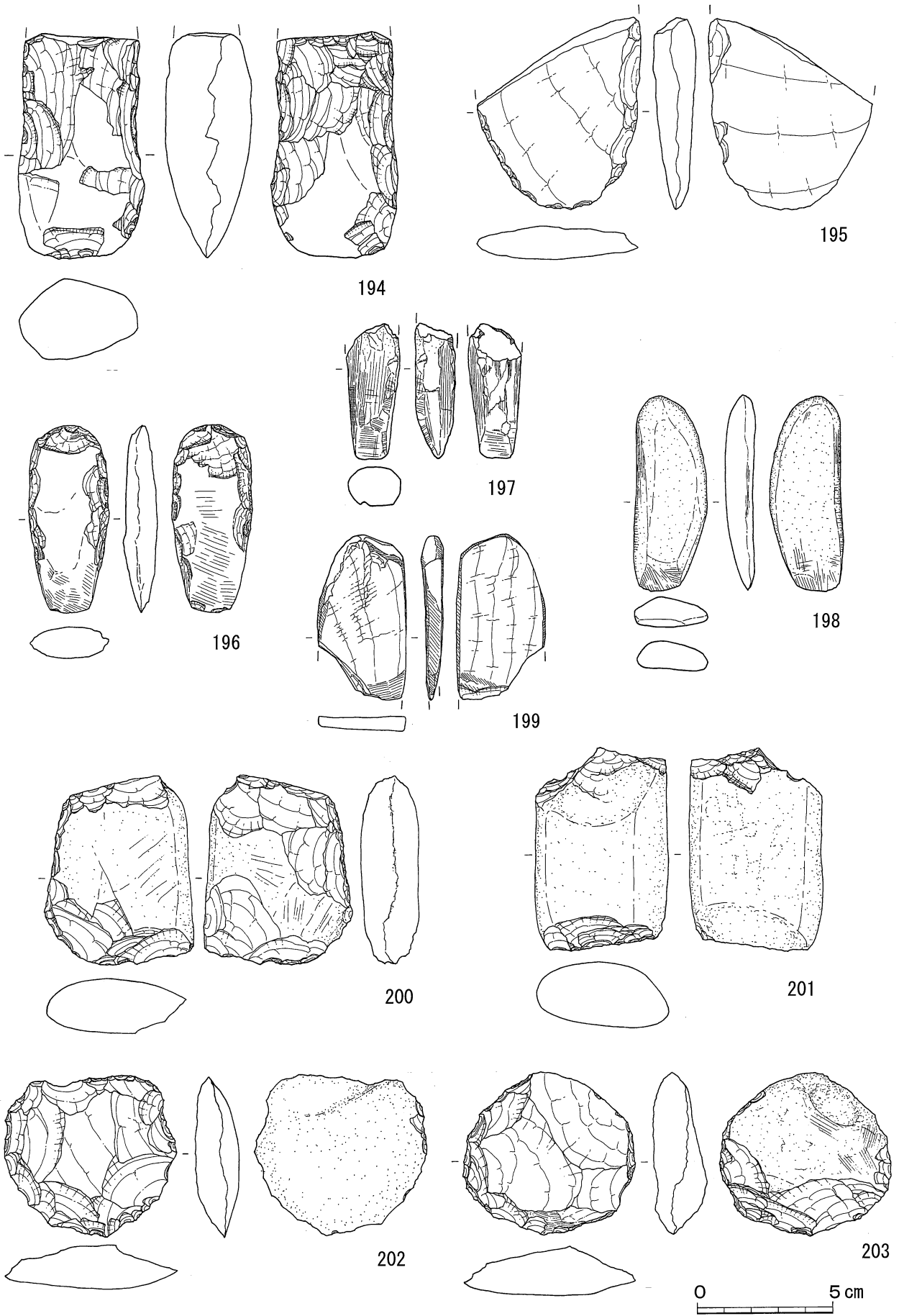
剥片、碎片類は多数出土したが、ここでは2点掲載した。215は連続する縦長剥片の剥取が想定される資料である。

磨石（第46図 221～224）

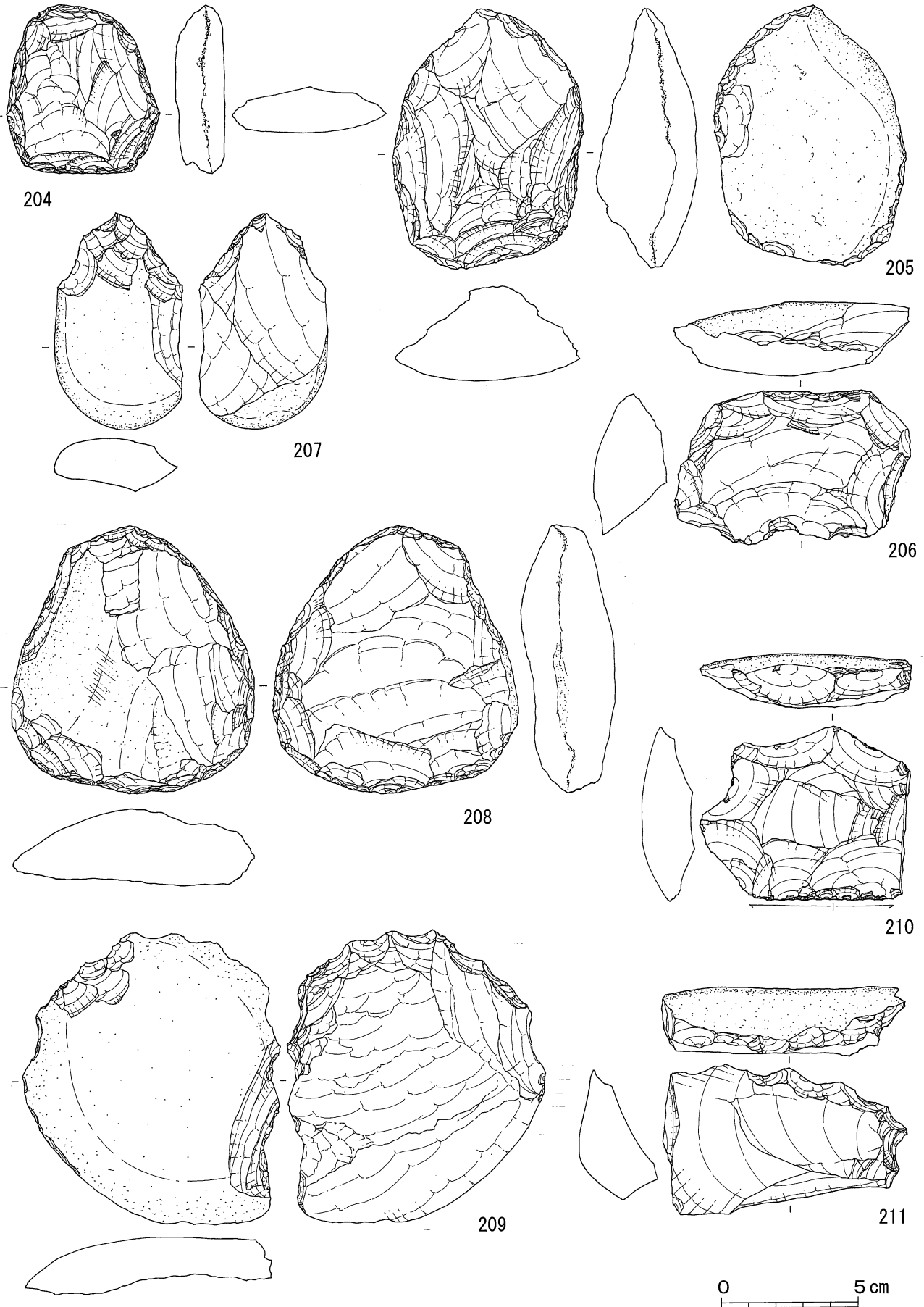
221、222は炉穴埋土から出土したものである。いずれも尾鈴酸性岩の楕円および長楕円形の円礫を素材とし、被熱によるものか、破損が著しい。両資料ともに表裏両面に磨り面が観察され、222は一方の側面にも磨り面が認められる。223は砂岩製であり、やはり表裏両面と両側面に磨り面が観察される。224は尾鈴酸性岩製で全体が強い光沢で覆われるが、明確な平坦面は存在せず、自然礫の可能性も排除できない。その場合には、磨石としての使用を予定された搬入礫の可能性も考えられる。



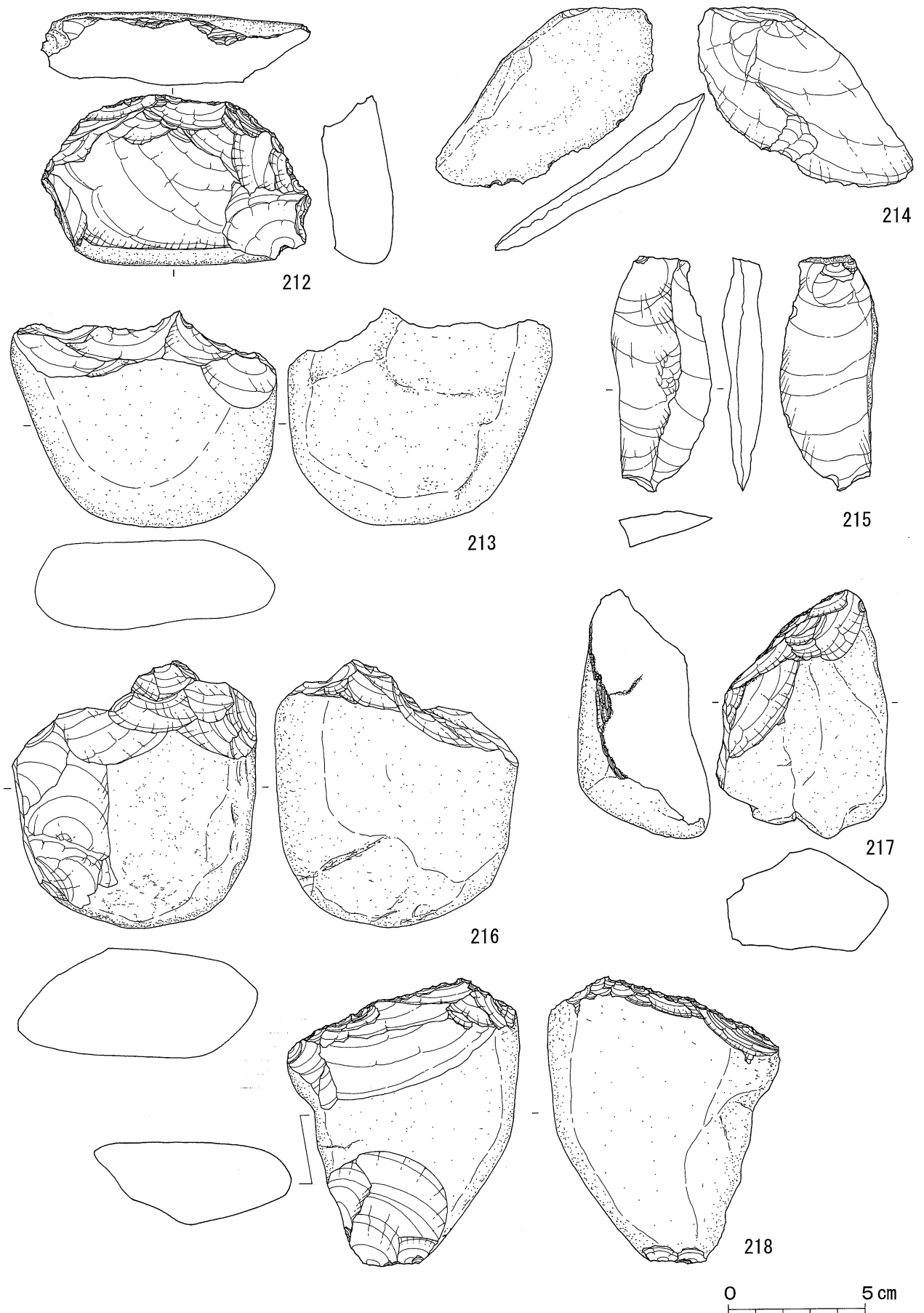
第42図 内城跡出土縄文時代早期石器実測図2 (S=1/2)



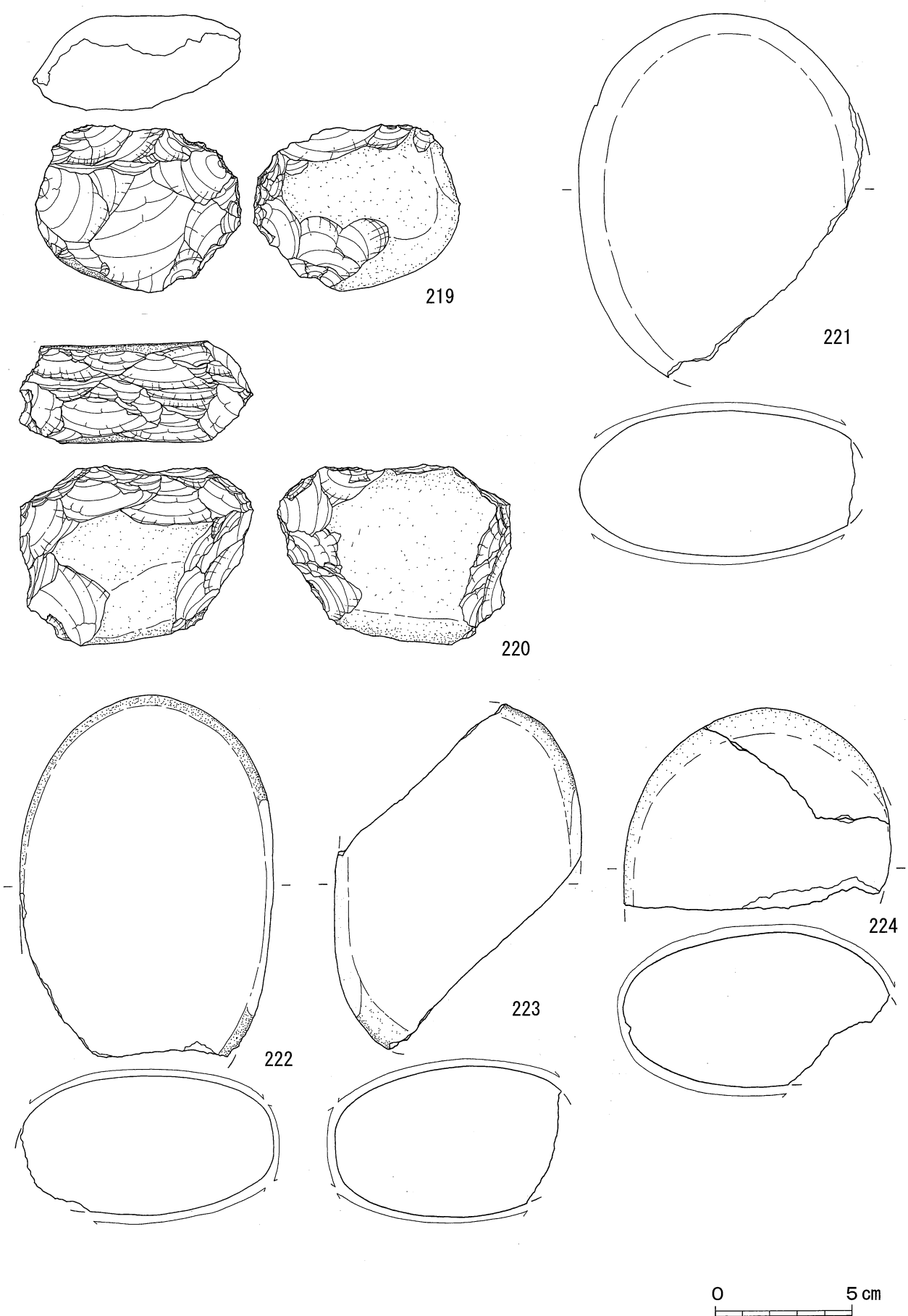
第43図 内城跡出土縄文時代早期石器実測図3 (S=1/2)



第44図 内城跡出土縄文時代早期石器実測図4 (S=1/2)



第45図 内城跡出土縄文時代早期石器実測図5 (S=1/2)



第46図 内城跡出土縄文時代早期石器実測図6 (S=1/2)

第4節 縄文時代草創期および旧石器時代の遺物

本遺跡では、いずれの調査区においても、縄文時代早期を遡るプライマリーな包含層の存在は確認されなかった。だが、縄文時代早期の遺物と混在、もしくは表土・攪乱土・遺構埋土中からの検出というかたちで、縄文時代草創期以前の所産と思しき資料をいくつか認めることができた。もとよりの限界は認識したうえで、これらの遺物のうちの一部について図化をおこない、その時間軸上の帰属について可能な限りの推定を試みつつ報告としたい。なお、使用石材、計測値、出土位置等の詳細については、石器計測表を参照されたい。

尖頭器（第47図 225、226）

225は剥片の末端部に平坦な剥離を加え、尖頭部を作り出している。一方の側縁にも背面側からの剥離痕が観察される。背面の剥離面構成からは、この資料の素材と同類の剥片が連続して剥離された様子が窺える。226は礫面を残す剥片を素材とし、背腹両面からの平坦剥離と折断により整形がなされる。両資料ともに、素材剥片の剥離軸と器体軸とが斜交する設定となること、大ぶりの整形加工により側面間の稜線がジグザグに走ることなど、いわゆる「斜軸尖頭器」に類する特徴をよく備えている。帰属年代については後期旧石器時代初頭を前後する時期が推定されよう。

へら形石器（第47図 227）

大型の幅広剥片を素材とし、その両縁を切断した後、腹面側からの剥離により整形がなされている。この二次調整は急斜度である点はナイフ形石器のブランディングと共通するが、階段状剥離が多発する様相は石斧などにみられる加工との類似も指摘できる。素材剥片の末端部を活かすかたちで刃部が設定されており、その表裏両面に光沢が観察される。この光沢が研磨加工によるものか、使用に伴う摩滅であるかについては、肉眼での判断・識別は困難である。いま述べた諸特徴から、当資料は局部磨製石斧などの器種と弁別される。所属年代については後期旧石器時代前半期との位置付けが妥当であろう。

使用痕有る剥片（第47図 228、229）

いずれの資料も図示した箇所に微細ないし不規則な剥離痕が観察され、使用痕の可能性が指摘される。

局部磨製石斧（第47図 230）

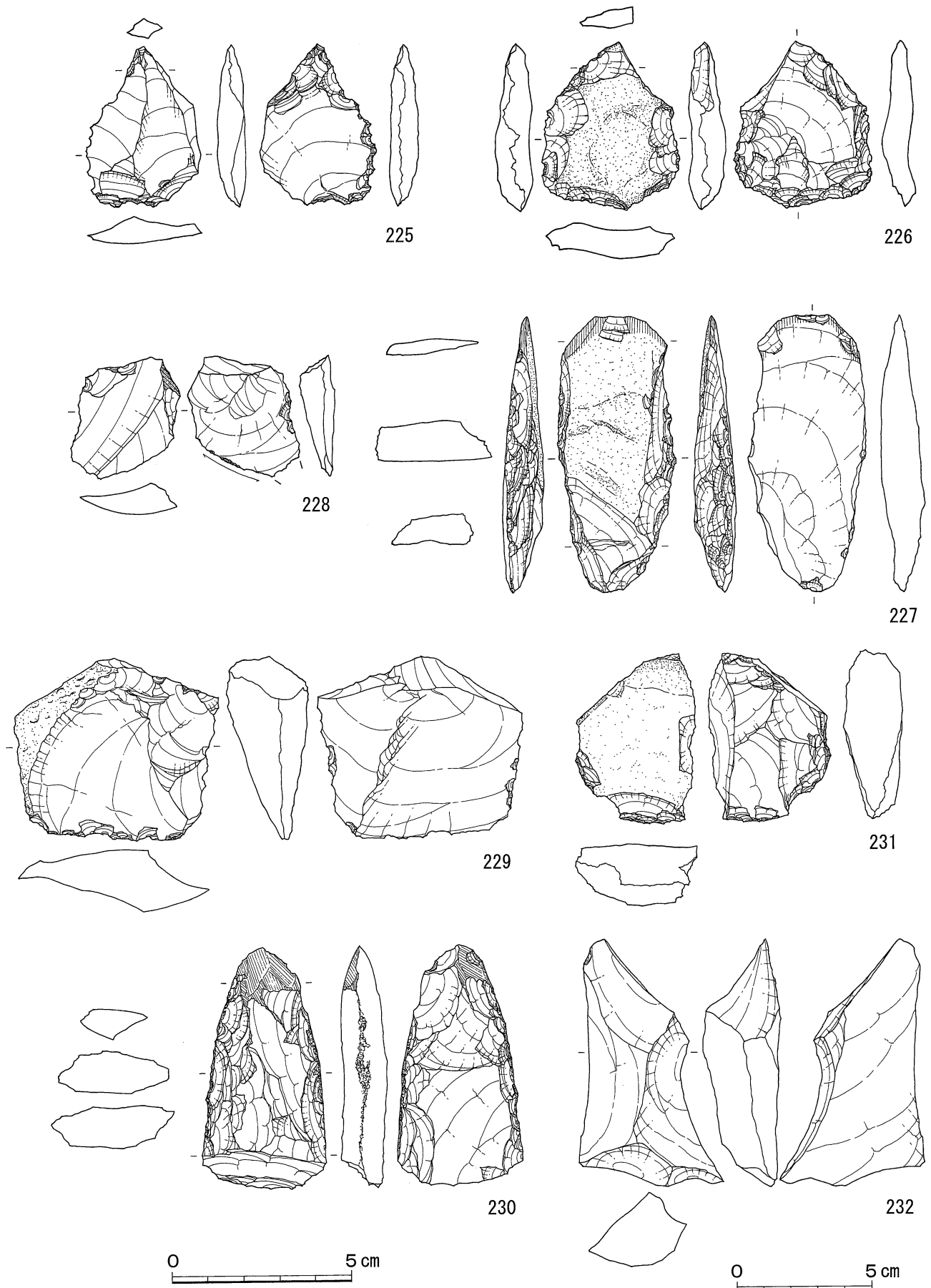
打製・敲打調整の後、研磨加工が施されている。断面形が左右非対称である点、研磨範囲とこれに接する剥離面間の切り合い関係などを考慮するとリダクションがおこなわれた可能性が高い。縄文時代草創期に帰属するものと思われる。

石核（第47図 231、232）

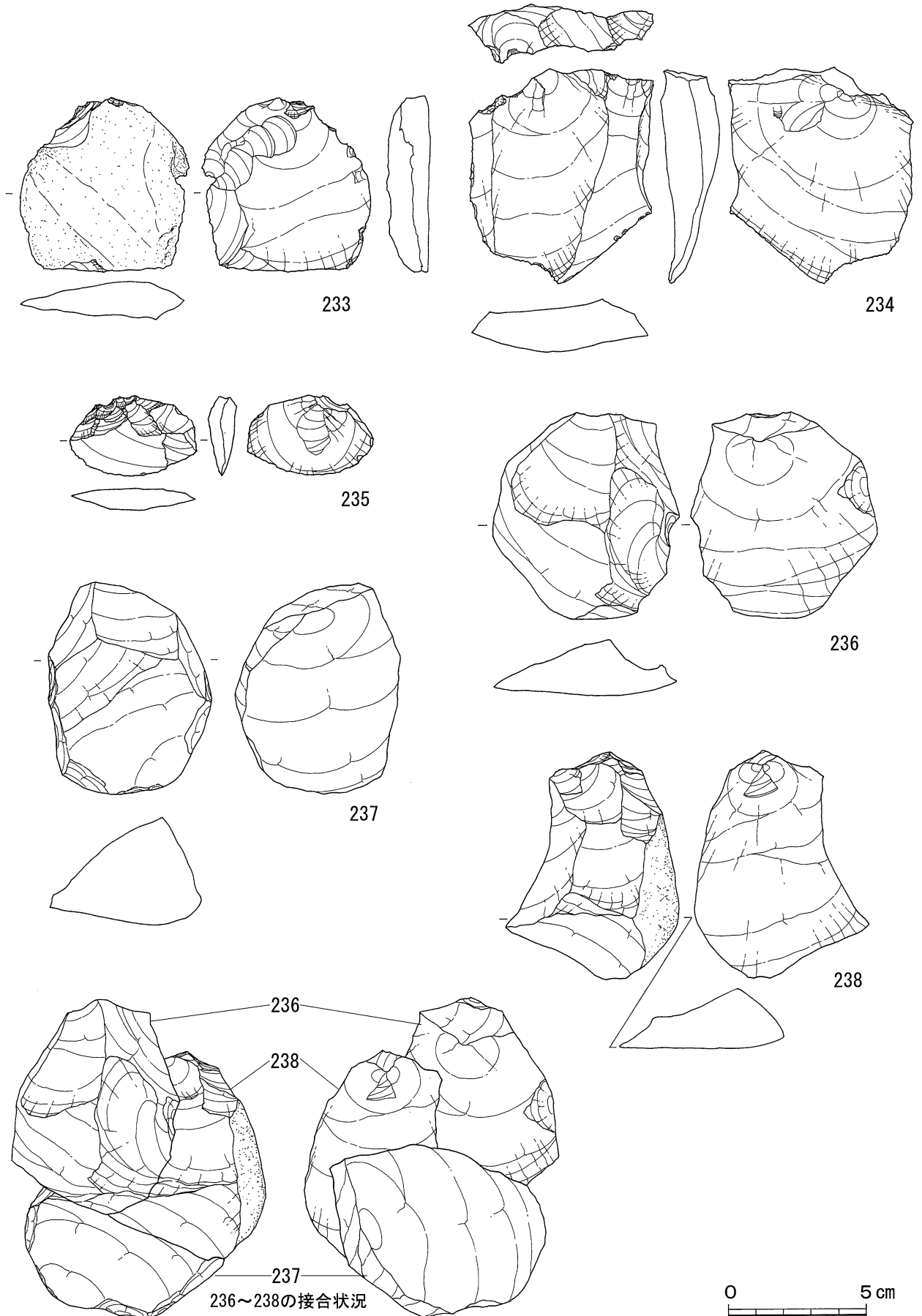
231は227（へら形石器）と同一母岩と考えられる資料である。

剥片（第48図 233～238）

これらの資料は看取される剥片剥離技術上の特徴もさることながら、その使用石材も考慮して縄文時代早期以降の石器群と弁別している。234は調整打面から連続して石刃に類する剥片が獲得された様子が窺われる。236～238は接合資料である。236、238が剥取された後、打面転移がなされ237が獲得されている。各資料の背面に観察される剥離面の構成からも後期旧石器時代に通有な剥片剥離工程の存在が推定されるが、厳密な帰属時期に関してはナイフ形石器などの指標的器種の出土をみてもならず、判断材料に乏しい。



第47図 内城跡出土縄文時代草創期および旧石器時代石器実測図1 (S=2/3、231、232はS=1/2)



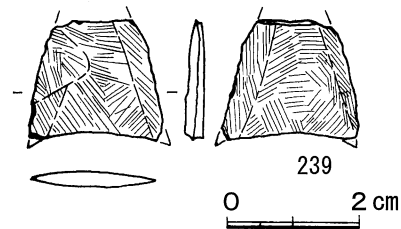
第48図 内城跡出土縄文時代草創期および旧石器時代石器実測図2 (S = 1 / 2)

第5節 その他の時代の遺物

弥生時代の遺物（E区出土）、古墳時代の遺物（G区出土）、近世以降の遺物（G区表面採集）をこの節で一括して取り扱う。

弥生時代の遺物（第49図 239）

239はE区で出土した弥生時代の磨製石鏃である。先端部が欠損しているが、基部に浅い抉れが認められる。石材は赤色頁岩で明緑灰色を呈する。重量は11.1g、最大肥厚約2.3mmである。

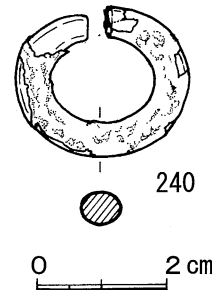


第49図 E区出土磨製石鏃実測図（S = 2 / 3）

古墳時代の遺物（第50図 240）

240はG区の曲輪拡張に伴う造成土中から出土した銅芯銀貼の耳環である。最大外径2.63cm、同軸で内径1.58cm、重量10.4gを計る。銀の被膜層が一部剥離している。

古墳時代の遺物はこの耳環が一点のみであるが、造成土中から出土したことから、地形の改変を受ける以前に付近に古墳時代の遺構が存在した可能性を指摘しておきたい。



第50図 G区出土耳環実測図（S = 2 / 3）

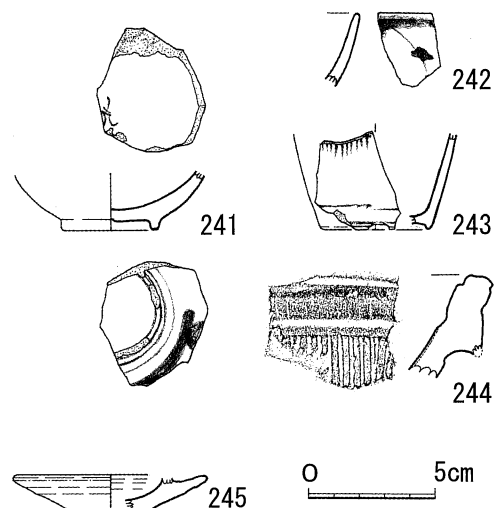
近世以降の遺物（第51図 241～245）

241～243は肥前系の染付碗である。

241は見込み部分に梵字文が描かれ、外面には高台外周面に1条、体部下位に2条の界線がめぐる。高台内面まで施釉される。242は口縁部で梅花文が描かれる。呉須の発色があまり良くない。243は施釉の状態から判断して袋物の徳利もしくは花瓶の類であると思われる。切高台で3条の界線を施す。

244は明石・堺系の播鉢の口縁部である。口縁部外面から同内面の端部まで施釉する。内面には4条を1単位とする搔き目が見られる。

245は瀬戸系の灯明皿である。底部には糸切りによる切り離しの痕が認められ、体部には轆轤成形の際の調整痕が明瞭に残る。



第51図 G区表面採集近世陶磁器実測図（S = 1 / 3）

第3表 遺物観察表1

遺物 番号	種別	器種・ 部位	出土 位置	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色 調		胎 土 の 特 徴	備 考
				口径	底径	器高	外 面	内 面	外 面	内 面		
1	土師器	坏 口縁～底部	G区 SE2	9.0	6.9	2.2	回転ナデ、糸切り底	回転ナデ	橙	にぶい 橙	1mm以下の微細赤褐色粒	
2	土師器	坏 胴部～底部	G区 SE2		7.0		回転ナデ、糸切り底	回転ナデ	橙	浅黄橙	1mm以下の赤褐色粒、微細褐色粒、 鉱物粒	
3	土師器	坏 胴部～底部	G区 SE2		7.6		回転ナデ、糸切り底	回転ナデ	橙	にぶい 橙	1mm以下の赤褐色粒、微細褐色粒、 鉱物粒	
4	白磁	碗 胴部～底部	G区 SE3		6.1		施釉、貫入、工具による ケズリ	印花、片切彫りによる圏 線	灰白	灰白	精良	
5	陶器	播鉢 胴部	G区 SE1				横方向のナデ	掻き目 (1単位8条)	灰褐	にぶい 赤褐	2mm以下の灰色砂粒	備前
6	陶器	瓶 胴部～底部	G区 SE1				縦横の粗なナデ	横方向のナデ	褐灰	褐灰	4mm以下の灰色砂粒、6mm以下の灰 白色砂粒	備前
7	陶器	碗 口縁～胴部	G区 SE1				施釉	施釉	にぶい 褐	オリブ黒	精良	天目茶碗
8	陶器	瓶 胴部上位	G区 SE1				ハケ目、粗なナデ	斜方向のナデ、ハケ目	暗灰黄	灰オリブ	5mm以下の白色砂粒	
9	陶器	瓶 胴部下位	G区 SE1				縦横の粗なナデ	横方向のハケ目	暗灰黄	灰オリブ	6mm以下の白色砂粒	
10	土師器	坏 口縁～底部	D区 I層	7.5	4.9	1.4	回転ナデ、糸切り底	回転ナデ	にぶい 黄橙	橙	1mm以下の茶褐色粒	
11	土師器	坏 口縁～底部	E区 表探	9.1	6.4	1.5	回転ナデ、糸切り底	回転ナデ	にぶい 橙	橙	1mm以下の赤褐色粒、微細な光沢粒	
12	土師器	坏 口縁～底部	E区 SA1 埋土中	8.4	5.7	1.6	横ナデ、糸切り底	回転ナデ	にぶい 橙	にぶい 橙	2mm以下の赤褐色粒	
13	土師器	坏 口縁～底部	E区 SA1 埋土中	8.2	5.4	1.5	横ナデ、糸切り底	回転ナデ	橙	橙	2mm以下の赤褐色粒	
14	土師器	坏 胴部～底部	G区 III層		6.2		回転ナデ、糸切り底	回転ナデ	橙	橙	微細茶褐色粒	
15	土師器	坏 口縁～底部	G区 III層	9.8	6.4	2.0	回転ナデ、糸切り底	回転ナデ	橙	橙	0.5mm以下の灰色粒	
16	土師器	坏 口縁～底部	E区 IV層	13.1	7.4	2.2	回転ナデ、糸切り底	回転ナデ	にぶい 橙	にぶい 橙	2mm以下の赤褐色粒、微細な光沢粒	
17	土師器	坏 口縁～底部	G区 表探	13.6	7.2	3.1	回転ナデ、糸切り底	回転ナデ	にぶい 橙 黄灰	橙 灰黄	0.5mm以下の黒色粒	
18	土師器	坏 口縁～胴部	E区 SA1 埋土中	14.2	8.8	3.1	回転ナデ、糸切り底	回転ナデ	橙	橙	1mm以下の赤褐色粒	
19	土師器	坏 口縁～底部	D区 I層	13.6	7.9	2.8	回転ナデ、糸切り底	回転ナデ	橙	橙	1.5mm以下の赤褐色粒	
20	土師器	坏 口縁～底部	E区 SA1 埋土中	14.4	7.9	3.0	回転ナデ、糸切り底	回転ナデ	橙	橙	微細赤褐色粒	
21	土師器	坏 胴部～底部	G区 III層		7.3		回転ナデ、糸切り底	回転ナデ	橙	橙	微細から1mm大の赤褐色粒、微細黒 色粒	
22	土師器	坏 胴部～底部	G区 表探		7.0		回転ナデ、糸切り底	工具による回転ナデ	にぶい 黄褐	灰黄褐 橙	きめ細かな砂粒	
23	土師器	坏 胴部～底部	G区 表探		7.3		回転ナデ、糸切り底	回転ナデ	灰黄褐	灰黄褐	微細赤褐色粒	
24	土師器	坏 胴部～底部	G区 III層		7.5		回転ナデ、糸切り底	回転ナデ	にぶい 黄橙	黄橙	微細赤褐色粒	
25	土師器	坏 胴部～底部	G区 III層		6.5		回転ナデ、糸切り底	回転ナデ	にぶい 橙	にぶい 橙	0.5mm以下の灰色粒、光沢のある微 細鉱物粒	
26	土師器	坏 胴部～底部	G区 III層		7.4		回転ナデ、糸切り底	回転ナデ	橙	橙	微細黒色粒、微細無色光沢粒、微細 乳白色粒	
27	土師器	坏 底部	G区 III層		6.8		回転ナデ、糸切り底	回転ナデ	橙	橙	微細な鉱物粒	
28	土師器	坏 底部	G区 III層		7.2		回転ナデ、糸切り底	回転ナデ	橙	橙	1.5mm以下の暗赤褐色粒	
29	瓦器	埴 底部	G区 III層		9.2		回転ナデ	回転ナデ	暗青灰	暗青灰	精良	
30	陶器	おろし皿 口縁～体部	G区 III層				露胎、回転ナデ	ヘラによる掻き目、施釉	にぶい 黄	オリブ黒	精良	瀬戸系
31	染付	碗 胴部下位～底部	G区 表探				施釉	施釉	青灰	青灰	精良	碁笥底
32	青磁	碗 底部	G区 表探		5.7		施釉、高台内露胎	印花 (草花文)	浅黄	青灰	精良	
75	土師器	高台付埴 底部	E区 SA1		5.9		回転ナデ	ナデ	明黄褐	にぶい 黄橙	2mm以下の赤褐色粒	
76	土師器	高台付埴 底部	E区 SA1		6.2		回転ナデ	回転ナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	精良	
77	土師器	高台付埴 底部	E区 SA1		7.2		回転ナデ	回転ナデ、指頭もしくは ヘラ状工具による圧痕	黒褐	黒	1mm以下の褐色粒	黒色土器
78	土師器	甕 口縁	E区 SA1				横ナデ	横ナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	6mm以下の灰色粒、5mm大の赤褐色 粒、1mm以下の黒色光沢鉱物粒	

第4表 遺物観察表2

遺物番号	種別	器種・部位	出土位置	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外 面	内 面	外 面	内 面		
79	土師器	甕口縁	E区 SA1				横ナデ	横ナデ	黄灰	黒	6mm大の褐色粒、2mm以下の黄褐色粒	
80	土師器	甕底部	E区 SA1		8.8		横ナデ、ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1~4mm大の赤褐色、褐色、灰色粒	
81	土師器	甕胴部	E区 SA1				格子目タタキ	横方向のナデ	にぶい黄橙	暗灰	4mm以下のにぶい黄褐色粒、2mm以下の暗赤褐色粒、1mm以下の無色光沢粒	
82	土師器	甕胴部	E区 SA1				格子目タタキ	横方向のナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	3mm以下の灰白色粒、2mm以下の灰色鈍光粒、3mm以下の暗赤褐色粒	
83	縄文土器	深鉢口縁	E区 IV層				連続押圧刻目 (口唇部)、斜方向・横方向の貝殻復縁による条痕文	斜位・横位の貝殻条痕	灰黄	灰黄褐色	1mm以下の淡黄色・乳白色粒	岩本式
84	縄文土器	深鉢口縁	G区 V層				棒状工具による連続刺突文、押圧刻目、横方向のナデ、ナデ (口唇部)	横方向のナデ	にぶい黄橙	褐色	2mm以下の灰白色粒、0.5mm以下の無色透明粒	
85	縄文土器	深鉢口縁~胴部	E区 IV層				縦位の貝殻復縁による連続押圧文、貝殻復縁によるやや幅広い条痕文	粗いナデ	橙	橙	4mm以下の灰白色粒、3mm以下の褐色灰色粒、0.5mm以下の黒色鉱物粒	
86	縄文土器	深鉢口縁	E区 IV層				貝殻復縁による連続押圧文、横方向の貝殻復縁条痕文のあとナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	3mm以下の灰白色粒、0.5mm以下の無色透明粒、長石の粒	
87	縄文土器	深鉢口縁	E区 IV層				貝殻復縁による連続刺突文、ミガキに近い横ナデ (口唇部)、斜方向の貝殻復縁による条痕文	ナデ? (風化が著しい)	灰黄褐色	灰黄褐色	1mm以下の灰白色粒	87と同一個体か?
88	縄文土器	深鉢口縁~胴部	E区 IV層				貝殻復縁による連続刺突文、ミガキに近い横ナデ (口唇部)、斜方向の貝殻復縁による条痕文	縦方向のナデ	にぶい黄橙	褐色	0.5mm以下の灰白色粒	88と同一個体か?
89	縄文土器	深鉢口縁	G区 V層				貝殻復縁による連続刺突文、貝殻復縁による条痕文、ナデ (口唇部)	横方向のナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm以下の灰白色・白色粒、0.5mm以下の無色透明粒	
90	縄文土器	深鉢口縁~胴部	G区 V層				貝殻復縁による連続刺突文、斜方向の貝殻復縁による条痕文、横ナデ (口唇部)	丁寧なナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1.5mm以下の半透明乳白色粒、1.5mm以下の乳白色粒、微細黒色粒	穿孔
91	縄文土器	深鉢口縁	G区 V層				貝殻復縁による連続刺突文、斜方向の貝殻復縁による条痕文、ナデ (口唇部)	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	微細無色透明粒	
92	縄文土器	深鉢口縁	G区 SP5				斜方向の貝殻復縁による条痕文、二列の連続刺突文、ミガキ (口唇部)	ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm以下の淡黄色粒、1mm以下の灰白色粒	
93	縄文土器	深鉢口縁	G区 V層				横方向の貝殻復縁による条痕文、横位の貝殻復縁による押し文、ナデ (口唇部)	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm以下の黒色・灰黄色粒	穿孔
94	縄文土器	深鉢口縁	G区 V層				斜方向の貝殻復縁による条痕文、横位の貝殻復縁による条痕文、ミガキに近い横ナデ (口唇部)	丁寧なナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm以下の黒色粒	
95	縄文土器	深鉢口縁~胴部	G区 V層	21.4			斜方向の貝殻復縁による条痕文、横方向のミガキ (口唇部)	横方向のミガキ (口唇部付近)、斜方向のミガキ (口唇部付近以下)	浅黄	橙	1mm以下の無色透明粒、0.5mm以下の灰白色粒	
96	縄文土器	深鉢口縁~胴部	G区 SP7	17.0			斜方向の貝殻復縁による条痕文、煤付着、横ナデ (口唇部)	ナデ	浅黄	浅黄	微細鉱物粒・無色光沢粒、微細白色粒、淡黄色・赤褐色粒	
97	縄文土器	深鉢口縁	G区 V層				斜方向の貝殻復縁による条痕文、横ナデ (口唇部)	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	微細黒色粒・無色光沢粒、1mm以下の白色・黄褐色粒	
98	縄文土器	深鉢口縁	G区 V層				斜方向の貝殻復縁による条痕文、横ナデ (口唇部)	丁寧なナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm以下の淡黄色粒	
99	縄文土器	深鉢口縁~胴部	E区 IV層				斜方向の貝殻復縁による条痕文、横方向のミガキ (口唇部)	ミガキ	にぶい黄橙	橙	1mm以下の無色透明粒、1mm以下の黒色・褐色粒	
100	縄文土器	深鉢口縁~胴部	E区 IV層				横方向の貝殻復縁による条痕文、指おさえ、横方向のミガキ (口唇部)	ミガキ	橙	橙	1mm以下の白色・茶褐色粒、1mm以下の透明粒	
101	縄文土器	深鉢口縁~胴部	E区 IV層				横方向の貝殻復縁による条痕文、部分的にナデ、ミガキ (口唇部)	口縁部付近を横方向のミガキ、以下を斜方向のミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm以下の無色透明粒	
102	縄文土器	深鉢口縁~胴部	G区 V層				横方向の貝殻復縁による条痕文、横ナデ (口唇部)	横方向のナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1.5mm以下の白色粒、1.5mm以下の白色半透明粒、微細黒色粒	
103	縄文土器	深鉢口縁~胴部	G区 V層				横・斜方向の貝殻復縁による条痕文、横ナデ (口唇部)	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1.5mm以下の黒色粒、2mm以下の白色半透明粒、1mm以下の無色光沢粒	
104	縄文土器	深鉢口縁	G区 V層				横方向の貝殻復縁による条痕文、横ナデ (口唇部)	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1.5mm以下の乳白色粒、2mm以下の白色半透明粒、1mm以下の無色光沢粒	
105	縄文土器	深鉢口縁	E区 IV層				横方向の貝殻復縁による条痕文	風化が著しく不明	にぶい黄橙	にぶい黄橙	微細白色・黒色粒	
106	縄文土器	深鉢口縁	E区 IV層				横・斜方向の貝殻復縁による条痕文、ナデ (口唇部)	丁寧なナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm以下のにぶい黄褐色・灰白色粒	
107	縄文土器	深鉢口縁	E区 IV層				やや斜方向の貝殻復縁による条痕文、ナデ (口唇部)	風化が著しく不明	灰褐色	にぶい黄橙	3mm以下の白色粒、微細光沢粒	
108	縄文土器	深鉢口縁	E区 IV層				横方向の貝殻復縁による条痕文のあと縦方向の貝殻復縁による条痕文、ナデ (口唇部)	丁寧なナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm以下のにぶい黄褐色・灰白色粒	
109	縄文土器	深鉢口縁	E区 IV層				縦方向の貝殻復縁による一部波状の条痕文のあと横方向の貝殻復縁による条痕文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm以下の白色粒	
110	縄文土器	深鉢口縁	E区 IV層				横方向の貝殻復縁による条痕文、横方向のナデ (口唇部)	斜方向のナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm以下の灰白色粒	
111	縄文土器	深鉢口縁	E区 IV層				横方向の貝殻復縁による条痕文、縦方向の貝殻復縁による条痕文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	微細乳白色粒	
112	縄文土器	深鉢口縁	E区 IV層				連続刻目 (口唇部)、楔形貼付突帯、横位の貝殻復縁刺突文 (口縁端部)、縦位の貝殻復縁刺突文 (胴部)	粗い横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1.5mm以下の灰白色粒、1.5mm以下の無色光沢粒	知覧式
113	縄文土器	深鉢胴部	E区 IV層				縦位の貝殻復縁による連続刺突文、斜方向の貝殻復縁による条痕文	縦方向のケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	5mm大の褐色粒、2mm以下の透明鉱物粒、1mm以下の黒色粒	知覧式
114	縄文土器	深鉢胴部	E区 IV層				斜方向の貝殻復縁による条痕文、縦位の貝殻復縁による刺突文	粗いナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm以下の灰色粒、1mm以下の透明な鉱物粒	知覧式

第5表 遺物観察表3

遺物番号	種別	器種・部位	出土位置	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
115	縄文土器	深鉢 胴部	E区 IV層				縦位の貝殻復縁刺突文	縦方向のナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm以下の無色光沢粒、6mm以下の淡黄色粒	知覧式
116	縄文土器	深鉢 胴部	E区 IV層				縦位の貝殻復縁による連続刺突文	風化が著しく調整不明	橙	にぶい黄褐	1mm以下の褐色粒、1mm以下の光沢のある白色粒、1mm以下の黒色粒	知覧式
117	縄文土器	深鉢 胴部	E区 IV層				横方向の貝殻復縁による条痕文、縦位の貝殻復縁による刺突文	粗いナデ	にぶい赤褐	褐	1mm以下の灰色・褐色粒、1mm以下の透明な鉱物粒	知覧式
118	縄文土器	深鉢 胴部	E区 II層				斜方向の貝殻復縁による条痕文、縦位の貝殻復縁による連続刺突文	縦方向のケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	3mm以下の褐色粒、1mm以下の黄褐色粒、1mm以下の金雲母粒	知覧式 角筒土器
119	縄文土器	深鉢 底部	E区 IV層				縦位の連増押圧刻目 (底部側面)、斜方向のナデ (底部外面)	ナデ?	橙	にぶい黄橙	3mm以下の光沢のある鉱物粒、1mm以下の乳白色粒	知覧式 角筒土器
120	縄文土器	深鉢 口縁	D区 II層				貝殻復縁による羽状文、横ナデ (口唇部)	横ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	1mm以下の金雲母粒、1mm以下の白色・灰白色粒、微細黒色粒	下刻式
121	縄文土器	深鉢 口縁	D区 II層				横位の貝殻復縁による4条の刺突文、ヘラ状工具による縦位の刻目、縹杉文、横ナデ (口唇部)	ミガキ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	微細白色粒	下刻式
122	縄文土器	深鉢 口縁	D区 II層				横位の貝殻復縁による3条の刺突文、ヘラ状工具による縹杉文、横ナデ (口唇部)	ミガキ	明黄褐 にぶい褐	にぶい黄褐	微細白色粒	下刻式
123	縄文土器	深鉢 口縁	D区 I層				横位の貝殻復縁による3条の刺突文、ヘラ状工具による2段以上の縹杉文、横ナデ (口唇部)	横方向のナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	微細乳白色粒、微細黒色光沢粒、1.5mm以下の無色半透明粒	下刻式
124	縄文土器	深鉢 口縁～胴部	E区 IV層	25.8			縹杉文 ナデ (口唇部)、横方向の貝殻復縁による刺突文、縦位の貝殻復縁による鋸歯状刺突文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm以下の金雲母粒、4mm以下の灰白色粒、3mm以下の浅黄褐色粒	下刻式
125	縄文土器	深鉢 口縁	E区 表採				貝殻復縁による複合鋸歯文、ナデ (口唇部)	ナデ	にぶい赤褐	にぶい褐	2mm以下の金雲母粒、1mm以下の乳白色・無色・褐色粒	下刻式
126	縄文土器	深鉢 胴部	D区 II層				横位・斜位の貝殻復縁による鋸歯文	横方向のナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	2mm以下の乳白色粒、3mm以下の金雲母粒、1.5mm以下の黒色粒	下刻式
127	縄文土器	深鉢 胴部	D区 I層				横位の貝殻復縁刺突文	ナデ	にぶい橙	にぶい黄褐	2.5mm以下の金雲母粒、1mm以下の黒色光沢粒、微細赤褐色粒	下刻式
128	縄文土器	深鉢 胴部～底部	E区 表採				貝殻復縁による鋸歯文	不定方向の粗いナデ	橙	にぶい黄橙	1mm以下の黒色粒	下刻式
129	縄文土器	深鉢 口縁～頸部	G区 V層				ナデのあと羽状の沈線文、斜位・縦位押圧刻目 (口唇部)、刻目突帯2条	横ナデか	にぶい黄橙 黄灰	にぶい黄橙 にぶい黄橙	2mm以下の浅黄色・灰白色粒	平格式 波状口縁
130	縄文土器	深鉢 口縁	G区 V層				連続刺突文、沈線文、押圧刻目	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	2mm以下の白色粒	平格式
131	縄文土器	深鉢 口縁	G区 V層				列点文、押圧刻目 (口唇部内外)、渦状の沈線文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄褐	2mm以下の浅黄色・黒色粒、2mm以下の金雲母粒	平格式 波状口縁
132	縄文土器	壺 頸部	G区 V層				複合鋸歯文 (3条ないし4条の沈線と2条の押引文)	ナデ	橙	にぶい黄橙	1.5mm以下の金雲母粒、0.5mm以下の淡黄色粒	平格式 波状口縁
133	縄文土器	深鉢 頸部～胴部	G区 V層				縹系文、結節縄文	ナデ	黄褐	にぶい黄	1mm以下の乳白色粒、光沢のある透明粒、微細黒色粒	平格式
134	縄文土器	深鉢 胴部	G区 V層				縹系文、羽状文、結節縄文	粗いナデ	橙	にぶい黄橙	0.5mm以下の淡黄色・浅黄色の粒	平格式
135	縄文土器	深鉢 胴部	G区 V層				斜方向の縹系押圧文	貝殻復縁による条痕文のあと横ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	1mm以下の金雲母粒、1mm以下の透明・淡黄色粒	
136	縄文土器	深鉢 口縁	D区 II層				横位の山形押型文、連続押圧刻目 (口縁部内面)、ナデ	横位の山形押型文	橙	橙	3mm以下の褐色粒、2mm以下の灰白色粒	押型文 土器
137	縄文土器	深鉢 口縁	D区 II層				縦位の山形押型文	横方向のナデ	明赤褐	明赤褐	1mm以下の灰色・灰白色・褐色粒、0.5mm以下の黒色鉱物粒	押型文 土器
138	縄文土器	深鉢 胴部	G区 V層				山形押型文	縦方向のナデ	赤褐	にぶい褐	0.5mm以下の無色透明粒	押型文 土器
139	縄文土器	深鉢 口縁～胴部	G区 V層				斜方向の槽田押型文、丁寧なナデ (口唇部)	丁寧なナデ	にぶい褐	にぶい褐	1mm以下の金雲母粒、1mm以下の透明・灰白色・淡黄色粒	押型文 土器
140	縄文土器	深鉢 口縁～胴部	E区 IV層				風化気味で調整不明、ナデ (口唇部)	横方向のナデ	にぶい黄橙	灰黄褐 灰白	1.5mm以下の淡黄色・灰白色粒、1mm以下の透明粒	無文土器
141	縄文土器	深鉢 胴部～底部	G区 SP12	3.7			縦方向のミガキ、ていねいなナデ (底部)	ナデ、指おさえ	にぶい黄橙	灰黄褐	2mm以下の白色粒、1mm以下の黒色粒	
142	縄文土器	深鉢 底部	E区 IV層				風化気味で調整不明	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm以下の茶褐色・乳白色粒、0.5mm以下の黒色粒、1.5mm以下の白色半透明粒	
143	縄文土器	深鉢 底部	E区 IV層	3.6			ナデのあと縦方向のミガキ	風化が著しく調整不明	浅黄	黄灰	1mm以下の乳白色粒、1.5mm以下の無色透明光沢粒	
144	縄文土器	深鉢 底部	G区 V層				ミガキ、ナデのあと一部ミガキ (底部外面)	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	1mm以下の黒色粒、微細な白色粒	
145	縄文土器	深鉢 底部	E区 IV層	6.9			ナデ? (風化気味)	風化が著しく調整不明	橙	橙	微細黒色粒、微細乳白色粒	
241	染付	碗 底部	G区 表採	3.8			高台内面まで施釉、界線、梅樹文?	施釉、梵字文	灰白	灰白	精良	肥前系
242	染付	碗 口縁	G区 表採				施釉、梅花文、界線	施釉	灰白	灰白	精良	肥前系
243	染付	徳利または瓶 体部下位～底部	G区 表採				施釉、五月雨文、界線、切高台	無釉	灰白		精良	肥前系
244	陶器	播鉢 口縁	G区 表採				横位の沈線と凹線	横位の沈線、4条1単位の掻き目	にぶい赤褐	にぶい赤褐	精良	明石・堺系
245	陶器	灯明皿 底部	G区 表採	3.4			ケズリ、露胎、回転ナデ	回転ナデ	灰白	灰白		

第6表 石器計測表 1

遺物 番号	出土位置	層 位	器 種	計 測 値				石 材	備 考
				最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重 量 (g)		
146	G区	V層	石鏃	1.35	1.25	0.45	0.6	黒曜石	
147	G区	表面採集	石鏃	1.29	1.15	0.30	0.4	黒曜石	脚部一部欠損
148	G区	V層	石鏃	1.30	1.38	0.30	0.4	黒曜石	片脚欠損
149	E区	IV層	石鏃	1.39	1.35	0.45	0.4	頁岩	
150	E区	IV層	石鏃	1.90	1.50	0.50	0.6	チャート	脚部一部欠損
151	E区	IV層	石鏃	2.02	1.15	0.60	0.9	チャート	
152	G区	V層	石鏃	1.80	1.05	0.30	0.4	黒曜石	
153	G区	表面採集	石鏃	1.90	1.15	0.20	0.4	チャート	
154	E区	IV層	石鏃	1.95	1.45	0.41	1.0	頁岩	脚部一部欠損
155	E区	III層	石鏃	2.40	1.55	0.35	1.0	頁岩	脚部一部欠損
156	D区	VI層	石鏃	1.85	1.96	0.25	1.0	安山岩	
157	E区	VI層	石鏃	1.80	1.30	0.27	0.4	チャート	
158	D区	表面採集	石鏃	2.30	1.59	0.40	0.9	黒曜石	片脚欠損・姫島産
159	G区	表面採集	石鏃	2.10	1.75	0.40	1.4	頁岩	先端部欠損
160	E区	IV層	石鏃	1.49	1.20	0.30	0.4	黒曜石	片脚欠損
161	E区	IV層	石鏃	1.75	1.25	0.20	0.4	チャート	両脚部欠損
162	E区	VI層	石鏃	2.25	1.80	0.39	1.0	チャート	
163	E区	VI層	石鏃	1.70	1.50	0.45	0.7	チャート	先端部欠損
164	G区	表面採集	石鏃	2.05	1.60	0.42	1.1	チャート	両脚部欠損
165	G区	表面採集	石鏃	1.55	1.10	0.20	0.2	黒曜石	両脚部欠損
166	E区	表面採集	石鏃	1.66	1.33	0.29	1.0	チャート	脚部一部欠損
167	D区	II層	石鏃	2.70	1.30	0.40	0.5	チャート	脚部一部欠損
168	G区	V層	石鏃	1.44	1.52	3.90	1.2	チャート	両脚部欠損
169	G区	表面採集	石鏃	1.40	1.15	0.30	0.3	黒曜石	
170	G区	V層	石鏃	1.21	1.09	0.16	0.1	黒曜石	先端部欠損
171	G区	V層	石鏃	3.30	2.10	0.71	3.0	黒曜石	片脚欠損・姫島産
172	G区	表面採集	尖頭状石器	3.64	2.42	0.92	6.4	黒曜石	姫島産
173	G区	表面採集	楔形石器	2.94	3.37	1.74	13.6	黒曜石	
174	E区	IV層	楔形石器	2.40	2.40	1.20	8.4	チャート	
175	G区	V層	楔形石器	2.15	2.40	1.10	5.7	黒曜石	
176	E区	IV層	楔形石器	2.60	1.90	0.70	3.5	チャート	
177	G区	V層	楔形石器	1.85	1.40	0.70	1.7	黒曜石	
178	G区	表面採集	楔形石器	1.41	1.40	0.50	0.9	黒曜石	桑ノ木津留産か？
179	G区	表面採集	楔形石器	1.55	1.05	0.60	1.0	黒曜石	
180	E区	IV層	楔形石器	2.05	1.00	0.50	0.9	黒曜石	
181	G区	V層	二次加工有る剥片	2.25	2.05	0.69	2.6	チャート	
182	G区	V層	尖頭器	2.90	1.40	0.80	3.6	安山岩	
183	E区	IV層	尖頭器	5.35	2.30	1.15	18.2	ホルンフェルス	
184	E区	II層	石核	2.90	1.90	0.90	3.4	黒曜石	
185	E区	IV層	石核	1.65	3.60	2.65	10.8	チャート	
186	G区	V層	有孔石製品	3.16	4.28	0.52	9.9	粘板岩	袂状耳飾未製品？
187	E区	IV層	石斧	9.25	4.10	2.10	114.2	珪質頁岩	
188	G区	V層	石斧	9.35	5.18	2.25	153.6	頁岩	
189	E区	IV層	石斧	9.45	4.90	2.80	151.4	頁岩	磨石転用
190	E区	VI層	石斧	8.05	4.40	1.40	96.6	ホルンフェルス	
191	E区	II層	石斧	6.30	4.20	1.30	48.5	頁岩	
192	G区	V層	石斧	7.15	4.75	1.60	69.5	ホルンフェルス	
193	G区	V層	石斧	15.00	6.90	3.20	411.5	ホルンフェルス	
194	E区	IV層	石斧	8.30	4.60	2.98	165.4	ホルンフェルス	
195	E区	IV層	石斧	7.05	6.02	1.55	64.9	ホルンフェルス	

第7表 石器計測表2

遺物 番号	出土位置	層位	器種	計測値				石 材	備 考
				最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重 量 (g)		
196	E区	IV層	石斧	6.95	2.90	1.20	33.7	ホルンフェルス	
197	G区	V層	石斧	5.05	1.95	1.50	18.6	頁岩	ノミ状工具
198	G区	V層	石斧	7.30	2.70	1.10	29.9	ホルンフェルス	
199	E区	IV層	石斧	6.10	3.30	0.75	20.6	珪質頁岩	
200	G区	V層	石斧	7.04	5.42	2.12	108.7	頁岩	
201	G区	V層	石斧	7.50	4.95	2.40	141.3	頁岩	
202	G区	V層	礫器	6.00	6.30	1.60	64.5	ホルンフェルス	
203	G区	V層	礫器	6.05	6.40	1.85	71.6	頁岩	
204	G区	SE1層	礫器	6.20	5.65	1.75	86.1	珪質頁岩	
205	G区	V層	礫器	9.60	7.50	3.50	246.3	ホルンフェルス	
206	G区	V層	礫器	8.65	5.65	1.70	153.2	頁岩	
207	G区	V層	礫器	7.85	4.80	1.88	82.7	砂岩	
208	G区	表面採集	礫器	9.90	9.05	2.85	342.1	頁岩	
209	G区	V層	礫器	10.70	9.45	2.15	257.3	頁岩	
210	G区	V層	礫器	7.85	6.45	1.86	113.5	頁岩	
211	E区	表面採集	礫器	8.95	6.10	2.14	147.9	ホルンフェルス	
212	G区	V層	礫器	9.85	6.30	2.62	216.0	珪質頁岩	
213	G区	V層	礫器	7.95	9.70	3.80	356.7	ホルンフェルス	
214	E区	IV層	剥片	9.50	4.65	1.75	62.0	ホルンフェルス	
215	D区	II層	剥片	8.60	1.50	1.30	38.3	頁岩	
216	G区	表面採集	礫器	9.80	8.90	4.10	461.2	頁岩	
217	E区	IV層	礫器	9.45	6.15	4.57	305.7	珪質頁岩	
218	G区	表面採集	礫器	10.55	7.55	2.96	340.8	頁岩	
219	G区	表面採集	石核	7.60	6.10	3.60	215.1	珪質頁岩	
220	G区	SP14	石核	8.65	6.68	3.46	278.1	ホルンフェルス	
221	G区	SP9	磨石	13.25	10.75	5.35	1022.2	尾鈴酸性岩	
222	G区	SP16	磨石	13.30	9.30	5.20	1009.8	尾鈴酸性岩	
223	E区	IV層	磨石	12.80	9.05	5.50	720.9	砂岩	
224	E区	IV層	磨石	7.45	9.80	5.65	573.8	尾鈴酸性岩	
225	G区	表面採集	尖頭器	4.55	3.25	0.74	10.2	頁岩	
226	G区	SE3	尖頭器	4.70	3.92	0.86	16.8	頁岩	
227	G区	表面採集	ヘラ形石器	7.80	3.31	1.18	35.6	ホルンフェルス	
228	G区	SE1	使用痕有る剥片	3.31	3.15	0.81	8.8	頁岩	
229	E区	IV層	使用痕有る剥片	5.18	5.70	2.28	56.1	流紋岩	
230	G区	SE3	局部磨製石斧	6.75	3.30	1.18	34.4	頁岩	
231	G区	表面採集	石核	6.25	4.61	2.12	67.0	ホルンフェルス	
232	G区	表面採集	石核	9.00	5.20	2.65	101.0	頁岩	
233	E区	IV層	剥片	6.40	6.11	1.41	65.8	流紋岩	
234	E区	IV層	剥片	7.80	6.70	1.85	98.9	珪質頁岩	
235	E区	IV層	剥片	2.95	4.60	0.93	10.9	流紋岩	
236	E区	IV層	剥片	7.56	6.71	2.13	105.7	ホルンフェルス	接合
237	E区	IV層	剥片	7.65	6.05	3.42	150.3	ホルンフェルス	
238	E区	IV層	剥片	8.15	6.50	2.82	100.6	ホルンフェルス	

第Ⅳ章 まとめ

内城跡の調査では、旧石器時代から近世までの遺構や遺物が確認された。また、字名に残る中世城郭としての内城の姿も、その縁辺部ではあるが垣間見ることができた。そこで本章では、一定量の遺構や遺物を確認した旧石器時代・縄文時代早期・古代・中世について、調査の成果をもとに考察を加えることをもってまとめとしたい。

1 旧石器時代および縄文時代草創期

先にも述べたように当該段階の遺物については、使用石材や技術・形態の様相から認定したものであり、原位置遊離資料の枠を越え出るものではない。とはいえ、確認できた資料は以下に述べる種々の特徴から宮崎地域の当該段階への理解に寄与する資料といえる。225・226などの尖頭器の位置付けに関しては、現在九州島内のみならず、汎列島あるいは東アジアレベルでの比較検討作業が望まれている最中でもある。今後多方面からの検討を与えるべき資料といえよう。227はやはり後期旧石器時代初頭の所産と考えられるが、ツール類の出土の乏しいわが県の状況では稀有な存在と評価できる。以上3点の資料はいずれも近隣地域における同段階石器群の良好な出土事例に待つところが大きい。

230は近年わが県においても資料の増加がみられる、縄文草創期あるいは「神子柴文化」に関連する可能性が指摘される資料である。その他の資料の時期判定は主に使用石材の観察所見による。県北地域産との公算が高い白色の流紋岩などの流通を議論する際の一資料となりうるものとする。

2 縄文時代早期

縄文時代早期の遺構・遺物は、D・E・G区で確認された。遺構としては集石遺構・炉穴・礫群などが検出されるとともに、遺物として縄文時代早期前半から早期後葉の土器片や石鏃、楔形石器、局部磨製石斧などの石器類が出土した。

(1) 遺 構

集石遺構14基と炉穴22基および土坑1基を検出した。

集石遺構

調査区全体で検出された集石遺構14基のうち13基が土坑を有していた。しかし、土坑底面の配石については、14号集石遺構で約15cm前後の不揃いな礫を曖昧に配した状態で検出されたことを除いては配石をもたないタイプであった。

個々の遺構の集積状況の観察結果からは次の3点の特徴が見られた。

- 1) 構成礫の大半が長軸10cm前後の亜円礫と亜角礫である。
- 2) 長軸が20cmを越える比較的大きな礫が混在する遺構は7基（S I 1、3、7、8、9、11、14）しかなく、その混在状況も1つの遺構で平均約1.7個程度と低い。
- 3) 構成礫の集積密度も全体的にはそれほど高いとはいえない。

しかし、E区で検出されたS I 7～10の4基が他と比較するとやや集積密度が高く、共通しておおむね南北方向に長軸をもつ不整形な楕円状の土坑を有していることや、そのうちS I 7～9が三角形をなす形で隣接して検出されたことは興味深いことである。

内城跡の丘陵斜面には段丘礫層の露頭が随所で確認される。集石遺構の構成礫の調達は、おそらくはその大半がこれらの露頭で行われたものと推測できる。

炉 穴

G区で検出された炉穴は計22基を数え、このうち4基を除きなんらかの形で切り合い関係を有している。通常想定されているブリッジは残存しておらず、土層断面観察からも特にその存在を示唆する積極的な根拠は得られなかった。だが、切り合い関係やその選地などからはいくつかの興味深い所見を得ることができた。当遺跡で検出された炉穴は焼土の分布域がその認定に大きく寄与しているが、その位置から炉部と足場を推定することができる。そうした推定をもとにその方向性を検討すると、炉部の位置は厳密に方位に規定されているわけではなく、比較的ランダムな在り方をしているようにも思われる。また、その選地についても北側斜面に展開するものや、逆に南側斜面に展開するものも認められる。

おそらくここでひとつの規定要因となっているのは炉穴が構築される場所の傾斜を主とした微地形であり、そのことは単独で検出される炉穴もしくは切り合い関係を有する一群のなかで最初に構築された炉穴の共通性、その後に展開する炉穴の多様性に注目することから理解の糸口が掴める可能性が高い。

次にこれらの炉穴の編年の位置付けについて述べたい。4基の炉穴からサンプリングした試料の自然科学分析の結果を示したものが次の第8表である。

第8表 放射性炭素年代測定値一覧表

試料名	^{14}C 年代 (年 B P)	$\delta^{14}\text{C}$ (‰)	補正 ^{14}C 年代 (年 B P)	暦年代 (西暦)
炭化物 G区 S P 3	9190±50	-26.1	9170±50	交点 : cal BC8305 1 σ : cal BC8440~8285 2 σ : cal BC8530~8270
炭化物 G区 S P 8	9160±50	-24.2	9170±50	交点 : cal BC8305 1 σ : cal BC8440~8285 2 σ : cal BC8530~8270
炭化物 G区 S P 10	9300±60	-26.2	9280±60	交点 : cal BC8540 1 σ : cal BC8600~8440 2 σ : cal BC8640~8300
炭化物 G区 S P 12	9120±50	-27.3	9080±50	交点 : cal BC8275 1 σ : cal BC8290~8255 2 σ : cal BC8310~8230

得られた推定年代は、同じく炉穴埋土中から検出された貝殻文円筒形土器群の現行編年の大勢と整合的であり、炉穴の構築年代は縄文時代早期前半に収まることになる。

(2) 遺 物

土 器

今回の内城跡の調査では、縄文時代早期前半の貝殻文円筒形土器や早期後葉の平椀式土器などが出土した。しかし、調査の対象範囲がおもに台地の縁辺部であったせいも、区ごとに土器の出土状況には相違が見られる。その要因としては、土層の堆積状況の不均一や、調査区間の比高差なども多少なり影響しているものと考えられる。その状況を簡単にまとめると次のとおりである。

D区：下剥峰式土器と押型文土器の2種類の土器のみが出土。

E区：集石遺構の付近を中心にして、貝殻文円筒形土器のみが出土。

知覧式土器と無文土器についてはこの調査区のみで出土。

G区：削平の影響を受けず鬼界アカホヤ火山灰が残存していた中央部と南東部の同火山灰堆積層の下位層から炉穴や礫群に伴う形で貝殻文円筒形土器が出土。

平椀式土器はこの調査区のみで出土。

遺物の出土状況のみで多くを語ることはできないが、これらの傾向から、D区は恒常的に人々の生活の場であったというわけではなく、早期前半の終末という限られた時間幅での生活空間であった可能性を指摘しておきたい。また、開析谷を挟んで対峙したE区とG区の2つの調査区で知覧式土器と平椀式土器の出土がそれぞれに偏在したことは、それらを有した集団の生活空間が地形的・地質的要因により台地縁辺部では変位したことも考えられる。

出土した土器については、第Ⅲ章第3節で類型化を図ったが、ここでは遺物観察の結果をもとに類型に沿って若干の考察を加える。

I・II類とした83～94は大きくは前平式土器に相当するものである。しかし、I類とした83については風化気味の口縁部が小波状口縁と認められること、胴部にナデ気味の細い条痕が残ること、口縁端部が内部に向かってわずかに傾斜していることなどから、岩本式土器の特徴を有すると判断しI類として独立させその他のII類と類別した。

III類およびIV類の土器は、木崎康弘氏が設定した中原式土器の範疇に帰属する貝殻文円筒形土器に相当する（木崎 1998）。遺物観察の結果からは、87～94までのII c類が中原I式、IV b類が中原V式と考えられるが、胴部上位に施文が限定される中原II式や押し文による施文が特徴となる中原IV式に該当する個体は認められない。しかし、中原III式に関してはIV a類の横方向の条痕文を有する一群のいずれかがそれに比定できるものと推測される。なお、中原IV式土器についてはそれに、該当する口縁部付近の土器片が調査区に隣接する畑で表面採集されていることも付け加えておきたい。

V類の知覧式土器は、円筒形の胴部片の他に角筒形の胴部片（118）と底部片（119）も確認されているが、両者とも角部の作出が直角よりもやや大きい。特に底部片については角部が2つのみでレモン状の底部となるタイプである可能性も指摘しておきたい。

VI類の下剥峰式土器の一群のうち、120については同様の施文を口縁部付近にもつ個体が内屋敷遺跡で出土している。しかし、内屋敷遺跡で出土した個体の口縁部付近が緩やかに外方に向かいながらも胴部と同じ程度の器壁厚を保つのに対し、120では口唇部付近にかけて肥厚し最大幅を有しかつ内湾気味となる特徴をもつ。これは121～124に見られる特徴と共通しており、施文は共通性をもちながらも内屋敷遺跡出土の個体に後続するものと考えられる。

VII類は早期後葉に位置付けられる平椀式土器で、すべてG区で出土している。高橋信武氏による形式設定による平椀II式土器の範疇に収まると考えられる（高橋 1997）。

VIII類は押し文土器であり、このうち136と139が口縁部付近の破片である。139は内外面の丁寧な施文が特徴的であり、外方に向かって開きながら直線的に伸びていく器形から、底部が尖底となる早水台式土器の系譜上にあるものと想定できる。対して139のやや粗な感じを受ける施文については、在地系の所作かと思われるが、今後の資料の蓄積を待ち判断することとし、課題としておきたい。

IX類の無文土器は、下剥峰式土器と同レベルで出土したが、本遺跡からは1点のみの出土であり検討材料に乏しいことから事実報告のみにとどめる。

以上が遺物観察をもとにした考察であるが、調査区外のゴボウ畑で塞ノ神式土器の細片も数点が表面

採集されていることも最後に付け加えておきたい。

石 器

出土土器の様相と照応させつつ、出土石器の評価を試みると、大略以下のような総括が可能である。まず、石鏃、尖頭器、楔形石器などの小型剥片石器群については、概ね縄文時代早期前半の貝殻文円筒形土器群に伴い、一部早期後半に下るものを含むものと考えられる。一方、大型の石器群も、貝殻文円筒形土器群とともに炉穴埋土中より検出される例も認められ、大半はこの時期に帰属するものとの判断が妥当であろう。掲載した資料には中世の造成土や表面採集のものも少なからず含まれるが、縄文早期前半の生活の具体相を反映するものとみて大過はないものと考えられる。そうした場合、浮かび上がってくるのは石器組成に占める礫器の卓越性である。これらの礫器類の再評価が進められつつ現状でもあり、今後その機能・用途などの解明に意が尽くされるべき資料群の一つと評価できよう。翻って、石匙や異形石器などはいずれの地区においても確認されておらず、石器組成と立地の関係など今後追及すべき課題が提出された。また、1点のみ検出された有孔石製品は珧状耳飾の未製品とも考えられ、その製作過程を知る好材料を提供することになった。

古 代

古代の遺構・遺物はE区で検出された1号竪穴住居跡とそれに伴う遺物のみであり、内城跡における古代の様相は推察しがたい。しかし、今回の調査区が台地の縁辺部であったにもかかわらず古代の人々の足跡を見出すことができたことから、付近に古代の遺構・遺物が残存している可能性があることを指摘しておきたい。

中 世

城郭遺構として実見できる内城跡の姿は、第Ⅲ章第1節で縄張り図(第7図)をもとに述べたとおりであるが、この城跡の名は文献等では散見されることがなく、現状で確認できる遺構・遺物の他はその実像を詳びらかにする糸口に乏しい。そこで、この城跡の全体像を少しでも明らかにしようとする立場から、その立地や現存する遺構配置を考察するための3つの課題を設定し、順に整理しておきたい。なお、遺構の呼称については第7図の縄張り図中の遺構番号を踏襲する。

1) 曲輪Ⅱの解釈

曲輪Ⅰ・Ⅱは、ともに耕地化が進み往時の旧態を知る手がかりは失われつつある。曲輪Ⅰは遺構配置等からの主郭としての位置付けが可能であるが、それとは対照的に面積的にはやや優勢であるはずの曲輪Ⅱは、平面的に見る限り空堀1と接点をもつ以外に主だった防御施設の遺構が残存しない。それゆえ、その性格の判断材料に乏しく、全体の中での位置付けが不明瞭である。そこで、地表面観察から曲輪Ⅱの意味を読み取るためには、踏査により確認できた丘陵の端部加工の様子と現存する地形的特徴からの推察によるアプローチが最も有効であると考えられる。以下に、その考え方に基づいた曲輪Ⅱに対する知見を述べる。

虎口aを挟み北に位置する曲輪Ⅴと対峙する曲輪Ⅱの北西部では、虎口aへと連絡する城道が確認できる谷の方に向かって段落ちする特異な地形が見られる。レベル的には曲輪Ⅴとほぼ同じであり、両曲輪は虎口aを南北から挟み込む位置関係にある。また、空堀1の西端に見られる曲輪Ⅱの側からの張り出し部は、一部が崩落しているがこの段落ちの一番低い部分と連絡するように曲輪Ⅱ

の切岸の法面に沿って南西方向へと回りこんでいる。関連して、谷筋の城道の抑えとしては、南西端部からのびていく尾根の最端部に曲輪Ⅸが配されている。これらのことから、曲輪Ⅱのおおよそ西半分の端部加工は、曲輪Ⅴと連携した堅固な虎口空間の形成と城道を抑える役割を果たしていたと考えられる。同時に、曲輪Ⅱの東半分に目を転じると曲輪Ⅳと曲輪Ⅷが東方向と南方向に取り付き、東にのびる尾根筋と谷筋の抑えとなっていることも注目できる。

次に、もう一つの問題として、この広い空間をどのように機能分化させていたかということであるが、これについては区画を想定できる遺構が皆無であることから言及することはできない。

しかし、曲輪Ⅱの東半分のレベルが全体の中で相対的に高いことや中世の土師器の破片などが農作業道路付近から東側で比較的多く表面採集できるという事実から、客土などによる偶然の所作によるものであることも否定できないものの、曲輪の東半分に居住空間などに代表される主たる機能をもつ空間が存在した可能性があることを指摘しておきたい。

以上のことを考え合わせると、曲輪Ⅱは、主たる経路としての谷筋から虎口 a への抑えを堅固なものとするとともに、開析谷に囲まれた複雑な様相を見せる丘陵の尾根筋や谷筋の主な経路を断ち切り、曲輪Ⅰへの求心性をより高めるための機能を負わされた曲輪であるといえるであろう。

2) 城地選定の理由

現在内城跡が位置する周辺の景観は、宅地造成や道路の新設などにより大きく変貌を遂げようとしている。しかし、現在も人々の往来し集散するこの地は、城郭を築く場所、すなわち城地としても大きな意味をもっていたものと思われる。

内城跡が立地する丘陵を挟んで、現在も南北に2本の道路がある。いずれの道路も幹線道である国道219号から分岐するもので、北ルートは西野久尾から久保土を経て、そしてもう1本の南ルートは信成町から北伊倉を経てともに西へと延びる。この2本の道路は船野地区で合流し、中世に伊東氏の本拠となった都於郡城跡がある都於郡町へと続いていく。そして現在でも、北ルートの途中には秀吉の九州仕置による国割以前の前佐土原領主島津氏の墓などの史跡があったり、南ルートには内城跡と同じ中世城郭である南岳原城跡があったりすることから、中世あるいはそれ以前から主要な交通路として存在していたものと思われる。また、戦国期末に佐土原城・都於郡城・宮崎城という3つの拠点をもった伊東氏に関連した人や物の動きを想定すると、この2つのルートは大きな意味をもち城構えをしてその動きを掌握しようとすることは自然な所作といえる。

内城跡が位置する丘陵はこの2つのルートの人や物の動きを見て取るに十分な場所であり、要害としての城地の条件を満たすこともさることながら、選定にあたっては交通の要衝を抑えるという観点が大きく作用したものと思われる。

3) 出土遺物から見た内城跡

内城跡からは、糸切り底の土師器、白磁、青磁、青花などが出土したが、中世の遺物は量としては相対的にそれほど多いとはいえず、なかでも陶磁器類は出土量が極めて少ない。これは、この城跡の存続時期を検討する上では乏しい材料と言わざるを得ない。また、出土の状況としては堀切の埋土から出土した遺物をもっとも多く、埋土中からの出土や表面採集された遺物については細片が多いという傾向にあったこともここで付け加えておきたい。

陶磁器類に関しては、15～16世紀の時代幅に収まるものがほとんどである。31の青花はG区での

表面採集遺物で、碁笥底の底部がわずかに残存している。小野正敏氏の分類によるC群に属する遺物であり、確認された青花はこの1点のみである。また、32の青磁は、高台内が無釉であり、高台外周面の中位が隆起する特徴から15世紀に位置付けられるD類の端反碗の底部と思われる。青磁については、このほかにも数点が表面採集により確認されている。

細片が多い陶磁器類のなかで、3号溝状遺構の埋土中から出土した4の白磁碗の存在は特筆されるべきものである。この白磁は、高台より上から体部下位にかけて器表調整のためのカンナによる粗い放射状の削り痕を残し、低めの高台の内面端部を粗く削り取る特徴を有する。また、白濁した釉と見込みに施された印花は比較的大きなものであり、合わせてこの白磁碗を特徴づけるものとなっている。今のところ、県内に類例を求めることはできず検討を要する。

土師器に関しては、糸切り底の底部をもつものが大半を占めるが、細片が多く確実にヘラ切りと認定できるものは確認できなかった。

最後にG区で集中して出土した銭貨についてであるが、銭貨名が確認できた56枚の構成を見ると北宋銭が83.9%を占め、残りが唐銭と南宋銭である。北宋銭としては皇宋通寶が最も多く、ついで熙寧元寶、元豊通寶が続く。最新銭は南宋銭の紹定通寶（初鑄年1228年）である。しかし、戦国期に多く見られる洪武通寶と永楽通寶が混在しないことや限られたごく狭い範囲で集中出土しているものの土坑などの遺構を伴わないことなど、城郭遺構との直接的な関係を見出すのはむずかしい。

以上、3つの課題に沿って内城跡について考えてきたが、このほかにも城跡と対応する麓集落の存在の有無や文献等にその名を留めない理由など不可解な点も数多く残されている。しかしながら、空堀1や空堀2から読み取れる堅固な守備を主眼においた大規模な普請を迫られた背景にある社会情勢としては、この地にあっては戦国期の伊東氏と島津氏の対峙から生まれてくる緊迫感を差し置いて想定し得ない。このことからしても、現存する城郭遺構の大半は16世紀の所作であると思われる。

おわりに

今回の調査では、内城の地において旧石器時代から綿々と続く人々の生活の様子を断片なりとも垣間見ることができた。そして、字名として内城の名を残すのみでその実体が明らかにならなかった内城跡の城郭遺構としての姿を、地表面観察と発掘という2つの手法から少しでも明らかにできたことや、縄文時代の早期前半を中心とした遺構・遺物を確認し、周辺遺跡との比較資料としての蓄積ができたことなどが一応の成果としてあげられる。

内城跡の一部は今回の調査により記録保存の形をとり消失した。しかし、遺構の大半は耕地および山林であり、これからも現状のまま保存されていくことを強く切望する。今後は、文献史学との連携など、多角的な側面から周辺の中世城郭遺構との比較検討作業をとおして、現時点では文献などにその名を残さない内城跡の実像をより明らかにしていくことが大きな課題として残されている。

参考文献

- 木崎 康弘 「中原式土器について」『九州縄文土器編年の諸問題』九州縄文研究会 1998
宮崎県埋蔵文化財センター 『内屋敷遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第14集 1999
高橋 信武 「平椀式土器と塞ノ神式土器の編年」『先史学・考古学論究Ⅱ』龍田考古会 1997
小野 正敏 「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究 No.2』日本貿易陶磁研究会 1982



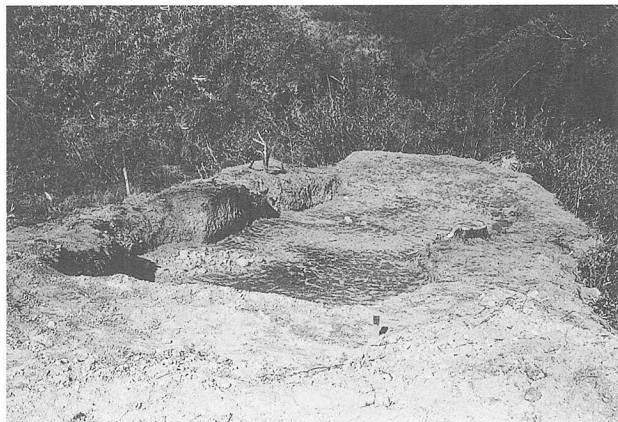
内城跡全景（南東上空から）



G区全景（北上空から）



A区全景 (E区から)



B区全景 (南から)



C区全景 (尾根部分)



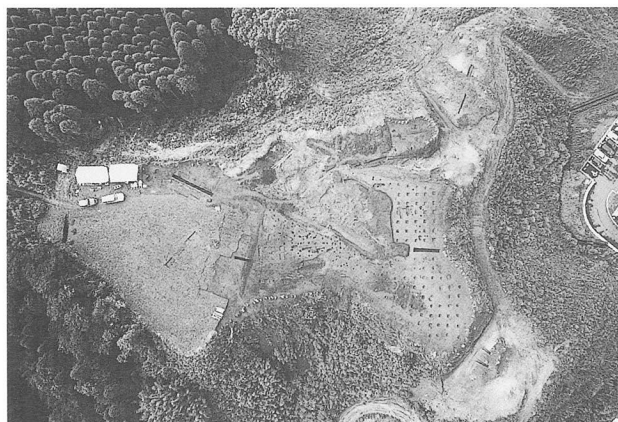
D区全景 (E区から)



E区全景 (北上空から)



F区全景 (湧水により崩落するトレンチ)



G区中世遺構検出面 (垂直)



G区縄文時代早期遺構検出面 (垂直)



1号溝状遺構 (SE 1、G区)



1号溝状遺構埋土状況



2号溝状遺構 (SE 2、G区)



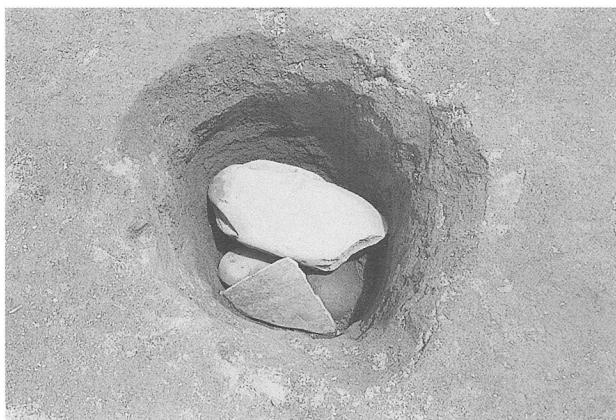
2号溝状遺構埋土状況



3号溝状遺構 (SE 3、G区)



3号溝状遺構埋土状況



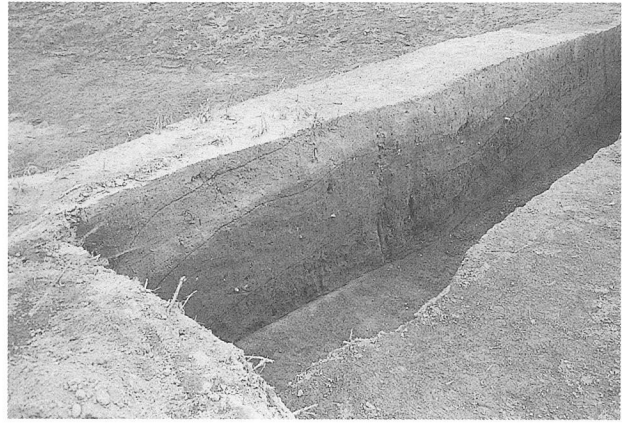
1号掘立柱建物跡 (SB 1、G区) 3号柱穴根石検出状況



1号竪穴住居跡完掘状況 (SA 1、E区)



縄文時代早期遺構検出面 (G区、I5・I6グリッド付近)



鬼界アカホヤ火山灰 (K-Ah) 堆積状況 (G区、T3)



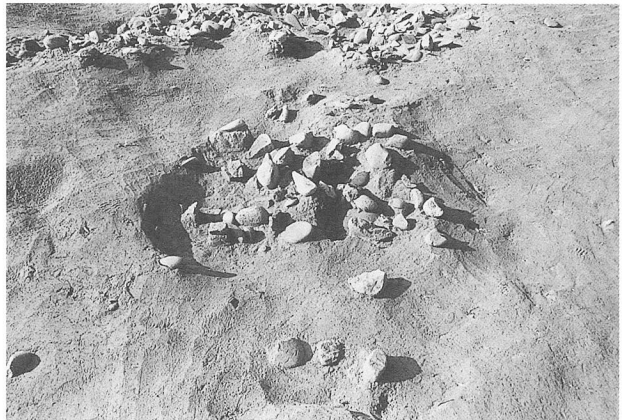
礫群検出状況 (G区、E10グリッド付近)



礫群検出状況 (G区、I5・I6グリッド付近)



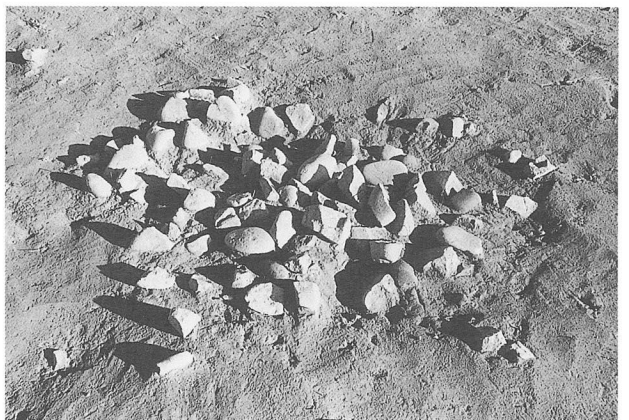
1号集石遺構 (S I 1、D区)



2号集石遺構 (S I 2、D区)



3号集石遺構 (S I 3、D区)



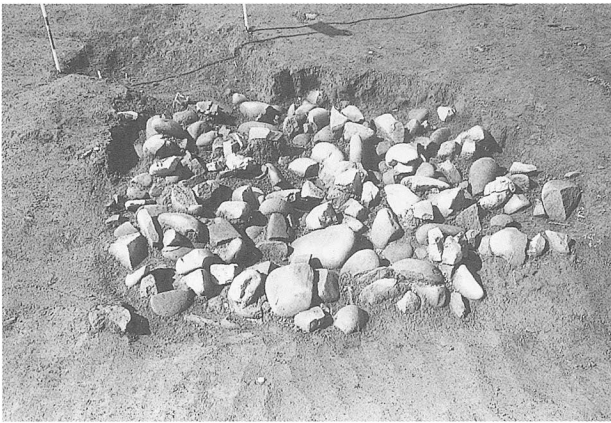
5号集石遺構 (S I 5、D区)



6号集石遺構 (S I 6、D区)



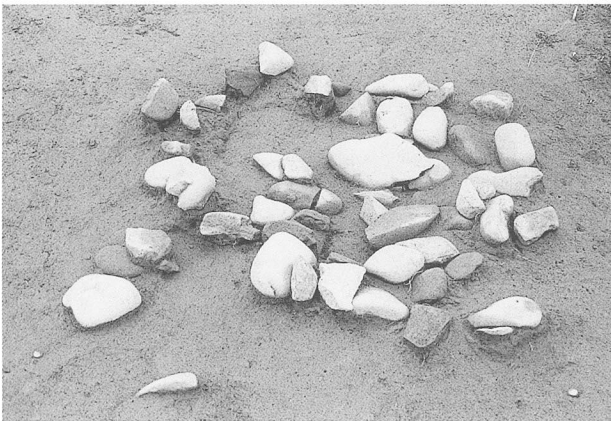
7号集石遺構 (S I 7、E区)



8号集石遺構 (S I 8、E区)



9号集石遺構 (S I 9、E区)



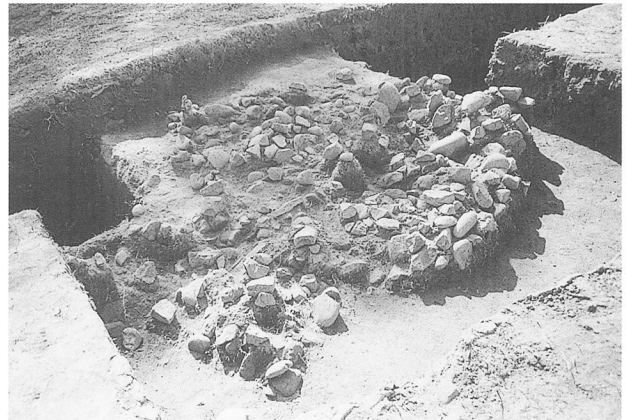
11号集石遺構 (S I 11、E区)



12号集石遺構 (S I 12、G区)



13号集石遺構 (S I 13、G区)



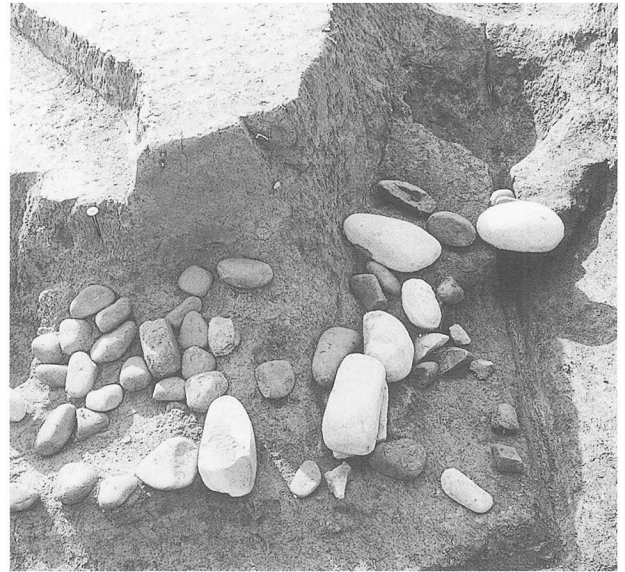
14号集石遺構 (S I 14、G区)



2～9号炉穴完掘状況（G区、H5グリッド）



I 6グリッド付近遺構分布状況



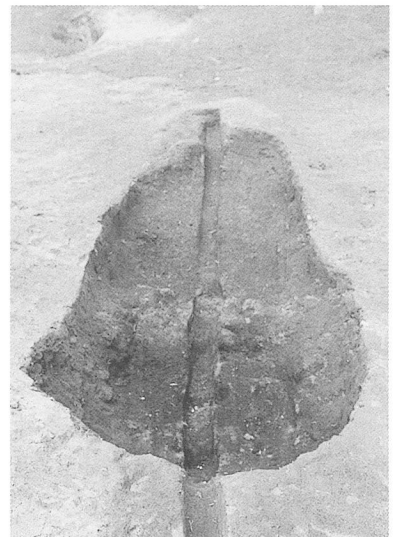
6号および7号炉穴内礫検出状況

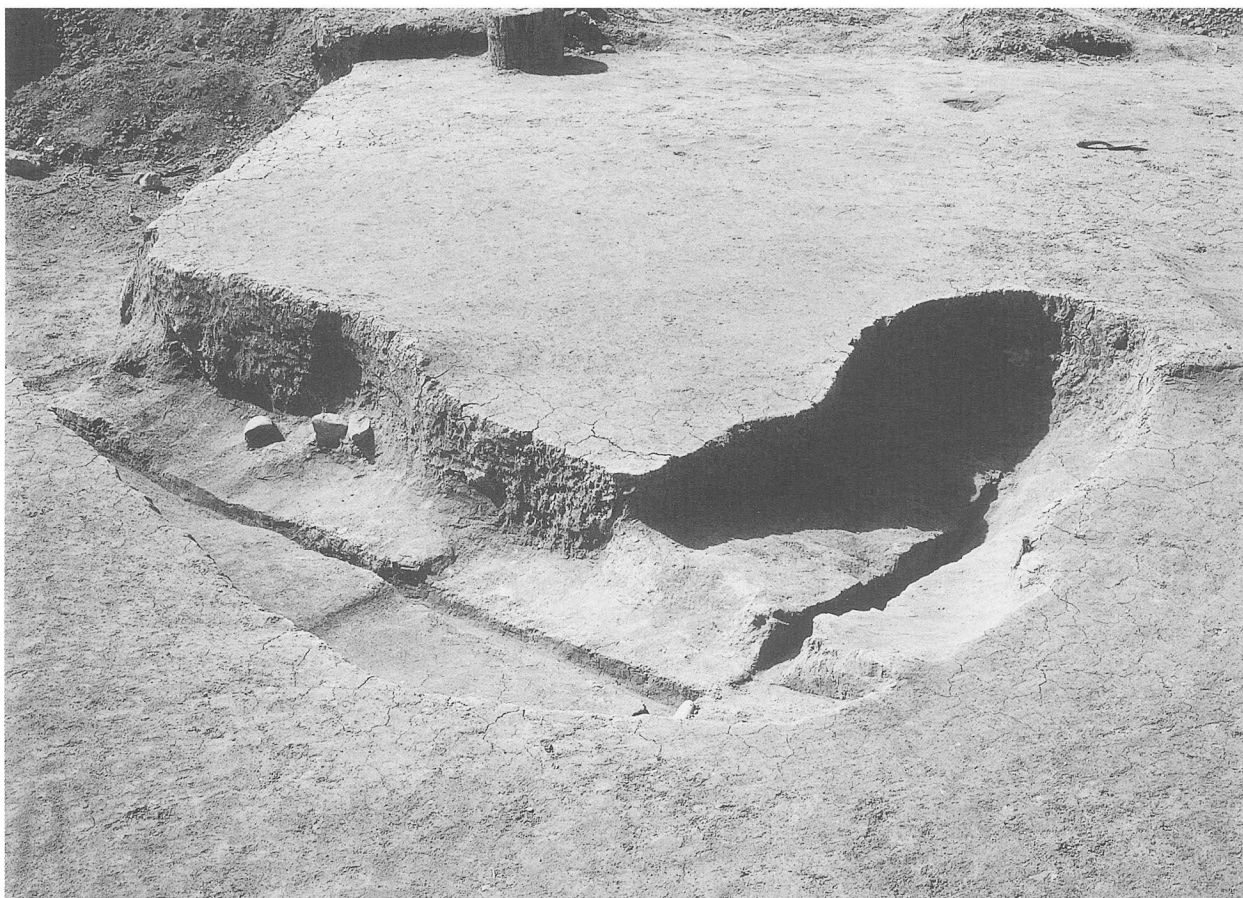


16号炉穴完掘状況

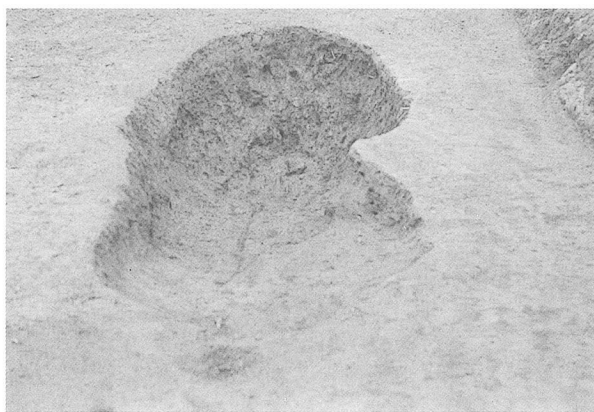


17号、18号炉穴完掘状況（左：南から、右：北から）





10~12号炉穴完掘状况



1号炉穴完掘状况



2~4号炉穴完掘状况



9号炉穴完掘状况



10号炉穴完掘状况